
The Shadow of VIOLETWING — 昏き翼の紫影 —

みけぺん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Shadow of VIOLETWING 一昏き翼の紫影

【Nコード】

N4865P

【作者名】

みけぺん

【あらすじ】

『クロウカード』を『さくらカード』に変え、カードキャプターとしての使命を終えたさくら。ルキアの処刑を阻止し、現世で死神代行として戦い続ける一護。二人はそれぞれの居場所で、それぞれの日常を過ごしていた。

だが、ふとしたきっかけから二人は出会い、その日常が大きく崩れ始める。何も知らないさくらに付きまとう不穏な影。一護は、そんな彼女を守ろうと奔走する。現世に何が起きているのか？ さく

らが狙われる理由とは？ 謎に包まれたまま事態は互いを取り巻く仲間達にまで及び、やがて尸魂界をも巻き込む大きなうねりへと発展していく――

CLAMP作品『カードキャプターさくら』と、WJ系漫画『BLEACH』のクロスオーバー。リハビリ習作としての再スタートになりますが、よろしければどうぞお付き合いくださいませ。

オーパス・マイナスワン

皆様、どうもおはようございます、こんにちはこんばんは。そして初対面の方は初めまして。

二次創作小説「The Shadow of VIOLETTWIN G―昏き翼の紫影―」を執筆させていただく、みけぺんと申します。

ジャンルを見て分かるように、こちらはCLAMP先生作品『カードキャプターさくら』とWJ連載中・久保帯人先生作品『BLEACH』のクロスオーバー小説となります。

そして、回りくどいですが本編に入る前に「どうかこれだけは踏まえてほしい」という補足を綴らせていただきます。

サブタイトル打っていますが要は長い長いまえがきです。

スルーしても問題ないので、早く本編が読みたい！という方は、お手数ですが次話から閲覧をお願いいたします。

まず、各作品の背景について。

『CCさくら』については、時間軸としては原作が終了したその後という設定です。

正確には、クロウカードがさくらカードに変わってから四年後。さくらたちは中学二年生、桃矢と雪兎も大学に進学しています。

小狼はすでに香港から戻ってきていて、以前と同じようにさくらたちと同じ学校へ通っていることになっています。

エリオルや観月先生はイギリスに暮らしています。

それと、CLAMP先生による次作品『ツバサ』『XXXHOLiC』の内容に『CCさくら』の登場人物が直接関与しているというような表現がありますが、ここではどちらの話とも関係ないものと

して読んで下さい。

『BLEACH』については、尸魂界編と破面編の間という時間設定です。

一護たち現世組は尸魂界から戻り、学校の夏休みが明けてすぐの時期です。

一護は正式に死神代行を認められていますが、ルキアは尸魂界にとどまっているので最初は登場しません。

『CCさくら』同様、基本的に原作に沿っていますが、以降の部分はこの話の都合上設定を変えさせてもらいました。

まず夏休み明けと書きましたが、平子はまだ転入してないことになっています。

さらに原作では、石田は滅却師の力を失ったことを他の人に隠していますが、この話ではすでに（一護たちの間では）公認の事実としました。

『CCさくら』の舞台である友枝町と、『BLEACH』の舞台である空座町は隣町同士ということになっています。

どちらの作品も、原作コミックがベースです。アニメ及び劇場版のみの登場キャラや設定・エピソードなどは、原則として取り入れていません。

ただし、私が考えたオリジナルキャラや用語がいくつか登場します。それらについては話の進行にしたがって少しずつ紹介していくつもりです。その上で、できる限り原作のイメージを崩さないよう努めて書いていきます。

二作品のクロスオーバーですが、本編の雰囲気自体は『BLEACH』の作風に偏ります。

そこで各話にサブタイトルを英語（あるいはその他の外国語）で付けますが、文法的におかしいタイトルになる可能性があります。そ

の辺はできれば大目に見るか、なんかおかしいと思ったら遠慮なくご指摘いただければと思います。

また、作中において視覚的な効果を狙ったルビ振りなどが多用されたりします。

PC閲覧では大した問題はないと思いますが、携帯電話の場合は逆にかなり読みづらくなることが予想されますので、ご了承くださいませ。

それからもう一つ。

この作品は数年前、他で開設された小説投稿サイトにて連載していたものを、推敲と修正を加えた上で再投稿させて頂いております。さらに言うと、その作品は数年たった今も未完結で連載休止となっております。

しかし、昨年（2009年）にこちらのサイトにてとある被害に遭ったこと、あとは他の作品を執筆していて自分の文章のセンスに限界を感じ、原点に戻って力を付け直したいと思ったのを機に、こちらへの転載を決意しました。

当作品は修正しつつ一話から再連載します……が、今度こそ無事に完結できる、という保証はほぼ皆無です。

というより、先に投稿していた分を修正するので手いっぱい、さらに続きを書いていくのは無理かと。

また、こちらのサイトで他にも執筆している連載を抱えておりますので、優先順位が前後することも考えられます。

最後に、当たり前ですが当作品は無断転載・改変等の行為は一切認めません。盗作なんてもってのほか、発覚した暁には容赦なく叩きのめしますのでそのつもりで。

こんなコンセプトで組み立てていく話ですが、よろしければお付き合いですませ。

OVERTURE

雨が、降っていた。

ざあ——、と単調な音を立てて、冷たい雨が大地に降り注いでいた。その音に混じって、嗚咽が聞こえた。

しゃくり上げるような嗚咽は、何度も途切れ、雨音に掻き消され、溶け込んでいたが、その音に込められた感情を確かに主張していた。嗚咽の主は男だった。

年齢で言えば、中年といったところであろうか。

長い藍色の髪を背中で束ね、細いお下げにしている。身に着けた服は独特だが、中国風に偏っているのが分かる。

男は、両腕に何かを抱えるようにして座り込んだまま、嗚咽を漏らしていた。

目から流れ落ちる熱い涙は、冷たい滴に洗い流され、すでに雨水と区別がつかなくなっている。

自分でも泣いているのかどうかすら分からなくなりそうなほどに、ずぶ濡れになりながらも、男は肩を震わせ、腕の中のものを抱きしめて、泣いていた。

「……柞花……！」
いすか

嗚咽と雨音の合間に、男は搾り出すように呼びかけた。

応える者は、どこにもいない。

ただ、その背中を見つめる目があった。

一人の幼い少女だった。

そして、佇んだその少女の足元、無数の波紋が広がっていく雨水が溜まった地面の上に人間の体の一つ、横たわっていた。

肩口で切り揃えた黒褐色の髪が特徴的な女性。

純白の清楚な洋服を纏った女性は地面に突っ伏し、布地が水を吸って体の輪郭が透けるほどになっても、ぴくりともしなかった。

水溜りへかろうじて移り込んだ瞳は、瞳孔が開き、全く生気が感じられない。

地面へ放り出された腕にも血の気はなく、蝋人形のように硬く、蒼白い。

——そう。それは、魂の抜けた、物言わぬ死体だった。

だが少女の意識は、足元に転がったその死体よりも、視線の先で嗚咽を漏らす男の腕の中の者のほうに向けられていた。

男の腕の中にも、女性の体が抱えられていた。

肩口で切り揃えられた黒褐色の髪。瞳孔の開ききった半開きの目。どの特徴をとっても、少女の足元に転がる死体のそれと、全く同じだった。

異なるのは、男が抱える女性は黒い喪服を思わせる着物を着ており、体の真ん中に、何かで貫かれた痕のような穴が空いていて、そこから赤黒い鮮血が止め処なく溢れ出しているということだった。

しかし、少女は見ていた。

雨水に覆われた地面に映る景色の中には、男の姿しかなく、腕の中の女性は、輪郭すらもそこに反映されていないという、奇妙極まりない光景を。

少女は、ただただ黙って、見つめていた。

少女は、雨に冷えて僅かに震える唇を開いて、か細い声を発した。

「……父さん？」

男は呼び声に見向きもせず、ただただ嗚咽を漏らし続けた。

その姿を、紫色をした少女の瞳が鏡のように映し出していた。

この日、一人の女の命と引き換えに、一つの妄執に駆られ、一人の男が悪魔と化した。

そして、その妄執を引き継いだ一人の少女が、二つの力の元に、昏い影を世界に投げかけることとなる。

魔術師クロウ・リードの生まれ変わり、柊沢エリオルひいらぎなわが日本からイギリスへ帰国し、
護廷十三隊五番隊隊長・藍染惣右介あいぜん そうすけが、崩玉ほうぎよくを手にして尸魂界ソウル・ソサエティから虚圈へと渡る、
五十年ほど前の話である。

アバウト ファイフティ イヤーズ アゴー
ABOUT FIFTY YEARS AGO
一雛鳥は孵った一

OVERTURE（後書き）

分かりにくいけど一番最後がサブタイトル。
余韻を残したくて今回改訂しました。

Opus ONE

そこにあつたのは、白亜の塔だった。

気の遠くなるほどに白く、高い高い塔が、その世界の中心だった。

白亜の塔は、己の存在する世界を余す事無く見渡すかのように、静かに、厳かに、そこにそびえ立っていた。

塔の先端に広がる空は、闇に染まっていた。

しかしそれは、夕闇や夜闇といったありきたりな濃さの闇ではない。まるで水気のない絵の具をそのまま画用紙に満遍なく塗りたくったかのように、空は真っ暗に、真っ黒に染まっている。

世界を見下ろす広大な空は、黒々と蠢く濃い闇に塞がれ、一切の光に属するものが、そこで遮断されていた。

暗雲すらもその闇に飲み込まれたかのように、影も形もなかった。

その塔の足元に人影があつた。

白亜の塔に比べたらあまりにもちっぽけな、低い低い建物の屋根。

そこに、こちらへ背を向けるようにして、人影は佇んでいた。

その人影も、あまりにちっぽけだった。

だがその人影は圧倒的な存在感を放って、そこに立っていた。

僅かな風に吹かれて、その人影の纏う黒が、ひらひらと靡いた。

袖や裾のゆったりとした、黒の着物——それが、人影の纏う物だった。

そして人影は片手に何かを握っている。

刃物だ。

刀身の出鱈目に大きい、出刃包丁を思わせる刃物。

刀身も黒々としていて、柄に巻きつけられた包帯のような布の白が、その黒さを辛うじて緩和しているかのようにだった。

大きさからして、相当な重さであろうことは分かる。

だが人影は、重力すら感じないかのようにその刃物をしっかりと手

にし、ぐいと持ち上げて、峰の部分を下にして肩へと担いだ。
柄から伸びた白い布が風に吹かれて、黒い着物の裾と共にゆらゆらと揺れる。

同時に、その人影の中でいっそう目立つ、鮮やかなオレンジ色の髪も僅かに揺れていた。

不意に、気配を感じ取ったかのように、人影の肩がぴくりと動いた。人影はその気配の出所を確かめるため、ゆっくりと、顔を振り向かせる。

そして――

迷いのない真摯な光を宿したブラウンの瞳と、目が合った。

>i16855—543<

Parallel Lines [side..CHERRY]
——少女の日常——

ピピピピピピピピピピピ

「ほええ!!」

突然耳元で響き渡った甲高い電子音に、さくらは跳ね起きた。

そして、目の前に広がるいつもと変わらない部屋の光景にしばし呆然として「……ほえ？」と呟く。

閉じられたカーテンから漏れる光しかない仄暗い部屋で、音が鳴り続けている。

「……ゆ、夢かあ…」

寝惚けてしまったことに一人照れつつ、音の源である目覚まし時計のボタンをぼちりと押す。

途端に音は止んで、朝の静けさが部屋に戻った。

すると、からり、という音がして、部屋の隅に置かれた勉強机の引き出しがひとりでに口を開ける。

「なんやー？ 朝っぱらから騒がしいなあ」

ひよこ、と引き出しから顔を出したオレンジ色の手の平サイズの生き物——『クロウカード』もとい『さくらカード』の封印の獣であるケルベロスが、あくび混じりに喋る。そのイントネーションは相変わらず錆びることのない大阪弁だ。

ケルベロスは背中に生えた小さな羽根をぱたぱたと動かして、起き上がったさくらの元へとやってくる。

「う、ううん、何でもないの。おはようケロちゃん」

「おはようさん、さくら」

とってつけたような挨拶だったが、ケルベロスはきちんと応えてくれた。

最初は嫌がっていた『ケロちゃん』の愛称も、四年も使い続ければどうということもない。

すると、

「さくらさーん、朝ごはんですよー」

と階下からドア越しに声が聞こえる。さくらは元気よく「はい！」と返事をする、ベッドを降りて、壁に掛けていた制服に手を伸ばした。

可愛い模様のパジャマから、白のシャツと黒いスカートに着替える。さくらが今、二学年に通っている友枝中^{ともえだ}学校の制服だ。さくらは机に置いていた鞆を開けて、忘れ物がないか確認する。

「今日は部活ないんか？」

ケルベロスの質問に、さくらは「うん」と頷く。

さくらが所属しているのはチアリーディング部。運動神経の良さを買われていくつもの運動系の部活から声が掛かったが、小学校から馴染みの活動が一番と思い、最終的にここに収まった。そういう経歴から、中学で初めてチアリーディングに触れた同級生や後輩にアドバイスをしたり、先輩からも一目置かれていたりしている。

「今週は掃除当番もないし、授業が終わったらすぐ帰れるよ。……あ、今日夕飯当番だから、買い物してこなくちゃ」

「おお。そんならついでにプリンも買ってきてーな！」

「はいはい」

ベッドの上で「プーリン、プーリン、今夜はプーリン！」と飛び跳ねるケルベロスを見て、さくらは苦笑した。

ケルベロスはその小さな体に見合わず食い意地が張っている上、筋金入りの甘党で通っていた。

中身を確認し終わると、さくらは鞆を抱えてドアへと向かった。

「じゃ、行ってくるね！」

「おう、今日も元気でなー」

軽く手を振って部屋を出ていく。いつもの日常の始まりだ。

さくらの部屋は二階にあり、そこを出てすぐ階段から降りるようになっている。

お気に入りのピンクのスリッパをぱたぱたと鳴らせて一階へと降り、リビングに入ると「おはよう！」と声を掛けた。

「おそよう、怪獣」

いきなり憎まれ口が返ってきて、むっと顔をしかめる。

憎まれ口の主——大学三年生の兄である桃矢^{とうや}は、朝食の並べられたテーブルに座って、にやっと意地の悪い笑みを浮かべた。

「さくら怪獣じゃないもん」と反論しながら同じようにテーブルに座ると、

「そうか？　いつも怪獣みたいなかい足音立ててるのに」

「わたし、そんなにうるさくないもん！」

「おお、言ったそばからほえてるぞ。怪獣が」

「ほえてないもんっ！！」

からかわれて、言い返して、またからかわれてのイタチごっこだ。これが木之本家では当たり前前の光景だったりする。

「今日も元気ですね、桃矢君もさくらさんも」

そして、このイタチごっこを打破してくれる人物が、サラダを手に台所から現れた。

「あっ、おはようお父さん！」

「おはよう」

ほぼ同時に発せられた挨拶に、「おはようございます」と丁寧な言葉。

エプロンのよく似合う彼——さくらの父親である藤隆は、眼鏡の向こうでにこやかに微笑む。

父、兄、妹。これが木之本家の家族構成だが、ここにもう一人。

「おはよう。お母さん」

テーブルの上、お洒落な花瓶に添うようにして置かれた写真立ての中で、綺麗に微笑む母の撫子なでしこにさくらはそっと呼びかけた。

「さてと。それじゃ、食べましょうか」

「——いただきます」

「いただきますーす！」

手を合わせて挨拶をすると、質素だが栄養のバランスのとれた朝食にそれぞれ箸をつけた。

「うんっ、今日もおいしいね！」

味噌汁を軽く啜ったさくらが言うのと、藤隆はにっこりと微笑み返してくれる。だが、

「あんまりがつつくなよ、怪獣」

「だから怪獣じゃないってば！」

コーヒーに口を付けながら、飽きもせず茶々を入れる桃矢の科白

に機嫌は急降下した。

中学生になり、身長もそれなりに伸びたというにもかかわらず、「怪獣呼ばわり」を始めとして桃矢の意地悪は全くなりやをひそめる様子がない。

さすがに「電柱くらい大きくなって踏んでやる」という発想はなくなり、ならどうやって仕返ししてやろうものかとムキになって考えるほど、さくらの食べるスピードは上がってしまった。桃矢の思う壺である。

「桃矢君は、今日バイトなんだよね？」

「ああ。そんなに遅くはないと思うけど」

意識してなのか無意識なのかは定かでないが、心持ち陰悪になった空気をうまく中和してくれる藤隆は、さすが父親といった所であろう。

「そういえば、お父さん今日も学会の打ち合わせなんだっけ」

「ええ。帰るのは夜中になりますから、夕飯は先に食べて下さい」

「打ち合わせ、頑張ってるね」

「と言っても、今日は軽く内容を確認するだけですけどね」

「けど、準備とか結構大変だったんだろ？」

「終わってしまえば、どうということもないですよ」

にこやかに答えながら、藤隆は目玉焼きを箸で切り分ける。

そこでふと、壁に掛けられた時計へ目をやった。

「……あれ？ さくらさん、今日はのんびりですね？」

「え？」

藤隆の言葉につられて、さくらは背後の時計を振り返った。示された時刻を見てぎょっとする。

「ほえええっ！ もうこんな時間！？」

急いで箸を動かし、テーブルの上の朝食を次々と平らげていく。最後に野菜ジュースを一気飲みして、口の中に残っていた分を嚥下した。

「ご、ごひほうはま……」

「お粗末さまでした。はい、お弁当」

胸元をとんとんと叩き、目に涙を浮かべるさくらに、藤隆が弁当箱を渡す。

その脇で桃矢は悠々とご飯を口に運んでいた。

「もうー！　なんでお兄ちゃんはそのなによつくりしてるの！？　いつも私と同じくらいに出てるのに！」

「今日は一時限目が休講なんだよ。悔しかったら遅刻ギリギリにならないように、その寝坊癖を直すんだな」

まったくもって正論だが、言い方が明らかに嫌味なので、さくらは鞆を掴みながら「うきーつくやしいー！」と内心で叫んだ。

ばたばたと玄関へ走り、学校指定の黒い靴を履き、洒落たデザイン
のドアに手を掛ける。

「いつてきまーす！」

ばたーんと開け放って門をくぐっていくと、その背中に向けて藤隆が「いつてらっしゃい」と返事をした。

運動神経の良さを生かしての”ローラーブレード登校”は小学校と共に卒業し、今は徒歩通学だ。

家からの距離自体は小学校も中学校も同じくらいだが、手段が変わったので多少時間がかかる。

しかし、桜並木の坂道を走っていくさくらが急いでいる理由は、それだけではなかった。

坂道を抜けてすぐのT字路。九月といえども暑さの抜けない残暑らしく、青々とした葉の茂った木の下に、馴染みの人影が立ち尽くしている。

「小狼君っ、おはようー！！」
シャオラン

駆け寄りながら手を振ると、その人影——
李小狼は、
軽く微笑して
「おはよう」と返した。

「ごっ、ごめんね、待った……？」

「いや、今来たばかりだから——って、大丈夫か？」

傍に来るなり、膝に手について息を整えるさくらの様子に、小狼は戸惑った声を出した。

「うん、ちよっと……いつもより寝坊しちゃって」

「昨日は眠れなかったのか？」

「そうじゃないよ……ほんとに、なかなか目が覚めなかったただけだから……。心配してくれて、ありがとう……」

顔を上げながら言うさくらの言葉に、小狼は「い、いや、別に……」と視線を逸らす。

頬が少し火照っているように見えるのは、暑さのせいだけではないだろう。

それを見たさくらは、くすりと小さく笑った。

「じゃあ、行こっか」

「ああ」

そんなやり取りを合図にして、二人は並んで歩道を歩き出した。

さくらがまだ小学校四年のとき——『クロウカード』が全て『さくらカード』に変わって間もなく、小狼は香港の実家へと帰っていた。

「かならず帰ってくるから！」

去り際の小狼の言葉を信じ、電話や手紙で時折連絡を取りながら待ち続けて約二年。

その約束が実現したのは、さくらが中学生になってすぐのことだった。

朝、いつものように慌てて走りながら学校へ向かうさくらの目の前に、自分が手渡したくまのぬいぐるみを抱えた小狼が、自分と同じ中学校指定の制服を着て立っていたのだ。

何の予告もなかったために、さくらは香港にいるはずの小狼との再会に驚いたが、それ以上に嬉しさと胸がいっぱいだった。

そのまま登校し、教室に入ると、小狼の姿に小学校から一緒だったクラスメイトも目を丸くしていた。

話をしていくうちに、さくらと小狼はいわゆる”公認の仲”となり、それから一年以上、二人はこうして朝待ち合わせての登校が習慣となっている。

「今日って……たしか英語の小テストだよね」

「そうだったな」

「あんまり自信ないなあ……大丈夫かなあ」

「前のテストで間違った所は、ちゃんと確認したんだろ？ だったら大丈夫だ」

「そうかな……」

そんな他愛のない会話をしながら歩いていく。

日常の一部となった光景だが、さくらにとってはかけがえのない一時だった。

無論、それは小狼にも言えることである。

「——そうだ。そういえば、今朝変な夢を見たの」

「夢？ どんな？」

「うーんと……なんか、白い建物と黒い着物を着た人が出てくる夢……？」

「この季節に黒い着物って、暑苦しくないか？」

「うん。あと、もっと色々出てきた気がするんだけど、はっきり思い出せなくて……」

「それはまた、珍しい夢を見られましたわね」

「そうだな……って、うええっ!？」

「ほええっ!？ 知世ちゃん!」

「おはようございます。さくらちゃん、李君」

会話に割り込まれたのにも気付かず、反射的に相槌を打った小狼と、背後からの声に振り向いたさくらは、ずささっ!と音を立てて身

を退いた。

そんな二人の間で事も無げな微笑を優雅にたたえるのは、さくらの親友・大道寺知世^{だいどうじ ともよ}である。

さくらと小狼の付き合いを誰よりも応援しているクラスメイトの一人だ。

「だ、大道寺、お前いつからそこに……」

「つい先ほどですわ。朝からお二人とも楽しそうでいらっしやいましたから、声をかけようかどうか迷っていたのですけれど……ちょっと驚かせて差し上げるのもよろしいかと思ひまして」

「すぐくびっくりしたよ……」

「まあ。では大成功ですわね。でも、一つだけ心残りがありますの」急に表情を曇らせて、ふうっと憂鬱そうな溜息を吐く知世に、さくらは「ほえ？」と首を傾げる。

「李君と話されてるときはもちろん、先ほどのびっくりなさったさくらちゃんがとってもかわいらしくて——ああ、ここにカメラを持ってこなかったことが悔やまれてしかたありませんわ！」

「と、知世ちゃん……」

「そんなかわいらしいさくらちゃんをビデオに収めてコレクションにするのが私の生きがいなんですのに！ このままではさくらちゃん不足で、いつかひからびてしまいますわー！」

「わたし不足って……えっと、さすがにひからびはしないと思うけど」

目を涙で潤ませる知世のオーバーな嘆きに、さくらはおずおずと声をかける。しかし、

「新しいお洋服のデザインもたまりにたまっていますのに……実際に着ていただく機会もなくて、本当に残念ですわーっ！！」

全く聞いている様子が無いのを見て、さくらだけでなく、小狼も「だめだこれは」と肩を落とした。

カードが変わって以来、町にこれといった異変は起こらず、さくらが魔法を使う回数が減ってから久しい。

そのため、何かにつけて知世が着付けていたコスチュームでの撮影機会も減ったのだが、本人のさくらに対するミーハーぶり(?)は全く鎮まる気配がなかった。

唯一「魔法が使える」という秘密を知る、心許せる親友なので、迷惑だとか不快だといったは思わない。

ただ、さくらの撮影チャンスを逃すとうとうして嘆く知世を見るたびに「やっぱり、ちょおおっと変かも」という感想がついて回るのだった。

そうこうしている内に、さくらたちは友枝中学の門をくぐり、昇降口で上履きに履き替え、教室へと向かった。

「おはよー!」

教室の引き戸を開けて元気よく挨拶を投げかければ、あちこちから

「おはよう」「おはよー」といくつもの声が返ってくる。

「あっ、さくらちゃん! 知世ちゃん! 李君! ちょうどいいところに来たね!」

教室の後ろの方にある席へ鞆を置いたさくらたちの所へ駆け寄ってきたのは、小学校からのクラスメイトである三原千春だ。

「え、ちょうどいいって?」

「うん。葦雀よしきりさんがね、みんなに――」

「お早う、木之本きのもとさん」

樂しげに話す千春の背後から、凜、と澄んだ声。

それは、さくらたちと一味違った落ち着きがあり、大人びた印象の強い静かな響きを持っていた。

そちらへ目をやると、長い黒髪を首の後ろから一本の三つ編みに結わえた女の子が、にこり、と穏やかな笑みを見せる。

「つぐみちゃん、おはよう! 今日も早いね」

「おはようございます、つぐみちゃん」

「葦雀……おはよう」

「お早う。大道寺さん、李くん」

さくらに続けて言葉を掛ける二人にも同じ笑顔を向けるその少女の名前は、葦雀^{よしきり}つぐみ。

さくらたちが二年生に進級したこの春、クラス替えに伴って転入してきた生徒である。

最初は引き締められた硬い表情から取っ付きづらいという印象が持たれていたが、それとは裏腹の人当たりの良さでクラスに溶け込み、早五ヶ月が経っていた。

さくらたちと同年であるにもかかわらず、他の同級生達が楽しく過ごす様子を見ているときに浮かぶ、まるで無邪気に遊ぶわが子を眺める母親のような優しい笑顔が、精神年齢の高さをうかがわせていた。

一方で「趣味は人をおちよくること」と公言するような愛嬌のある志向も持ち合わせ、周囲への配慮もよく行き届いているので、クラス内で彼女を毛嫌いする人はまずいないとされている。

「三人とも、ナイスタイミングよ。ちょっと手出してくれる？」

優しく微笑みながらつぐみが言い、さくらは「ほえ？」と怪訝に思いながらも言葉に従った。小狼と知世もそれに従う。

つぐみはさりげなく背中にして隠していた手から何かを取り出し、一つずつ、各々の掌に載せていった。

さくらはそれをまじまじと見つめてから、呟く。

「……これって、お守り？」

「昨日、隣町へ買い物したついでに神社へ寄ってきたの。結構効くって評判らしいわ」

「まあ、そうなんですか？」

「うん。本当はクラス全員分買いたかったんだけど、中学生の小遣いなんて高が知れてるでしょ？ だから、仕方なく先着十名までつてことにしたの。今日はその三つで終わり」

「ナイスタイミングって……そういうことか」

つぐみの説明によりやく納得し、改めて手の中のお守りを見つめる。

さくらのお守りは赤、知世は紫、小狼は緑。いずれも表に「易西神社」と白い刺繍がされている。

互いのお守りを見比べていて、さくらはあることに気付いた。

「あれ？ わたしのお守り、知世ちゃんや小狼君のよりもちよっと大きい……」

「ああ、それは特別な。家内安全とか、勉強とか……効き目の内容は他のお守りとほとんど変わらないんだけど、効力が大きいんだって。面白そうだから一つだけ混ぜたのよ。適当に渡してたつもりなんだけど……木之本さんの所に行ったのね。運がよかったのかな？」

軽く首を傾けながらくすり、と笑い声を漏らすつぐみの仕草は、知世とも違った気品が感じられる。

さくらは赤いお守りをぎゅっと握り締めると、

「つぐみちゃん、ありがとう！ 大切にするね！」

と満面の笑顔で言った。

知世や小狼も、「ありがとうございます」「ありがとう」と笑いかける。

つぐみはそれに対して、笑顔のまま軽く頷いて応えた。

「ねえ葦雀さん、この易西神社やすとりって他にもお守りとかあるの？」

さくらたちと同じようにお守りをもらっていたのか、傍へやってきた柳沢奈緒子が尋ねてきた。

「そうみたい。これ買いに行ったときには確か、受験とか、恋愛とか、色々あったわ。あと、お参りすると効果倍増なんですって」

「すごいね！ 行ってみたいなあ」

お守りを手にして呟いた奈緒子に、さくらは意外そうな顔をした。

「奈緒子ちゃん、この神社知らなかったの？」

心霊関係や超常現象など、いわゆるオカルト分野を好む奈緒子なので、近所の神社なら殆ど網羅しているものだと思ったのだ。

奈緒子は頷いて「うん、今初めて聞いたの」と答えた。

「お参りで効果倍増かー。じゃあ山崎君と一緒に、ずっと両思いで

いられますようにってお願いしに行かなきゃ。葦雀さん、その神社ってどの辺にあるの？」

千春が尋ねると、つぐみは軽く考え込むような素振りを見せる。

「えーと……隣町になっちゃうけど、バスで行けるよ。せっかくだし、今日の放課後に一緒に行くっていうのはどう？ その近くに面白そうなアンティークショップがあってね、もう一度寄ろうと思ってたところなの」

「本当？ それじゃ、お願いね！ さくらちゃんたちはどう？ 一緒に行かない？」

千春が話を振ると、さくらは少し考え込んだ。

「じゃあ、行ってみようかな」

「では私もお付き合いますわ。そのお店の方も興味がありますし」

「李君はどうする？」

「ああ、ごめん。図書委員の仕事があるから行けないんだ」

「そうなの？」

「それと、山崎も行けないと思う。おれとペアで当番になってるから」

「ええ？ そうなんだ……」

小狼の答えに、千春はしゅん、と落胆する。

千春と山崎貴史はいわゆる『幼馴染カップル』として公認となっているが、二学年に進級したとき、さくらたちとはクラスが別になってしまっていた。いつもならこの雑談に参加するはずの佐々木利佳も同様である。

逆に、今までずっと同じクラスでいられたのが不思議なくらいだったし、小学校からの付き合いの深さのお陰で、今でも帰り道を共にしたり、昼食を一緒にとったりと、親交は薄れていない。

「それでは、今日はとりあえず千春ちゃんだけでもお参りに行って、またの機会に二人でお越しになればいいですわ」

「うん……そうだね」

「ねえねえ、ついだから利佳ちゃんも誘おうよ」

「それいいね！　じゃあ後で隣のクラスに顔出して……」

放課後の神社参りとアンティークショップの話に花を咲かせるくらたち。

朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴ったのは、そのときだった。

「あ」と誰もが口を揃えた直後、教室の前の方の扉が開き、担任が「はい席に着いてー」と指示を飛ばした。

「じゃあ、また後で時間とか決めよっか」

「うん、そうだね」

それで話は打ち切られ、さくらたちはそれぞれの席へと座った。

教卓に担任が立つと、日直の号令で起立と礼が行われる。

そして、出席確認――

こうして、いつもの日常が始まる。

思えばそれが、全てに転機をもたらした、日常と非日常の境目の日だったのだ。

T o b e C o n t i n u e d

Opus ONE (後書き)

導入編その1『CCさくら』サイド。

葦雀つぐみちゃんはこの作品のために考えたオリジナルキャラです。

「こんな同級生がいたら楽しいな」という理想像を元にして書いてみました。気に入っていただければ計画通り（ニヤリ）

※ 2010／1／16・挿絵を追加 ※

Opus TWO

俺たちはいつも 何かの変わり目に立ち会っていて、
それを変わり目だと知る人間と 知らない人間がいて、
その変わり目に関わる人間と そうでない人間がいて、
そして誰もが 気付かないうちに
後者であることを願ってるんだ

> i 1 6 8 5 6 — 5 4 3 <

Parallel Lines [side.. BERRY]

パ
ラ
レ
ル

ラ
イ
ン
ズ

サ
イ
ド

ベ
リ
ー

一少年の日常一

「起きろおオオオオオ!!」
ばすっ!

「ふごッ!?!」

いきなり顔面へめり込んだ凄まじい衝撃に、一護はくぐもった声を上げた。

顔にへばりつく物体をがっしと掴んで、勢いよく引き剥がす。

「っ……いきなり何すんだテメエ!!」

目の前にぶら下げた、輪郭の丸っこいライオンのぬいぐるみ。それ

に向かって怒鳴ると、爪を模したフェルトの欠片の一枚が、人差し指のようにびしっと一護に向けられた。

「やかましいッ！ イビキがごーごーごーウルセーんだよ！ このオレ様の眠りを妨げやがった罰だ！ くらえもう一発！！」

声と同時に、宙ぶらりんになっていたぬいぐるみが片足を振り上げる。一護は「うおッ」と叫んで、繰り出されたキックを躲す。

「チッ、一護のクセにコン様スペシャルキックを避けるとは生意気ぬぐあッ！！」

言い終わる前に、ぬいぐるみは押入れの襖に叩き付けられていた。少しの間襖に張り付いていたぬいぐるみはずると滑り落ちて、床の上にべしゃっと潰れる。

「朝っぱらから人にケリかますから、そーゆー目に遭うんだよ。ったく、お陰で最悪の目覚めじゃねーか……」

あふ、とあくびをしながらベッドを降りる一護。

わしゃわしゃとかき回した寝癖の残る髪の色は、夕陽を思わせる鮮やかなオレンジ色だ。

フローリングに突っ伏したままのぬいぐるみ——コンは、ようやく襖に叩きつけられたダメージから回復したのか、腕立て伏せの要領で体を起き上がらせる。

「うう……チクショウ、ネエさんが帰ってきたら真っ先にグルミ権侵害で訴えてやる……！！」

何やらほざいているが、一護は完全無視して寝巻きから制服に着替えていった。

灰色のスボンに白の半袖開襟シャツ——これが一護の通う空座第一からくら高校の夏服のスタイルだ。

シャツは人によって開襟でないものを着てネクタイを締めることもあるが、一護は開襟の下に黒のタンクトップを着るというラフな形で通している。

「おにーちゃん！ 朝ごはんできてるよー！」

と、いつもの聞き慣れた声が部屋のドア越しに聞こえてきた。一護はリストウォッチを着けながら、「分かってる！」と返事を返す。勉強机の脇にぶら下げていた鞆を手に取り、ドアへ向かおうとしたが「…おっと」と慌てて引き返した。

簡素なパイプのフレームが組み合わさったベッドの、枕元の辺りに札のような物体が縛り付けられている。――死神代行戦闘許可証、略して代行証と呼ばれる物だ。

やや潰れた五角形の木札で、バツ印の上にドクロのようなマークが描かれている。普通の感覚で評価するなら、悪趣味なデザインだ。

一護は代行証に通された紐をベッドから解き、目の前にぶら下げた。

「こいつを忘れちゃマズいな」

呟くと、ズボンの尻ポケットにぐいと押し込み、改めて部屋のドアへと向かった。

「じゃあコン、今日も大人しく留守番してろよ」

「ケッ、とつとオレの視界から失せやがれ、コノむつつりスケベリーが!!」

「……てめえ、帰ったら覚悟しとけよ」

勿論、コンに挨拶代わりの脅しをかけるのも忘れずに。いつもの日常の始まりだ。

階下に降りてリビングに入るなり、

「グッツモーニンッ、イ・チ・ゴ——!!」

胡散臭い挨拶と共に跳び蹴りをお見舞いされた。

しかし一護はすでに見切り、クロスさせた両腕でしっかりと防御する。

ぎろり、とブラウンの瞳で睨み上げれば、嫌というほどに見慣れたヒゲ面があった。

「おおう!? この俺のミラクルフライングキックをガードするのは成長したじゃ……」

「オハヨーゴザイマスクソ親父ッ!!」

「べぶ!!」

棒読みの挨拶をしながら、ヒゲ面の父もとい一心いっしんの顎へ手加減無し
の拳を叩き込む。一心は派手な音を立てて床の上に昏倒した。

「あーあ。相変わらずだね」

脇から投げかけられた、呆れ返ったような感想に顔を向けると、食
卓へちゃっかりと座った妹その1が頬杖をついていた。

「おう、夏梨かりんか。早いな」

「おはよー、一兄イチにい」

軽く挨拶を交しながら隣へ座る際、昏倒した一心のどてっ腹を一護
が容赦なく踏みつけたが、二人ともそ知らぬ顔をしている。そこへ
「お兄ちゃん、おはよう!」とエプロン姿の妹その2が目玉焼きの
載った皿を持って台所から出てきた。

「ああ、おはよう遊子ゆうず」

「あれ、おとうさんが床でねてる」

遊子のとぼけた疑問に対して夏梨が、

「今日暑いから、床が冷たくて気持ちいいんだってさ」

と、明らかにおかしい答えを述べる。遊子は「ふーん、そうなんだ
と素直に納得した。

「違ーうッ! 俺は反抗期のバカ息子に打ちのめされて絶望に浸っ
ているのだ! 本当は父さんが心配なのを隠したいからって、そん
な素っ気ない答えはひどすぎるぞ夏梨!!」

一応意識は保っていたのか、やりとりを聞いていた一心が勢いよく
起き上がって弁明する。が、

「そっちが先に仕掛けたんだろうが。あとバカは余計だアホ親父」

「別に心配じゃねーよヒゲダルマ」

極めて冷静にツッコむ一護と夏梨の科白に「がーん!!」とわざと
らしく効果音を自分の口で演出して打ちひしがれた。

これで静かになると思いきや、

「母さーんッ!! 聞いてくれ母さん! バカ息子はともかく夏梨

ちゃんが冷たいよーッ！ 俺の人生はもう終わりだー！！」
騒ぎ立てながら、壁に貼られたポスターに泣き付く。

ポスターの中では、今は亡き母・真咲^{まゆみ}がむさ苦しく喚いている一心に無邪気な笑みをたたえている。

ポスターの下部分には大きく『MASAKI FOREVER』と、映画タイトルのロゴを思わせるデザインの花文字が並べられていた。これを見たら、誰しもがこう思うだろう。「アホみたいな遺影だ」と。

「親父……そのポスターいい加減どうにかしろよ」

大人気ない一心の背中に、一護が溜息混じりに言う。一心はポスターに張り付いたまま顔だけをぐるっと振り向かせて、

「心配無用だバカ息子ッ！ すでに秋季限定デザインのマサキポスターを考案中だ！！ 聞いて驚け今度は可愛らしくピースサインをした愛嬌500%増の真咲の写真を引き伸ばして……」

「そういうことじゃねえっ！ つーかバカって言うな！！」

「もう、お兄ちゃんもお父さんもケンカしちゃダメだよ！」

「放つときだよ。ああでもしなきゃコミュニケーションとれないんだから」

困った顔で注意する遊子だが、夏梨は牛乳を飲みながらあくまでクールにたしなめる。遊子と夏梨は二卵性の双子で、実際は遊子の方が姉にあたるのだが、それを知らない人間が見たら間違はなく姉妹関係を逆にとらえてしまうだろう。

「一兄、ヒゲ親父に構ってるのはいいけど、時間大丈夫？」

「構ってなんかいねえっ！……って、あ？」

夏梨の言葉を全力否定しようとして、リストウォッチに目をやる。デジタル表示された時刻にぎょっとした。

「うおおッ！？ もうこんな時間かよ！」

慌てて遊子が並べた朝食に手を付ける。急いでいるのなら朝食抜きで家を出てもよいのだが、如何せん大事な妹の作った料理なので粗末にするわけにいかない。

ものの数十秒で全て平らげ、鞆を引っ掴んで玄関に走る。

「ごっそさん！ 行ってくる！」

ばたーん、と玄関の扉を開け放って家を出ると、

「いってらっしゃーい！ 気をつけてねー」

「忘れるなよ！ 門限は七時だぞ！」

遊子と一心の声を背に受け、道路を駆けながら片手を挙げて応えた。一軒家に隣り合うようにして建てられた、こぢんまりとした病棟の掲げる『クロサキ医院』の看板が、朝日を浴びて輝いている。

家には事あるごとに格闘を挑んでくる一心がいるので、迂闊にしてられない。

その一心ほどではないが、学校にもやはり油断のできない要素が潜んでいた。

「一護イチゴ一護イチゴいちゴフツツ！」

どうにか登校時間五分前に昇降口へたどり着き、廊下をのんびり歩いていると、茶髪のクラスメイトが無駄に名前を連呼しながら走り寄ってきた。さり気ない動作で片膝を突き出し、向かってきたクラスメイトの腹に食い込ませる。

不意打ちだったのと、走ってきたことで膝蹴りの衝撃に運動エネルギーが付加されたのとで、クラスメイト——浅野啓吾は途方もない痛みに蹲った。

「おーす、ケイゴ」

「おーすじゃないッ……せっかくの爽やかな朝をぶち壊すなんてひどいぞイチゴ……！」

腹を押さえたまま呻く啓吾に、一護は「あ、悪い。ついノリで」しれっと答えてみせた。

「おはよう、一護。早いね」

「おう、水色」

女性受けしそうな愛嬌のある笑顔で背後からやってきたのは、同じ

くクラスメイトの一人である小島水色。

水色は廊下に這い蹲っている啓吾を見ると「そんな所で芋虫の真似してもいいことないですよー、浅野さん」と、とぼけながらも冷やかな科白をにこやかに言い放つ。

啓吾は目に涙を滲ませながら「クロス：！」と呪詛を吐いた。その時にはすでに一護も水色もさっさと歩き去ってしまった。

『1-3』のプレートが掲げられた教室の引き戸は、夏の熱気を少しでも逃すためか開けっ放しになっている。

一護が中に入りながら「おーす！」と声を上げると、

「あっ、おはよう黒崎くん！」

真っ先に、柔和な響きのある挨拶が返ってきた。窓際の近くでにこにこ手を振っているのは、花のヘアピンで留められた胡桃色くるみの長い髪が特徴的な、井上織姫だ。隣には彼女の親友で一護の幼馴染でもある有沢たつきもいる。

「ああ。おはよう井上、たつき」

「おはよう一護。今日は早かったじゃない」

たつきの科白に「ん、そうか？」と眉根を寄せると、

「そうだよ。さつきダッシュで校門くぐってからここに来るまで、あんまり時間かかんかったでしょ」

「計ってもいねーのに、なんでそんなの分かんだよ」

「毎朝見てれば大体の時間ぐらい分かるっての。織姫もそう思うでしょ？」

「え？ あ……うん、そうだねっ」

たつきに話を振られて、何故か井上は戸惑ったような表情を浮かべる。一護はその様子にますます眉間の皺を深くさせた。

実は「毎朝見てれば」という部分に過剰反応してしまったためだというのは、本人だけが知る話である。

「思うんだけどさ、一護。あんた二学期始まってからずいぶん運動能力上がったんじゃない？」

「そ、そうか？」

「そうだよ。体育の時間なんか、記録とる度に教師驚かせてるし。朝早く来れるようになったのだって、足が速くなったからって考えればいいし。あんた一体、この夏休みどこへ何しに行ってたわけ？ 実はこっそりどつかで鍛えてたとか？」

「え、あ、イヤ、それはそのー……えーとそれはだな」

たつきの鋭い指摘に言い淀む一護は、内心で「ヤバイ」と冷や汗を浮かべた。ところが、

「グッ……モーニンッ、ヒ・メ——！！」

という奇声と、井上の「うきゃあ!？」という悲鳴に思考停止した。見ると、どこからやってきたのかクラスメイトの本匠千鶴が井上の腰の辺りに抱きついている。

途端、たつきの額へ「ビキッ」と音を立てて青筋が浮かんだ。そして、

「朝っぱらからナニ盛ってんだアンタは!!」

怒号と共に、洗練された空手式の上段回し蹴りを炸裂させ、井上の体から引き剥がした。

千鶴は床に倒れこむと、踵が直撃した鼻の辺りを押さえて「ぐはっ……相変わらず、見事なツツコミね……!」と告げた。

よく見れば、押さえた手からばたばたと血のようなものがこぼれていた。年頃の女の子同士が繰り広げるには壮絶すぎるやりとりである。

「ツツコミじゃないっ!　　ったく、少しは懲りたらどうなんだよ」

「わ、分かってないわねたつき……!　　愛というのは、障害があればあるほど燃えるものなのよっ……!」

「あんたの場合は愛なんて上品なものじゃなくて、ただ性欲丸出しなだけでしょうが。ていうか鼻血拭け」

顔の下半分を真っ赤にしたまま親指を立てて豪語する千鶴に、たつきはげんなりとしていた。

千鶴は自他共に認めるレスビアンで名を馳せており、女の子としての体型に恵まれた井上は、ことあるごとに絡まれていた。その度に

たつきは今日のように彼女を容赦なく撃退する羽目に陥っている。たつきの注意が「夏休み何をしていたか」という話題から逸れたと悟り、一護はほっと胸を撫で下ろす。

「あぶねー……あれ以上問い詰められたら確実にヤバかった」

「向こうにいる間、たつきちゃんたちとは全然連絡取らなかったもんね」

どつき合いを続けている二人の脇で、一護と井上はひそひそと話した。

「そういや、井上は休み中のことはどう言い訳したんだ？ たつきとか部活の奴とか結構聞いてきたんだろ」

「うん、でもそんなに考える必要なかったよ？」

「……俺は誤魔化すのにすげえ苦労したんだけど」

「んー、あのね。江戸時代みたいな建物があって、袴とか着物を着た人がたくさんいる所で、金髪のとつてもきれいな人とか、わんちゃんみたいな顔をした人とか、最初は猫だと思ったんだけど実は人間だった女の人とか、他にも色々たくさんの人に会ってきたって。そう話したら、みんな納得してたの」

「……………」

一護は黙りこくったが、頭の中で「さすが井上……」と感心とも呆れともとれる感想を浮かべた。

思えば、類まれなる天然気質で通っている井上だったら、休みの間にあったことをありのまま話してしまっても、スルーされるだけで大した問題にはならないだろう。ある意味得な性格してるよな、と一護は羨んだ。

そんなことを考えていると、ふと井上の視線が教室の後方へと向いた。

「あ、おっはよー！ 茶渡くん、石田くん！」

先ほど自分に向けたのと同じような挨拶をした井上に、一護は顔を振り向かせる。

自分が入ってきた所とは反対側の入り口から並んで入ってきたのは、

高校一年生の平均身長より明らかに頭一つ分高い背丈に武骨な印象の強い男と、それとは対照的で痩身瘦躯に銀縁眼鏡が目立つ男。

一護の中学時代からの親友である茶渡泰虎さど やすとらと、クラスメイトの石田雨竜いしだ うりゅうだ。

「おお……おっすチャド、石田」

「……ム」

「ああ、おはよう黒崎。今日も無駄に髪が逆立って元気そうだね」
茶渡は軽く片手を挙げただけ、石田は無愛想な上に皮肉の込められた反応を返す。

傍目からすると、とても親しげには見えない挨拶だが、これが彼らにとって普通なのだ。ただし一護も心が広いわけではないので、石田の科白に顔を顰めたが。

「珍しいね！ 茶渡くんと石田くんが一緒に来るなんて」

「ム……そうか？」

「たまたま廊下で会っただけだよ」

不機嫌な顔をしている一護の隣で、井上が明るい声で言い、茶渡と石田はいつもの高すぎず低すぎもないテンションで答える。

「コラ——！！ その休み明けからやたらと仲のいい一同カッコ井上さんは除くカッコ閉じる！ この超楽しい話題盛りだくさんなオレを差し置いて何を話してるんだア！！」

一護の膝蹴り攻撃から回復したのか、廊下から走って教室に飛んできた啓吾が、いきなりずいっと頭を割り込ませる。

「別に差し置いてねーよ。最初っからいない奴をどう差し置くんだよ」

「あーッ！ なにソノ冷たい反応！？ 前々から感じてたけど二期入ってからお前オレに対して素っ気なさすぎだ一護！！ しかもチャドや井上さんともかく石田とまで仲良くしゃがって！」

「仲良くなんてしてねえ。っーか素っ気ないのはずーっと前からだボケ」

「なんだとおおう！？」

「朝っぱらからうるさいと嫌われますよー、浅野さん」

「み、水色まで！ 啓吾^{ケイゴ}だけに敬語^{けいご}はイヤ——！！」

「全ッ然おもしろくねえ」

「ナニー！？ フレンドリーだけでなくユーモアセンスまで失ったか一護！」

一体どこから湧いて出てくるのかと疑問にさえ思うテンションで喚き散らす啓吾に、一護は辟易する。

井上はそれをにこにこ楽しそうに眺め、茶渡はいつもの光景にフツと軽く笑い、石田は話に耳を傾けてこそいるものの、まるで無関心であるかのように鞆から取り出した文庫本を読んでいた。

朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴ったのは、そのときだった。

「あ」と誰もが口を揃えた直後、教室の前方の扉が開き、担任である越智^{おち}が「席に着けよー」と指示を飛ばした。

その声に反応して、喚いていた啓吾を含めクラスの全員がガタガタと自分の机の所に行く。

殆どの生徒が収まる位置に収まった所で「起立、礼」と号令の声。

その直後、

ホロ、——ウ！！　ホロ、——ウ！！

「うをおおおうッ！？」

ポケットに入っていた代行証がいきなりけたたましい鳴き声を発し、一護は教室のど真ん中で奇声を上げた。

すでに他の生徒全員が着席していたため、一人だけ立ち尽くしたままの一護はハツとする。

「……なんだ、黒崎？　いきなりヘンな声出して」

教卓に立った越智が怪訝な顔で尋ねる。女教師にしては肝が据わっていることで彼女は定評を得ているが、着席する代わりに一人だけ妙な叫び声を発した生徒には、さすがに対応しきれないらしい。

「えっ……あ、い、いえ。なんでもないっす」

「そうか？　じゃあさっさと座れ。出席とるからな」

「ハイ……あ、いや！ スンマセンなんでもありました！ 便所行かせて下さい！」

「はぁ？ バカ、ならとつと行っ来てい！」

「そうしまーす！！」

許可が下りるや否や、一護は疾風のような素早さで教室を飛び出した。

「まったく……黒崎の奴、ここの所随分トイレが近くなったな。まあいいか。よし今日は全員出席だなー？」

大雑把にも程がある割り切り方をして、越智は持ってきた出席簿を開いた。

彼女のそんな言い草に「いいのかそれで……」と生徒達は戸惑ったような反応を示す。

その中で、井上と茶渡、そして石田が、自分達の耳だけに届いた代行証の甲高い警報を思い起こして、どこか険しい表情を浮かべた。

教室を出た一護は、自分が言い残した科白とは裏腹に、トイレではなく学校の中庭を横切る通路に来ていた。

ポケットから代行証を出しながら周囲をきろきろと見回し、人がいないのを確かめる。

「よし」と気合を入れ直すように呟くと、おもむろに代行証の札の部分で自分の胸に押し当てた。

ぱしっ！と何かが弾けるような音の直後、一護の体が倒れ込む。代わりに、その肉体を脱ぎ捨てるようにして、制服の代わりに喪服の色を思わせる黒の着物——死覇装しはくしょうを纏った一護が立ち上がった。

ステンレス製の手摺りに足を掛け、それを踏み台に上へと大きく跳躍する一護。背には、白い巻き布に覆われた刀身の広い刃物——斬魄刀ばくとうがあった。

跳躍する一護の姿は、生徒で溢れ返った教室の窓から丸見えだったが、誰もその存在に気付いていない。

当然だ。今の一護はいわゆる『幽霊』に属する存在——さらにその中でも特殊な『死神^{しにがみ}』と化しているのだから。

たった一回跳んだだけで、一護は四階建ての校舎の屋上に到達した。死神化した今の一護の身体能力は常人を遥かに凌いでいる。

「どこだ……？」

視線をあちこちに向け、間もなく現われるであろう不審な影を探す。元々探査能力の低い一護だが、剥き出しの霊圧^{れいあつ}だったら大体の方角や距離ぐらいは察知できる。

代行証が鳴ったからには、倒すべきモノは近くに潜んでいるはずだ。しかし、一向にそれらしき影が見えなければ、霊圧も感じ取れない。「……くそっ、なんで出てこねえんだ!？」

悪態を吐いた、その瞬間だった。

『マタせてワルいね』

濁った声が鼓膜に響き、一護は考えるよりも先に背後へと飛び退いた。直後、一護が立っていた位置で凄まじい音と共に屋上のタイルが砕け散り、鋭い爪の生えた巨大な腕が天に向かって伸ばされる。

ざりっ!と地面を踏みしめた一護は、背負った斬魄刀・斬月^{ざんげつ}の柄を掴んで臨戦態勢をとった。そうしている間にも、腕は肘を折ってタイルの上に掌をつき、続いてもう一本の腕が伸ばされる。

さらに一本、また一本、と明らかに人間には有り得ない本数の腕が砕けたタイルの縁を次々に掴む。

いや、正確には屋上の地面が砕けたのではない。あくまで、その部分の空間が砕けたのだ。稲妻型の亀裂に縁取られた穴の向こうは黒い闇色に塗り潰されている。

そして、ぬうつ、と髑髏を思わせる白い仮面が顔を出した。首から下は異様に膨れ上がった肉塊のような胴体が繋がり、四対八本の腕を生やしている。その外形はグロテスクにアレンジした巨大な蜘蛛を彷彿とさせた。さらに胴体の胸の辺りには、生ける者には到底有り得ない、大きな孔^{あな}がぽっかりと口を開けている。

「……虚^{ホロウ}……」

一護は呟いた。仮面で顔を覆い、体に孔を持った悪しき魂魄——虚^{ホロウ}
こそが、死神代行・黒崎一護の倒すべき相手だった。

『あそんデヨ、しニガミ』

虚^{ホロウ}はぞろりと歯の生え揃った口を動かして言う。仮面に空いた眼窩の向こうから、殺戮本能に満ちた毒々しい眼光が爛々と輝いている。

「……人の仕事を、勝手に遊び呼ばわりしてんじゃねえよ」

一護が啖呵を切る。それが合図となった。

虚^{ホロウ}が腕の一本を振りかざすのと、斬月を覆っていた巻き布が解かれるのはほぼ同時だった。

がん！と鈍い音を立てて、一護がかざした刀身^{ホロウ}が虚の掌を防ぐ。一護はそのまま手首を捻って斬月を傾け、防いだ腕を躊躇うことなく斬り落とした。

虚^{ホロウ}が呻き、今度は複数の腕を一気に伸ばして、一護の体を捕らえようとした。しかしその前に一護は背後へと回る。

そのまま斬月を振り下ろしたが、虚^{ホロウ}が残った腕で受け流した。

「ちっ……面倒くせえっ！」

舌打ちながらも腕を弾き、屋上に設けられたペントハウスの壁に足裏を付ける。縮めた体をばねのように一気に伸ばし、勢いに乗って虚^{ホロウ}に再び肉迫した。虚^{ホロウ}がまた腕を伸ばす。一護はそれを斬り落とすのではなく、足場にしてみせた。相手の思いもかけない行動に驚愕し、一瞬だけ虚^{ホロウ}の動きが鈍る。だが一護にとっては、その一瞬だけで十分だった。足場にした腕を蹴って高く跳び、両手で掴んだ斬月を振り上げる。

「——おらあああああっ——！」

雄叫びを上げ、渾身の力を込めて斬月を振り下ろした。

斬月の刃が目の前にあった虚^{ホロウ}の仮面を、孔の空いた胴体を、頭から真っ二つに両断する。

『——……ッ——！』

着地した一護の背後で、虚^{ホロウ}が声にならない悲鳴を上げた。落花生の実のように二つに分かれた体はゆっくりと傾いて、タイルに横たわ

ると同時に、さあつ、と砂のごとく崩れ去った。

一護は振り向き、風に乗って空へと消えていく虚の残骸を見届ける。
完全に見えなくなってから、ふーっと溜息を吐いた。

「さてと……一時間目始まる前に、戻るとすっか」

手にしていた斬月を背負い直すと、何事も無かったかのように静まり返った屋上から、ひよいと飛び降りる。

通路の手摺にくたりと凭れ掛かった抜け殻の肉体に入り、教室へ戻ると、「トイレに行く」という言い訳を真に受けた啓吾や水色たちに散々からかわれた。

その最中で、井上と茶渡がこっそりと虚の^{ホロウ}ことを聞いてきたので、無事に昇華したと伝える。

石田も直接尋ねはしなかったものの多少気にしていたようで、一護の答えを聞くと同時に安堵するのが分かった。

こうして、いつもの日常が始まる。

思えばそれが、全てに転機をもたらした、日常と非日常の境目の日だったのだ。

T o b e C o n t i n u e d

Opus TWO (後書き)

導入編その2『BLEACH』サイド。

原作本を見返すだけだったので、『CCさくら』よりも割と書きやすかった記憶がある。『CCさくら』は中学生としての設定を不自然のないように色々練り直さなきゃならなかったので、意外と手間がかかったのよ。

冒頭の詩は原作単行本の扉とかに載っているものに合わせて、頑張ってこさえてきました。まあ本家久保先生のポエムの極上センスには到底敵いませんけども。

導入編は次で終わります。まだ続くのかとかツツコンじゃーよ。ついでに次回でサブタイトルについて解説も入れようかな。

※ 2010/1/16・挿絵を追加 ※

『BLEACH』原作単行本の扉絵をイメージしました。

Opus THREE

延々に伸びる平行線

近付きもせず 遠のきもせず

ただただ隣にあり続ける

それが交わる点があるとするならば

何かの力が加わったときに他ならない

そう 邂逅とは常に理由をもつもの

人はそれに気付くことなく

「偶然」として「運命」として

片付けてしまうのだ

Intersection

インターセクション

一袖振り合うも多生の縁――

放課後。

さくらと知世、千春、奈緒子と、隣のクラスから誘いを受けた利佳の五人は、つぐみの案内で隣町の空座町を訪れていた。

元々バスで通学しているつぐみの家はこの近くにあり、それ故に易やす酉神社とろについては前々から知っていたのだという。

「けれど残念でしたわね。山崎君も李君もご一緒できなくて」

「うん……委員会の仕事じゃしょうがないよ」

歩きながら言った知世に対して、さくらは少し困ったような笑みを浮かべる。千春も同様だった。

「でも場所さえ分かれば、また都合のいいときに行けるわ」

その脇から利佳が宥める。

小学校の頃から『優しくておとなっぽい』と評されていた利佳は、つぐみと雰囲気がよく似ている。二年生になってから、昼食を取る際にさくらたちが引き合わせると途端に意気投合した。

とはいえ、最近になってから、利佳が前々からほめかしていた『年上の交際相手』が、小学校時代の担当教師であった寺田先生だと判明したのは、さすがに驚きを隠せなかったが。

そうこうしているうちに、先を進んでいたつぐみが足を止めた。

「ここが易酉神社よ」

バスガイドさながらに片手でつぐみが示した先には、十数段ほどの古めかしい石段と堂々と建てられた朱色の鳥居。

鳥居にはくすんだ金色の楷書体で、「易酉神社」と浮き彫りの施された板が掲げられている。

「わあー、おっきな鳥居！」

目をきらきらと輝かせて、奈緒子が感嘆の声を上げる。

「お守りはこちらで買われたんですの？」

「そうよ。さ、善は急げよ。行きましよ」

知世の問いに答えると、つぐみはさっさと石段を登って境内へと踏み入る。さくらたちは慌てて後について行った。

境内はさほど広くはなかったが、地面に敷き詰められた滑らかな石畳が狭苦しさを和らげている。正面の奥まった所には、賽銭箱の置かれた拝殿があった。その脇に添うようにして、こぢんまりとした建物。おそらく、件のお守りを売っている所であろう。しかし、

「……あや？」

と、さくらは頓狂な声を漏らした。

袴姿の神社の人が控えているであろう、窓口のように作られた障子

がぴたりと締め切られていた。人の気配も感じられない。

その様子に一番驚いていたのはつぐみで、一瞬動作が止まってから、ばたばたとその窓口の辺りへ駆け寄った。そして、

「……あちゃー、失敗した」

と自分の頭に手をやり、苦虫を噛み潰したような渋い表情を浮かべる。

「どうしたの、葦雀さん」

利佳がきょとんとした顔で尋ねると、つぐみは彼女達のほうに向き直って、いきなり手を合わせ頭を下げた。

「ごめんなさい！ 今日ここ閉まってるみたい」

「ええっ？」

「今気付いたんだけど、貼り紙がしてあった……開店は不定期らしいわ。せっかく来てもらったのに、本当にごめん！」

申し訳なさそうなつぐみに、さくらたちは揃って首を横に振った。

「そんな、つぐみちゃんが謝ることじゃないよ。気にしないで、ねっ？」

「そうよ、葦雀さん。いつも来てるわけじゃないんでしょう？ 休みの日が分からなくても仕方ないわ」

さくらが言い、利佳が軽く肩に手を置くと、つぐみは煮え切らない表情で「うん…」と頷く。

「お守りは買えないけど、ほら！ お参りすればいいじゃない。もう葦雀さんからお守り一個もらってるし、別に今すぐ手に入らなくても平気平気」

千春が拝殿を示して言うのと、さくらたちは並んで賽銭箱の前に立つ。

「あ、そうだ。お賽銭はできれば五円玉で出したほうがいいよ」

「ほえ？ どうして？」

奈緒子のアドバイスにさくらが首を傾げると、

「『五円』は、『ご縁』につながるからですわね？」と、知世が言う。

「うん。あといくら出すかもちょっと工夫するといいんだよ。十五

円だったら『十分ご縁がありますように』、四十五円だったら『始終ご縁がありますように』っていう意味にもなるから」

「さすが奈緒子ちゃん！　くわしいねー」

さくらが感心した声を上げると、奈緒子は自分の財布を出しながら少し照れたような笑いを浮かべた。

「じゃあ、私はこの失態のお詫びとして、奮発して二百七十円出しちゃうわ。四十五円の六人分で！」

「そんな無理しなくていいよ！　つぐみちゃん」

「私の気が済まないの。えいっ」

さくらが引き止める間もなく、つぐみは出した小銭を賽銭箱に投げ入れてしまった。さすがに全て五円玉というわけにはいかなかったようだ。

そして拝殿を真っ直ぐ見据え、合掌しかけたが、

「あっ。もう一つあった」

奈緒子が思い出したように叫んだので、動きが止まった。

「なに？　もう一つって」と千春が尋ねる。

「あのね、お寺参りは合掌でいいんだけど、神社参りはちょっと違うの」

「……そうなの？」

「えーと、二礼二拍一拝っていうんだけど……お手本見せてあげるね」

言うのと、奈緒子は自分の財布から出した小銭を賽銭箱に投げ入れる。ちやりん、と軽快な音がした後、拝殿に向かって二回、礼をしてみせた。そして、ぱん、ぱん、と二度手を叩く。そのまま合掌を続けるかと思いきや、手を下ろしてしまい、瞑目して一礼。少しの間その姿勢を保った後に、頭を上げた。

「これでおしまい」

奈緒子は他の五人に、にこっと笑いかける。さくらは「ほええ……」と驚いた顔で間の抜けた声を出し、つぐみや知世、利佳、千春も納得したように何度も頷いた。

「なんだか、やることが違うだけなのに全然雰囲気は別物だったわ」
感想を漏らしたのは、つぐみである。

「本当ね。荘厳な感じがしたわ」
「ええ」

と、利佳と知世が相槌を打った。奈緒子にはにこにこ笑いながら「わたし、こういうこと調べるの好きだから」と言った。

「じゃあ、やってみよっか」

「そうね」

千春の言葉に従い、まずつぐみ以外の四人が適当な小銭を賽銭箱に入れる。

拝殿に対して札を二回、手も二回叩いて、目を閉じ、頭を下げて願いを心に浮かべる。

「これでよろしいですか？」

「うん、完璧」

知世が確認を取ると、奈緒子は手でオーケーサインを出してみせた。「それじゃあ、今度はアンティークショップのほうに行きましょう」

「うん！ つぐみちゃん、そのお店どこにあるの？」

千春が提案し、さくらが待ちきれないといった様子で尋ねた。つぐみは「この近くの商店街の所よ。すぐに着くから」と答える。

「今度は定休日とかじゃないといいんだけどねー」

「大丈夫よ、きっと」

ははは、と苦笑いをするつぐみを利佳が宥めた。拝殿を後にした六人は、鳥居をくぐっていく。

「そういえば、みんな知ってる？」

不意に奈緒子が声を上げて、さくらたちはきよんとした。

「知ってるって……何を？」

「あのね、この町って幽霊がよく出るんだって！ 心霊スポットとかも多いみたいなのー！」

鳥居を見た時と同様に目を輝かせて言った奈緒子の科白に、さくらが真っ先に硬直し、

「ほええええええええ！」

と悲鳴を上げたのは言うまでもない。

「でさー、バニラアイスに醬油をかけると、なーんと！　みたらし団子味になっちゃうんだって！　スゴイだろ、スゴイだろ？」

下校中の一護と茶渡、水色、啓吾の四人は町の商店街を歩いていた。本当はたつきや千鶴、井上、そして石田も誘ったのだが、たつきは空手部、井上と石田は手芸部の活動があるため一緒に行けないと言ひ、千鶴に関しては「織姫が行かないなら私も行かない」と早々に断られてしまった。

そしてその中で、啓吾がやたらと（今に始まったことではないが）ハイテンションに喋り散らしている。

一護は大袈裟に溜息を吐いた。

「ほー、そりや確かにスゲーかもな」

「そうだろ？ イヤーお前ならきつと分かってくれるって信じてたよ一護！ 持つべきは親友だな！」

「オマエの舌はよっぽどおかしいんだろうなって意味だよ」

「そうそうオレの舌が……ってけなしてんじゃねーかア!!」

「うるさいなあ、あんまり大きな声出さないでよ」

ノリツツコミをかます啓吾の脇で水色が不機嫌な声を上げる。そして「ああごめん、なんでもないよ」と耳に当てた携帯電話に話しかけた。

「うう、なんだよう……どいつもこいつもオレのこと無視しやがって……」

「無視はしてねーだろ。いちいち落ち込んでんじゃねえよ」
道端にしゃがみこみ、「どよ〜ん」という効果音つきで”の”の字
を書く啓吾に、一護は呆れた声を出した。

「うん……うん……分かった。じゃ、また今度ね」

水色は幾度か電話の声に頷き、そう締め括ると、ホールボタンを押して携帯を畳んだ。

「ナオコさんか？」

歳の割に深みのある声で茶渡が尋ねると、水色は「ん、まあね」と軽く答える。

『ナオコさん』というのは、水色が前々から交際相手として話している年上の女性のことだ。高校生（初対面は中学時代だったらしいが）にしてそんな相手を口説き落とせる水色は只者ではない、というのが一護と茶渡の感想である。

「今日は仕事が長引くんだって。夕飯買って帰らないと」

「オマエも相っ変わらずとんでもねー不健全生活してるよな。いつか法律違反でしょっぴかれてもおかしくねえぞ」

「お褒めに預かり光栄です。あと余計なお世話」

一護がげんなりと言ったが、水色はいたって平然とした口調で受け流してみせる。

「あーああ……なんで水色みたいな童顔がモテて、超楽しくてこんなにも凛々しい俺が不人気なんだよー……この世の摂理はどうかしてるぞ」

「どうかしてんのはオマエの頭だ」

「またそういうことを言う！ よォしこーなったらそんな超冷たい一護にオレの念力で呪いをかけてやる！」

「なんの呪いだよ」

「一護ッ！ お前はその眉間のシワが消えない限り、一生女の子にはモテない！ さーあ呪ってやるー！」

「効くかそんなもん。それからお前と違って俺はモテなくても一切困らねえからな」

懲りずに騒ぎ立てる啓吾の馬鹿馬鹿しい試みを一護はさらっと躲した。

「ちくしょー！ 一護なんてキライだ——！！」

「キライで結構」

「おいチャド！ お前一護と中学校から一緒だったんだろ！？ なんであんな素っ気ない子に育っちゃったんだよ！！」

「いや、俺に言われてもどうしようもないんだが……」

「チャドは関係ねーだろ。っていうか『育っちゃった』ってなんだ。チャドは俺の親か！」

腹いせに茶渡に迫る啓吾の聞き捨てならない科白に、さすがの一護も食って掛かった。

――が。

ホロゝ――ウ！！　ホロゝ――ウ！！

「ぬおおおおウッ！？」

本日二度目の虚出現^{ホロウ}を叫び出した代行証。鳴き声の聞こえていない啓吾と水色は、突然奇声を上げた一護に不審な顔をする。

「……どしたの？ 一護」

水色にしては珍しく崩れた表情で聞かれ、「えっ、あつ、イヤ……」としどろもどろの口調で応えながら、苦し紛れの言い訳を頭の中で練り上げる。

「えっと……わ、悪い！ 学校に忘れ物してきたんで取ってくる！」
ベタな言い訳だったが、意外と通用したようで「えエー！？ こっから引き返したら遠いじゃん！」と啓吾が即座に不平を口にした。

「ホントに悪い！ 先に帰っていいから！ じゃあな！」

「ちょっ、待っ……一護ー！！」

啓吾はなおも引き止めようとしたが、その前に一護は来た道を駆け戻ってしまった。

途端に一護の背中からは、啓吾たちの視界から見えなくなっていく。

「なんだよー、そんなに大事な忘れ物なのか？」

純粹な疑問を口にする啓吾に、水色は「さあ……」と小首を傾げた。すると、脇から茶渡が一護の後を追うように足を踏み出した。しかし、

「ちよおっと待てえいチャドォー！！」

目一杯に背伸びをした啓吾に襟首を掴まれ、引っ張られたシャツが

喉元を圧迫して「うッ」と呻き声を上げながら立ち止まるしかなかった。

「……っな、なんだ？」

顔を振り向かせながら横目で啓吾を見て言うと、

「なんだじゃない！ お前今どこへ行こうとしてた！？」

何故か必死の形相で問い詰められる。茶渡はしばし黙り込んでいたが、

「……スマン、俺も忘れ物を」と、とりあえず言い訳する。

「ウソつけェ！ 『二人で仲良くワスレモノ♪』なんてマンガみたいなことがあってたまるかァ！ そうか分かったぞ、一護もお前も口裏合わせてオレにナイショでどっかイカガワシイ所に向かおうとしてたんだな！？ そうなんだな！？」

「ち、違……」

「おのれェ！ 一護どころかチャドまでオレを除け者にしやがって……ひどいぞひどいぞ！！ こうなったら天罰だ、うりゃあああ！！」

勝手な被害妄想を一人歩きさせて喚いた啓吾は、引っ張り下ろした茶渡の首に腕を巻き付け、渾身のヘッドロックを食い込ませた。

水色はその光景に「チャドに八つ当たりしなくても」と哀れみの視線を送る。

とはいえ、元々頑丈な茶渡なので、啓吾程度の腕力で首を絞められてもあまり効果がない。それでも茶渡は仕方なく逃れることを諦め、啓吾のヘッドロックを甘んじて受けてやる。

そしてふと、茶渡は視線を上げた。

視線の先、通りを挟むようにして佇む建物と建物に切り取られた空を、黒い影が音もなく横切る。

茶渡は知っていた。その影が、自分が今さっき助太刀に行こうとした親友のものであることを。

——油断するなよ、一護……。

茶渡は啓吾のヘッドロックをやんわりと解きながら、この場にな

い親友に向けて心の中だけで告げた。

「それでね、山崎君ったらこう言ったのよ」

神社からアンティークショップへ移動する道すがら、千春はこう続けた。

「神社の鳥居がどうして赤いか知ってる？ 魔除けのためっていうのも理由の一つなんだけど、それだけじゃなくて、最初に神社を建てた人の好きな色が赤だったからなんだ。その人は無類の赤色好きでね、元々は鳥居に限らず建物も賽銭箱もお札も注連縄しめなわも、神主さんの衣装もみーんな真っ赤だったんだよ。しまいには地面の石畳も赤にするつもりだったらしいんだけど、それじゃさすがに強烈すぎるからって地元の人に止められちゃったんだって。赤い鳥居が多いのはその名残なんだ」

「ほええ、そうだったんだ」

山崎の口調と声を真似た千春の語りに、さくらが素直に驚いた声を上げる。しかし千春は手をひらひらと振って「まさか！ ウソよウソ」と否定した。

「え、うそなの？」

「そうよ。山崎君ったら、中学生になってもうそつきなのよねー。わたし達はまだいいけど、なんにも知らない人が聞いたら冗談じゃ通じないのに」

目を丸くしているさくらの前で、千春は大袈裟に溜息を吐く。

山崎の”うそが直らない”という事自体も心配の一つだが、クラスが分かれてフォローができないせいで、他の人との関係がこじれてしまうのではないかというのが本音なのだろう。

「それがね、噂だと山崎君……教室ではうそなんて全然言わないらしいわ」

利佳の情報に、「ええっ、ほんと!？」と千春は驚愕した。

「でも、私たちと昼食をとるときはよくそういう話をしてらっしゃ

いますよね」

「この前たまたま掃除場所が一緒だったときもしてたもんね」と知世や奈緒子が首を傾げる。さらにつぐみも、

「私も、初めて会って早々にだまされちゃって『ああ、そういう趣味の人なんだな』って納得しちゃったくらいよ」

と追い討ちをかけた。すると、さくらが「あっ」と何か思い当たったように顔を上げる。

「ひょっとして、山崎君は千春ちゃんがいるときにだけうそついてるんじゃないかな？」

「え？」

「その鳥居の話をしたときって、帰り道で二人きりのときだったんだよね？」

「うん、そうだけど……」

「昼食のときだってほとんど千春ちゃんがいるし、あと掃除のときは……確か、奈緒子ちゃんと千春ちゃんと同じ班だよ？　だったら掃除場所と一緒にだったときも千春ちゃんが居合わせたってことになるし」

「ああ、そっか。じゃあ山崎君は、わざとわたしがいる前でうそついてるわけね」

さくらの言葉から導き出された結論に、千春は「きっとムキになって止めるのかもしれないわ」と不機嫌そうな声を出した。

この辺りの町並みは、比較的小さな建物ばかりが密集しているという特徴がある。

人気のない路地に肉体を脱ぎ捨てて死神化した一護は、建物の屋上と屋上を幾度も跳び移りながら、神経に突き刺さってくる霊圧の方向を辿っていた。

「間に合えよ……！」

風を切る感触を頬や肩に受けながら、一護は呟く。

今朝と違い、今感じ取れる霊圧は明らかに殺気が剥き出しだった。ということは、代行証が知らせた虚がすでにこの現世の空間に現出していることになる。

とつくに獲物を見つけて追い詰めてしまっているのか、あるいはまだ餌を物色している最中なのか。いずれにしても、犠牲を出さないために急を要することに変わりはない。

建物を跳び越える度、足下に広がる通りから人々が賑わう声が聞こえる。

その平和な喧騒とは裏腹に、一護の内心は不穏と焦燥に追われていた。

「けれど、それは千春ちゃんの前だからこそできることなのではありませんか？」

むくれた顔をした千春に、知世がそう話しかけた。

「きっと山崎君は、千春ちゃんのことを本当に好きでいらして、信用しているからこそ、千春ちゃんの前だけでうそをつかれるのではないでしょうか」

「え……」

千春が視線を上げると、知世はいつもの優しい微笑みを向けて、言葉が続ける。

「うそについて、千春ちゃんにそれをたしなめてもらう。それが、

山崎君なりの『好き』という気持ちの表し方なんですわ」

「……そ、そうかな」

戸惑い気味の千春だったが、さくらが「そうだよ」と同意した。

「だって、千春ちゃんと山崎君は幼稚園のときからずーっと一緒だったんでしょ？ だったらきつと、それだけ千春ちゃんのことが大好きなはずだよ」

屈託のない笑顔で躊躇いもなく言うさくらに、千春は思わず頬を朱に染めた。

「あらら……そんなに長い付き合いだったの、三原さんと山崎くん」
「つぐみちゃんは知らなかったっけ？」

「初耳よ。そうか、それはそれはお熱いことねえ、三原さん。全国の幼馴染みカップルの鑑じゃないの」

「もうっ、韋雀さんったら！」

——近い！

一護は確信していた。

姿こそ見えないものの、霊圧との距離は確実に縮まっている。

「もうすぐか……！」

一護は呟きながら建物の屋上を駆け抜け、行く先を塞ぐフェンスに足を掛け、数メートルほど離れた隣の建物目掛けて大きく跳んだ。しかし、

「あっ、あそこのお店よ」

千春をからかったそばで、つぐみは前方を指差した。

見ると、商店街に並ぶ建物の一角に、レトロな雰囲気漂わせるデザイン椅子が置かれ、可愛いウサギのぬいぐるみが「Welcome」の看板を抱えてちょこんと座り込んでいる。

「……なんだかおしゃれな感じのお店だね」

「さすが韋雀さんが見つけてくれたお店ね。行ってみましょう」

奈緒子が嬉しそうな声を出し、利佳がそれに続く。さくらは店へ小走りに向かおうとした。

しかし、

不意に日が翳った気がして、さくらはほとんど反射的に視線を上げた。

不意に視線を感じて、一護はほとんど反射的に下を見た。

そして、ほんの一瞬、

二人の目が合った。

——えっ……？

一護は驚愕した。

足下に広がる道路の片隅に立ったショートカットの少女が、死神化した自分の方を見ていたのだ。

さくらは啞然とした。

明らかに常人の力では飛び越えられない距離で離れた建物の間の空を、黒い服を着た人間が跳んでいたのだ。

そして、

たんっ、と一護は目標としていた建物に着地する。

しかし、そこから再び走り出すことはなく、しばし呆然としたままその場に立ち尽くした。

「……………」

それから急に思い立ったように慌てて踵を返し、屋上の縁から身を乗り出して道路を見下ろした。

さくらは、隣の建物に吸い込まれるようにして消えた黒い影に、しばし呆然としたままその場に立ち尽くした。しかし、

「さくらちゃん？　どうなさいました？」

後ろから駆け寄ってきた知世の声で我に返り、「えっ、あ、ううん。なんでもないの」と咄嗟に取り繕う。

「ほらっ、二人とも、早く行こう！」

そう言いながら、つぐみが背中をぐいぐいと押してきた。

さくらと知世は苦笑しながら、ガラスでできた店のドアを開けて中に入る。

ドアに吊るされたベルが涼しげな音を響かせるのを聞きながら、

——気のせい……だよな。

と、さくらは一人思い直していた。

見下ろした道路に、すでにあの少女の姿はなかった。どうやらその辺の店の中に入ってしまったらしい。一護は髪をわしゃわしゃと掻きながら、

——気のせい……だよな。別に俺のことを見てたとは限らないし……と、一人思い直す。

直後、いきなり背筋を伝わってきた強烈な殺気に、条件反射で斬月を掴んでいた。

案の定、鈍い音を立てて斬月の刃が黒光りした鋭く太い爪を食い止める。あとほんの数瞬でも反応が遅かったら、一護の体は無惨に切り裂かれていたことだろう。

視線を動かせば、予想通り仮面に覆われた虚ホロウの顔。口の両端が釣り上げられているように見えるのは、決して気のせいではない。

虚ホロウは防がれた爪を離しながら後ろへ飛び退き、一護から距離をとった。

虚ホロウから感じ取れる霊圧を探って、一護は軽く舌打ちする。間違いな

く、先刻まで自分が追っていた霊圧そのものだった。

「近い」とは感じ始めていたが、ここまで接近を許したつもりはなかった。油断していたという何よりもの証拠だ。

一護の動揺を察知したのか、虚ホロウがくつくつと肩を揺らして嗤わらった。その仕草がひどく癪に障ったが、些細な事で気持ちいを乱されてしまつては命取りになりかねない。一護は頭を振って斬月を掴み直し、呼吸を整え目の前の相手を倒すことだけに意識を集中させる。

勝利を確信した虚ホロウが、獣のような唸り声を上げて飛び掛ってきた。だが、

「——うるせえよ」

静かに言い放った一護の刃に、虚ホロウは体の真ん中からあえなく切り伏せられていた。

店に入るなり、レジから「いらっしやいませ」と決して愛想がいいとは言えない挨拶を発した店員の姿に、さくらは硬直しかけた。

「おっ、お兄ちゃん!？」

「……なんだ、さくらか」

予想だにしない兄の姿に驚くさくらに対して、レジに立った桃矢は極めて平静に応える。

「……こんなところで何してるの……?」

さくらが月並な質問をすると、桃矢は「バイトに決まってるんだろ」とやはり（少なくともこの兄妹にとっては）月並な返答を寄越した。

「お兄ちゃんって、ほんとうにどこでもバイトしてるよね……」

知世が桃矢に対して「こんにちは」と丁寧に頭を下げている傍ら、さくらはぼそりと呟く。

大学の授業料を自分で払うと宣言した桃矢は、高校卒業後もあちこちでバイトを続けている。

最近は自由時間が増えたので、友枝町から少し遠出をしてのバイトにも励んでいると聞いてはいたが、まさか隣町で鉢合わせようとは

思ってもみなかった。

「別に、おれだけじゃねえぞ」

桃矢が唐突に言い、「ほえ？」と首を傾げる。そこへ「あれっ、さくらちゃん？」と馴染みのある声がしたので、くると顔を向けた。そこには、商品が詰まった段ボール箱を抱えた、眼鏡と灰色の髪が特徴的な青年が立っている。

「ゆ……雪兎さん！　こんにちは！」

「こんにちは。会うの久しぶりだね」

桃矢の高校時代からの親友・月城雪兎は、慌てて頭を下げたさくらに柔らかな笑顔を返す。その物腰は『温和』という熟語を絵に描いたかのようだ。

「ご無沙汰しています、月城さん」

「知世ちゃんもこんにちは。二人とも学校の帰り？」

「ええ。クラスメイトの方に、こちらのお店を案内してもらったんです」

「ああ、そうなんだ」

言いながら段ボールをレジのカウンターに置く雪兎に、さくらが尋ねた。

「雪兎さんもバイトなんですか？」

「うん。このお店のオーナーがぼくのご近所さんの親戚でね、まだ開店したばかりで人手が足りないから、手伝ってくれないかって言われたんだ。それでぼくがとーやと一緒にやらないかって誘ったんだよ」

「ほええ……そうだったんですか」

「そういえば、李君は一緒じゃないの？」

雪兎の質問に、無言でむっとした表情を浮かべたのは桃矢である。さくらは小狼が香港から戻ってきたとき、雪兎に改めて紹介をしていたのだが、桃矢は未だに小狼のことが気に入らないらしい。

「今日は委員会の仕事があって来れなかったんです」

「そっか。中学生だって忙しいもんね」

そんなことを話していると、先に品物を眺めていたつぐみが「木之本さん、見て！ これ可愛いわよー」と奥の方から声をかけてきた。横で聞いていた雪兎は気を利かせて、

「行っておいでよ。何か気に入ったものがあれば持ってきてね」

と言った。さくらはその言葉に「ありがとうございます！」と礼を述べ、知世と一緒につぐみの所へと向かった。

つぐみが手に取ったカップを見ながら、さくらはにこにこ微笑んで桃矢と話し込む雪兎の姿を横目で見た。

——そういえば、もう随分長い間、月^{ユエ}さんとも会っていないなあ……ケルベロスとは対に当たるもう一人のカードの守護者・月^{ユエ}は、雪兎を仮の姿として存在しているが、本人とは意識を別に有している。何度も真の姿に変わっても維持するために魔力を消費してしまうため、よほどのことがない限りは雪兎として振舞うようにしているのだ。

桃矢と共に雪兎も大学に進学して以来、さくらと顔を合わせる機会が減ってしまった。なので必然的に、月^{ユエ}と会う回数も減ることになる。

見た所、雪兎は今までと変わりなく元気そうなので、月^{ユエ}も元気なのだろうと思う。しかし、ようやく打ち解け合えるようになってきたので、顔を見れないというのは少し寂しい。

せっかくだから夕飯にでも誘おうかな、と考え始めたとき、桃矢の嫌味な科白が投げかけられた。

「品物を見んのはいいけど、壊したりすんなよ」

「いつ、言われなくても分かってるもん！」

反論するさくらはいたって必死だったが、『仲のいい兄妹喧嘩』という和やかな光景に、周りから温かい眼差しが向けられるだけであった。

「あー、疲れた……」

無事に虚を昇華し、肉体に戻って再び帰途に就いた一護は、首の関節を鳴らしながらぼやいた。

当然のことだが、虚の出没は昼だろうが夜だろうが時間帯は全く関係ない。『死神代行』の肩書きを請け負ったからには仕方のないことではあるが、あまりなりふり構わないのも勘弁してほしいというのが本音だ。特に授業中に呼び出しを食らった暁には、下手をする

と欠席扱いで成績の降下を避けられない。

「精が出るのう、一護」
不意に、頭一つ分上の方から年寄りじみた声が聞こえて、一護は顔を上げた。

直立した塀の上に一匹の黒猫がちょこんと座り込み、こちらを見下ろしていた。

「夜一さん……どーしたんだよ、こんな所で」

「なに、ちょっと様子を見に來ただけじゃ。別にどうということもない」

黒猫——正確には、黒猫に化けた四楓院夜一しほういん よるいちはそう言うのと、くあつ、と呑気なあくびをする。

「大分くたびれておるようじゃな。今日はそんなに多く虚ホロウが出たか？」

「いや。二匹だけだよ。けど朝イチと、もう一匹は探し出すのにメチャクチャ走り回った」

「相変わらずの霊圧探查音痴じゃな」

「オンチって言うな！」

道端で猫に向かって怒鳴りつける一護の姿は異様極まりなかったが、その場に誰もいないことが幸いした。

すると突然、甲高い着信音が鳴り響く。

一護は二度に渡る代行証の鳴き声攻撃で耐性がついたのであまり驚かず、バッグのサイドに着いたケースから携帯電話を取り出して開いた。画面には「着信・家」と表示されている。

一護は「ちよつと悪い」と夜一に断ってから通話ボタンを押した。

「はい、もしもし」

『あつ、おにいちゃん？ わたしー』

「遊子か。なんだよ、電話なんかして」

『あのね、今夜の晩ごはんクリームシチューにしようと思ったんだけど、ルーが切れちゃってて……近くのお店で買ってきてくれない？』

「シチューのルー？ あー……分かった、買ってくる。何でもいいのか？」

『えっとね、できればコクマルシチューがいいな。なかったらいちばん安いのでいいから』

「はいよ、了解」

『一護オ！ 分かってるだろうな、夕飯はし・ち・じ・だぞ！ 絶対厳守だぞッ！ 破ったら血の制裁が下るからな覚悟しとけェ！』

「……人の耳にタコ作る気か、ヒゲ親父……もう切るぞ」

『なんだとう！？ このバカ息——』

通話口の向こうで騒ぐ一心の声を無視して、一護は携帯電話をぱしりと畳む。

「夜一さん、すまねえ。ちょっと用事ができたんで行くわ」

「おお、そうか。別に構わぬ。何かあったら知らせるのじゃぞ」

「ああ。じゃあな」

一護は軽く手を挙げて、夜一の前から走り去った。見送った夜一は「さて、儂も帰るとするか」と呟き、ゆっくりと立ち上がる。

——その刹那、鋭い針のように背筋へ突き刺さった、本能の告げる冷たい感触に、夜一はバツと振り返った。

「……………」

背後に広がる景色に異常はない。

ゆるゆると薄闇で覆われていく、いつもの夕刻の町並みがあるだけだ。

「——気のせいかな…？」

視線を感じたのだが、と一人ごちる夜一の目付きはいつになく陰し

い。

しかし、視線の出所とその有無も確かめようがなかったため、夜一は仕方なく諦めて塀を軽い身こなしで飛び降り、どこか慌ただしい様子で道路を駆けていった。

日が沈んだばかりの、橙色の昼の光が残る西の空。

日がすでに過ぎ去り、紫紺の夜の闇が迫る東の空。

その昼と夜の色が混じり合う、境界が差し掛かった天頂の真下で、少年は笑っていた。

古びた細い電柱の上へ器用に直立した少年は、影に包み込まれていく町を見下ろして、くすり、と声を漏らす。

視界の端では、塀の上にいた黒猫が道路をさっさと走っていた。

「あぶないあぶない。みつかっちゃうとこだった」

少年は弓なりに歪めた口を動かして、小さく呟いた。

空が、昏い闇に支配されていく。

T o b e C o n t i n u e d

Opus THREE (後書き)

導入編終了。長くてごめんなさい。

次から本格的に話が展開していきます。再投稿に際して改訂加えようと読めば読むほど読みづらい文章で、勢いだけでやってた当時の自分の執筆センスを疑った。

では、サブタイトルについて説明しましょうね！

まず、作品の目次にて各話のナンバリングを「Opus (英訳数字)」としています。これは今回の再投稿において付け加えたものです。辞書によれば、opusは主に音楽作品を指し示す名詞で、通常は「Op.」と略し、前に作者名、後に数字を入れることで「〳の作品：番」というふうに楽曲の作品番号の接頭語として使われるようです。

原作BLEACHにおいても、ルキアの過去篇のサブタイトルで使われてましたので拝借しました。

ちなみに最初に投稿した「オーパス・マイナスワン」は「Opus MINUS ONE (－1)」。その次の「OVERTURE」は序曲の意味で、一話の前に入るため、当初は「Opus ZERO」と入れる予定でした。まえがきはさらにその前だからマイナス1ということです。まああまり気にしなくていいです。

そして、一・二話目の英語タイトルは「Parallel Lines」。「平行線」という意味。

対して今回の三話目は「Intersection」。これは「(直線や面の)交点」のこと。どれも三話目の冒頭に入れた詩の内容に引っ掛けてあります。

それから、一・二話目は『CCさくら』側と『BLEACH』側の視点を分けて書いたので、後ろに「side・CHERRY」「s

ide..BERRY』と付け加えました。これは、

さくら Ⅱ桜 Ⅱcherryblossom

一護 Ⅱイチゴ Ⅱstrawberry

なので、それぞれ発音の似ているcherryとberryだけを取り出して対比をはかったというもの。

日本語タイトルについても補足。一・二話の「少女の日常」「少年の日常」は、まあ読んで字の如しです。

三話目の「袖振り合うも多生の縁」は、最初どんなタイトルにするか悩んだ。ほんの一瞬視線が合っただけのさくらと一護の二人が、これから深く関わり合うという今後の展開にあやかって、このことわざを使ってみた。

あと、英語タイトルにいちいちルビを振ってますが、携帯だと読みにくいのを承知で入れてます。

原作BLEACHでも各サブタイトルの後ろにカタカナで読み仮名を入れていたのでそれに倣いたいなーと思いつつ。

でも英文にルビ入れるには各単語ごとに区切って入れないとうまく表示されないことが判明してこんな見苦しい感じに……携帯ユーザーの皆様申し訳ないです。

サブタイトルはいろいろ工夫してつけていたけど、工夫すぎて意味が分かんなくなったりしてるのでこうして補足して逃げ道を作ります。

退屈でなければ、今後もお付き合い下さいませ。

啓吾の言ってた「バナライースに醤油を入れるとみたらし団子味」っていうのは、あるテレビ番組から得た情報です。……え、実践はしてないよ。

そして、奈緒子が「空座町は幽霊が多い」って言ってる原因は、BLEACHの単行本読めば分かるはず。この土地は幽霊の集まりやすい重霊地だから。オカルト好きの彼女からしたら、ここは聖地みたいなのかなんでしょう。多分。

Opus FOUR

「……はあ？ 魔法使わずに身一つで空を飛ぶ方法やて？」

夜。さくらの部屋でそんな声を上げたのは、ケルベロスである。

「何言うてんねん、そんな無理に決まっとるやろ」

「……だよね」

勉強机の上に広げたノートに教科書の英文を書き写しながら、さくらは乾いた笑いを浮かべて相槌を打った。

ケルベロスは身の丈に合わず大きなスプーンを使って、皿に盛られたプリンをすくい取り、口の中に押し込む。

いつもならそのままプリンの味に酔いしれるところだが、いきなり投げかけられた妙な疑問に対する不審の方が勝って、表情の渋さに変わりはしない。

「しっかしなあ……なんで急にそないなこと聞くんや？」

「え……ううん。なんでもないの。ちょっと気になっただけ」

手をひらひらと振って誤魔化すさくらに、ケルベロスはつぶらな目を瞬かせて「ほんまかいな」とどこか疑わしそうに言う。

その後も、さくらはケルベロスがプリンを平らげていく横で、英語の授業の予習を黙々と続けた。

それでも、あの空を横切った人影の纏う黒色が脳裏にちらついて仕方なかった。

Intersection 2 [OMENS]

インターセクション

オームズ

—それぞれの予兆—

気付いたとき、一護は直立したビルの壁に寝転がっていた。

「——ここは……」

しばし呆然とした後、むくり、と体を起こす。首を振って、自分にとっての後ろを振り返ってみると、ずっと遠く、建物の壁の終わりに、垂直角度で広がる道路があった。いわゆる地面が、そこにある。今度は自分にとっての前をしてみる。壁はずっと先の所で途切れ、その向こうに地面と同じ方向に広がる青い空があった。

本来ならば、壁に張り付いたような状態に相当する一護の体は、後ろの地面へ真っ逆さまに落ちているはずだ。

だが実際は何事もなく、一護は平然とそこに座っけいられる。

重力の方向自体が、九十度回転してしまっているのだ。

この非現実的な摂理の成り立つ世界を、一護は知っていた。——正確には、一護だけが知っていた。

「一護」

不意に呼びかける声が聞こえて、一護は、つい、と視線を動かす。建物の壁から生えた、広告をぶら下げるための金属ポール。その先端に黒い影が立っていた。

最初に目に入るのは、裾がぼろぼろに擦り切れた丈の長いマントを思わせるコート。表は塗り潰したような漆黒だが、風に靡く度に垣間見える裏地の色は、血を髣髴とさせる深い赤だ。

そのコートの裾の終わりから、同じ黒の衣服に包まれた比較的細い足が伸び、丈夫そうな黒の靴を履いている。

そして、コートの襟に乗っているのは、サングラスをかけた髭面の男の顔。お世辞にも整っているとは言えない長髪がコートの裾と同じように揺れ、時折その顔を隠していた。

「斬月のオッサン……」

一護は呟いた。光の加減で見え隠れする、サングラスの向こうの鋭

い目が、こちらに向く。

「ど：どうしたんだよ、オッサン……っ！か俺、なんでまたここに――」

「一護」

質問を羅列させる一護を遮って、男――斬月は再度呼びかける。

いつになく頑なな声音に、一護は眉を顰めた。

「気を付けろ」

前置きをすっ飛ばした唐突な警告に、「はっ？」と一護は思わず間拔けな声を漏らす。

「お前は再び試されることになる」

「……試される、って……」

「忘れるな、一護」

「へ？」

「お前の刃を鈍らせるのは、取るに足らない恐怖心――それさえ捨てれば、お前の力に限りはない」

「イヤ、俺そんなこと聞いてないんですけど！んなカッコつけてないで何が起こっ――」

言いかけて、一護は絶句した。

斬月の立つポールを囲むように、白い建物の壁に黒いシミが浮かび始めていた。

それはみるみる内に壁面からあふれ出し、ごぼりと音を立てて盛り上がり、自分達にとつての天井に向かって流れ出した。ちょうど、シャワーを逆さまにして見たときのように。

その黒いもの――いや、よく見れば暗紫色に近い液体のようなものは、濃縮された重油のようにどろどろと筋を引いて、壁面から天井に上っていく。斬月がその中に囲い込まれていることに気付き、一護は驚いて「オッサン！？」と声を荒げる。

だが斬月は微動だにせず、悠然と佇んだまま一護を見やるだけだった。

「一護――分からないから、知らぬことだからといって、恐れるな

打つ手がないからといって、立ち止まるな

お前はただ、前を見、そしてそこへ進め」

暗紫色の液体が上下に引いた筋は独房の鉄格子を思わせ、その中に立つ斬月は、暗紫色の牢に囚われた捕虜のようだった。暗紫色の筋が作る格子は、徐々に太さを増していく。

「オッサン!!」

異様な光景に落ち着いていられず、一護は慌てて立ち上がり、全速力で斬月に駆け寄った。

斬月は平然としたまま、訥々と一護に語り続ける。何か悟ったような眼差しを向けて。

「退けば老いる、臆せば死ぬ

己の望みを、目的を、決して見失うな——」

その言葉を最後に、太さを増した暗紫色の筋が互いに融合しあい、一切の隙間という隙間を閉じて、円形の薄い壁と化した。

斬月を中に封じて。

駆け寄った一護は間に合わず、暗紫色の壁にぶつかる。

「オッサン……!! 斬月のオッサン!! おい、返事しろよ!!」

一護は壁を拳で力任せに叩き、中にいるはずの斬月に呼びかける。しかし返事はなく、壁も薄いはずなのにびくともしない。

「オッサン! オッサンっ!!」

それでも一護は叫び続ける。

だが、不意に背後から服の裾を引っ張られた気がして、反射的に振り返った。

「ねえ、おにいちゃん」

低い位置から幼い声が聞こえ、一護は視線を下ろす。

そこには、自分の腰辺りまでしか身長が及ばない小さな一人の少年が服の裾を掴み、立っていた。

誰だ? という疑問が真っ先に浮かぶ。

「あそぼうよ。ぼくと、おねえちゃんといっしょに」

あどけなく、どこかたどたどしい言葉遣いで、少年は言う。

今の自分の焦燥とは正反対の場違いな無邪気さに、一護は返すべき反応を忘れた。

弓なりに歪められた口元の形には、ひどく禍々しい悪意が含まれているようにも見えた。

そして、視界がぷつりと暗転する。

どごっ！

「……いってえ」

肩の辺りからずきずきと響く鈍痛に、一護は掠れた声で呻いた。

頬へ押し当てられているのは、硬いフローリングの感触。うっすらと目を開けてみると、見慣れた木目模様が視界一杯に広がっている。そこでようやく、一護は自分がベッドから転げ落ちたことを理解した。

目だけを動かして窓の方を見れば、白く輝く朝日が差し込んでいた。寝起きの体にのしかかる気だるさを振り払って、のろのろと起き上がる。床に胡坐をかいたような姿勢のまま、一護は「あゝ」と唸って、痛みの残る肩をさすった。

「なにボサツとしてんだアア！！」

怒鳴り声と共に何かが飛んでくるような気配を背中に感じ、一護は無言で、その気配目掛けて肘鉄を繰り出した。

「おフツ！！」という声と、肘の関節に柔らかいものが当たる感触が重なる。

ばすん、とそれが床に激突する音の後、視線を向けてみれば、顔の真ん中だけが異様に凹んだコンが床の上で仰向けに転がっていた。大方、昨日の朝のように飛び蹴りをくらわせるつもりだったのだろう。

「朝っぱらから人を蹴るなっつったろ」

一切の哀れみを捨てた一護は立ち上がり、自分と一緒にベッドからずり落ちたタオルケットを大雑把に敷き直す。

「ぐ……この身の程知らずめ！　せつかく人が心配して、スローペー
ースの思考回路を正常稼働させてやろうと思ってたのに……！」
「テメーが俺の心配？　なんだよ気持ちワリいな。今日は雪でも降
るのか」

「……オメーにや感謝のかの字もねえみてーだな」

コンが素直な感想を口にした直後、今度は一護の突き出した爪先が
コンの頭にヒットする。

「うげ！」と蛙が潰れるような声を漏らして、コンは再びダウンし
た。

「オマエは一言多いんだよ。で、何が心配だって？」

コンは体を起こして「くそっ、暴力反対だ……！」と自分を柵に上げ
て悪態を吐いてから答える。

「なになって、お前さっきベッドから落ちるまでスゲー汗かいて、う
んうんうなされてたじゃねーか」

「……うなされてた？」

鸚鵡返しをしながら、一護はふとこめかみへ手をやってみた。長時
間運動をした後と見紛う程の汗が掌にべったりと纏わりつく。じっ
としているにもかかわらず、それは雫となって流れ落ちていった。
夕べって、そんなに暑かったか？と一護は疑問を募らせる。そして、
思い当たった。

「……そうだよ、夢見てたんだった」

「ゆめえ？　なんだそりゃ」

「ああ、それが――」

言いかけて、一護は二の句が継げなくなった。

中途半端に口を開いたまま黙り込んだ一護の様子に、コンは「なん
だ、どーした？」と首を傾げる。

一護はばつが悪そうに首の後ろを掻いて、

「……………忘れた」

それだけ言った。

「はア!？」

「イヤ……なんか色々切羽詰まったというか大切というかそーゆー内容なのは分かんだけど、全然思いつけねえ」

「おまつ——そ、そうか、尸魂界のゴタゴタでどうとう脳ミソにガタがきちまったんだな!？」

一護は条件反射のような当たり前じみた動作でコンを踏み潰した。

「くそー、なんだっけ……メチャクチャ大事な内容のはずなのに、覚えてねえってどういうことだよ」

ベッドサイドの引き出しに入れていたタオルで汗を拭い、足下のコンをぐりぐりと容赦なく床に押し付けながら呟く。

夢の内容など、普段なら取るに足らないような事柄だ。しかし安易にそれを忘れ去ってしまうことを、一護の中の無意識が激しく拒絶していた。

——なんなんだ、この感覚。

今まで味わったことのない妙な歯痒さに、一護は無性に苛立ちを覚えた。しかし思いつけないものをどうすることもできない。

「おにーちゃん、時間だいじょうぶー？」

ドアの向こうから聞こえた遊子の声に、机の上の置時計へ目をやる。

「……うわ! やべえ遅刻する!」

返事の代わりにそう叫んで、一護は急いで着替えに取りかかった。

それでも、脳裏へ残像のように焼きついた気味の悪い違和感が消えることはなかった。

二時間目、体育。

時間割表に書き出された、そんな予定に辟易した生徒は少なくない。ましてや今は、真夏の暑さが残る九月。これで平然としているという方が無理なのかもしれない。

しかし、当然のように例外もある。

さくらはその一人として数えられていた。

ぴっ、と甲高い笛の音。

体育館に敷かれた白いマットに向かって、さくらは真っ直ぐ駆けていく。

あと一メートルという所で軽く床を蹴って、手をマットについて倒立し、前転跳びをした。着地すると、もう一度前転跳び。さらにもう一度跳んで倒立するが、今度は空中で身を180度捻ってみせた。たんっ、と軽快な音を立てて、マットの上へ華麗に着地したさくらは、満面の笑顔。

途端、同じ体育館に集まっていた同級生達の間から「おおーっ」と歓声上がる。

「……うん、なかなかいいな、木之本。じゃ、次は工藤」

脇で成績をつける教師が告げると、さくらは他の生徒達に混じって床へ体育座りをし、呼ばれた生徒が代わりにマットの前へ出る。

ぴっ、とまた笛の音が響く傍らで、さくらの隣にいた知世が話しかけた。

「さすがさくらちゃん。今日も絶好調ですわね」

「まともにできるのが体育ぐらいっていうだけだよ」

私語に気付かれると教師が注意するので、二人は声をひそめている。

「そういえば……昨日、帰りに葦雀と神社に行ってきたんだろ？」

目の前に座っていた小狼が、首だけを振り向かせて聞いてくると、

さくらはこくりと頷いた。

「でも昨日は休みで、お参りだけしてきたんだ」

「ごめん……一緒に行けなくて」

「委員会だもん、仕方ないよ。場所は分かったから、今度は二人で行かない？」

さくらがさらりと言った「二人で」の部分に、小狼は「えっ」と過剰反応してしまった。みるみる内に顔が赤くなっていくので、さくらが首を傾げて「どうしたの？」と尋ねると、

「な、なんでもないっ」

と誤魔化して、顔の向きを正面に戻す。さくらは目をぱちくりとさ

せたが、知世は小狼の内心をすで見透かして、くすくすと笑っていた。

それから二、三人の生徒がマット演技を終えると、教師は体育館に置かれた時計を見て「それじゃあ、今日はここまでにするか」と体育系ならではの張りのある声を上げる。

その言葉に反応して、床に座っていた生徒たちが次々に立ち上がり、気を付けの姿勢をとった。

教師は閉じた成績帳簿を小脇に抱える。

「えーと今日は……C組の人、マットの片付け頼むぞ。では、解散！」

生徒全員が「ありがとうございました！」と声を揃え、一礼をする。それぞれ思い思いの授業感想を述べながら、更衣室へ移動を始めた。その中で、C組のさくらたちは体育館に敷かれたマットの片付けに取りかかる。

「あつ。木之本さん、ちょっと！」

マットの端を掴もうと屈んださくらの背中に声が掛けられ、同時に肩に手を置かれた。

その刹那、目の前の世界が、火にあぶられた蠟細工のようにぐにゃりと歪んだ。

え？

どくん、と、ほんの一瞬だけ、心臓が跳ね上がった気がした。

そのままガスが抜けるかのように、体が勝手に力を失い、重力に引かれてゆっくりと傾いていく。

なに、これ……？

どっ、という音を立てて、片付けようとしていたマットの上に突っ伏する。

徐々に色を失い、光も失われていく世界を見つめたまま、さくらはどこか遠くで、自分を呼ぶ声とざわめきを聞いていた。そして、視界がぷつりと暗転する。

真っ暗で、真っ黒な空を見上げ、さくらは「まただ」と呟いた。

口を動かしたはずなのに、そこから発せられるはずの声は耳に届かない。

——風が、生ぬるい。

前と違う所があるとすれば、それくらいだろうか。しかし、さくらはすぐにそれだけでないことに気付いた。

ないのだ。あの、世界を見下ろすように堂々とそびえ立っていた、白亜の塔が。

よく見れば、そこは明らかに前とは雰囲気異なった、全く別な場所だった。

所狭しと密集した、数々の四角い建物。その合間に張り巡らされた道路。見覚えのある、町並み。

——ここって……友枝町……？

視線を巡らせながら、そう考えたが、ふと、視界の端に見えた赤い鳥居に目を見開く。

——あれは……たしか、易西神社……

ということは。ここは友枝町の中でも、隣の空座町との境界の近くだ。

どうして。そんな疑問が浮かんだとき、気付いた。鳥居の近くの建物に佇む黒い人影を。

吹き付ける風に合わせて、黒い着物の裾と、オレンジ色の髪と、背負った刃物に巻き付いた白い布が、ゆらりゆらりと揺れている。

——あの人……

以前、真正面からぶつかった真っ直ぐな意志を宿した茶色の瞳は、こちらには向けられていない。

それに、こちらの気配に気づいている様子もない。

証拠に、人影は何かを追うように、背を向けたまま立っていた建物から飛び降りて、さくらの視界から消えてしまった。

「ま、待って……！」

思わずさくらは人影に追いつがっていた。追う理由などないはずなのに、体が勝手に動いていた。

だが、不意に背後から腕を引っ張られ、反射的に振り返った。

「ねえ、おねえちゃん」

低い位置から幼い声が聞こえ、さくらは視線を下ろす。

そこには、自分の胸辺りまでしか身長が及ばない小さな一人の少年がさくらの手首を掴み、立っていた。

だれ？という疑問が真っ先に浮かぶ。

「あそぼうよ。ぼくと、おにいちゃんといっしょに」

あどけなく、どこかたどたどしい言葉遣いで、少年は無邪気に言う。今の自分の焦燥とは正反対の、場違いな無邪気さに、さくらは返すべき反応を忘れた。

弓なりに歪められた口元の形には、ひどく禍々しい悪意が含まれているようにも見えた。

きーんこーんかーんこーん。

「……ほえ……？」

どこか間拔けな響きのチャイムに、さくらは声を漏らした。

うつすらと目を開くと、霞がかった視界の中に、天井で光る蛍光灯が映る。背中や後頭部に当たっているのは、柔らかい枕とシーツの感触。消毒液の臭いが、つん、と鼻腔を刺激した。

「……どこだろう……」

そんな疑問を浮かべながらさくらは起き上がろうとしたが、

「——さくらちゃん!?」

「さくらっ！」

ばたばたと駆けるような足音と、二人分の呼び声が脇から聞こえ、視線だけを動かす。体操着姿の知世と小狼が、ひどく心配そうな表情でこちらを覗きこんでいた。

そこでようやく、さくらは自分がベッドに横になっていることを理解した。

さらに、「気が付いたかな？」と間延びしたような口調で、二人の後ろから保健室の女校医が顔を出す。

「あの……わたし……？」

「体育が終わった後に、気を失って倒れたそうよ。覚えてない？」前髪を掻き上げ、額に手を置きながら説明する校医の言葉に、さくらは意識が途絶える前の最後の記憶をたどった。

——確か、誰かに呼ばれて、振り向こうとしたら、力が抜けて……一通り思い出そうとするが、どこかにぶつけたとか、気持ち悪くなっただとか、そういう感覚はなかった。

純粹に「どうしてだろう」ということしか考えることができない。「うーん……熱はないみたいだねえ。顔色も悪くないし、軽い貧血かな？」

さくらの額に手を当てたまま、首を傾げながら言う校医の顔を、知世と小狼は不安そうな面持ちで見つめる。

「木之本さんだっけ。今はどう？ 気分悪かったりする？」

尋ねられ、さくらは軽く呼吸をし、体の具合を確かめてから小さくかぶりを振った。

「そうか……うん、でも大事を取って次の三時間目は休みなさい。ひよっとしたらあなたも気付かないうちに疲れてたのかもしれないわ。また倒れられても困っちゃうしね」

授業欠席の連絡票書いとくわ、とさばさばした口調で言い残して、校医はさくらの視界から去った。

「よかったですわ。お体の調子、悪くないみたいで」

「うん……心配かけてごめんね」

「けど、本当に大丈夫か？ 早退したほうがいいんじゃない？」

「大丈夫だよ。本当に平気だから……」

知世はすでに安堵した様子だったが、小狼の顔から心配の色が消えることはなかった。

がらり、と保健室の引き戸が開く音がした。三人がほぼ同時に見ると、すでに体操着から制服に着替えたつぐみが立っていた。

「つぐみちゃん……？ どうしたの？」

「あ、木之本さん！ 気が付いたのね！」

ベッドの中で尋ねるさくらの声に、つぐみは慌ただしい様子で傍に駆け寄る。

「ああよかった……びっくりしたわよ、私が肩叩いたそばから倒れちゃうんだもの」

つぐみの言葉に、さくらはハッとした。

「あ……じゃあ、あのとき私に声掛けたのって、つぐみちゃんだっただの？」

聞くと、つぐみは「ええ」と頷く。

「何か、ご用があったんですの？」

「あっただけど……大したことじゃないのよ。それに、木之本さんが倒れちゃったもんだから、自分でも何言おうとしてたかド忘れしちゃったのよね」

知世の問いに答えながら、つぐみは「あははは」と照れくさそうに笑う。

「ここに来たのは保健委員の仕事か？」

「まあそんなところ。ついであってことで、木之本さんの様子見にきただけよ」

「ありがとう。心配してくれて」

「クラスメイトとして当然のことよ。それにしても——」

つぐみは話しかけてきた小狼の顔を見ると、にやっ、と含み笑いをした。

「私、李くんは割と奥手なほうだと思ってたんだけど……やるときはやるのねえ」

そんなことを言うつぐみに、小狼の表情が硬直し、さくらはきよんとする。

すると、その横で知世がおもむろに携帯電話を取り出し、何やら操作をし始めた。さくらは布団をどかして起き上がり、知世の携帯を覗き込む。画面に覗き見防止の偏光フィルムでも貼っているのか、横からだとよく見えなかったが、どうやら保存した画像を出しているらしい。

少しすると、目的のものを見つけたようで「どうぞ」とさくらに携帯を差し出した。さくらは頭上に疑問符を浮かべながら素直にそれを受け取り、画面を見て――

「……ほえええええっ!!」

悲鳴を上げた。

縦長の画面の中には、体育着姿の二人の人間の姿が収まっていた。一人は小狼、もう一人は他ならぬさくら自身。問題は二人の状態である。

さくらは気絶していて、ぐったりとしている。その体を画面の真ん中に立った小狼が、両脇と膝下に腕を通して持ち上げていた。いわゆる『お姫様抱っこ』というやつだ。

画像を見つめたままベッドの上で固まっているさくらに、小狼は「まさか」というような顔で慌てて携帯を奪い取った。予想した通りの絵が表示されているのを見ると、真っ赤になって、

「だっ、大道寺っ! 一つのまにこんなっ……!?!」

と、画像を撮影した張本人に詰め寄る。

「さくらちゃんが倒れられたとき、他のみなさんに混じってこっそり撮っておきましたの。いつでもどこでも、さくらちゃんのシャッターチャンスを捉えられるように、今日から携帯を常に持ち歩くようにしていたのですが……こんなに早く役立つとは思いませんでしたわ」

おほほほ、と愛嬌たっぷりと言う知世に、小狼はがくつと脱力し、さくらも「知世ちゃん……」と肩を落とした。

小狼が手にしたままの携帯を横から覗き込んだつぐみは、「あらー。抜かりないのね大道寺さん」と呑気な感想を述べる。

「気絶した木之本さんを運ぶのに先生が担架取りに行ったら、李くんが先生が戻ってくるの待たないでいきなりこれだもの。もうみんなびっくりしちゃったわよ」

頼んでもいない解説に、さくらと小狼の額からたらたらと冷や汗が噴き出す。そのとき、たまたま同時に顔を上げた二人の目がはたりと合った。

二人はほぼ同時に赤面して、羞恥のあまりすぐに視線を逸らしてしまった。

「はいはい、そのやけに盛り上がってるクラスメイト三人！心配して傍にこうとするのはいい心掛けだけど、彼女はこれから休むから、あなたたちは教室に戻って生徒らしく勉強なさい」

ぱんぱん、と手を叩きながら言い放つ校医の言葉に、知世とつぐみが「はい」と声を揃える。小狼は動転した自分の行動を思い起こして激しい後悔に襲われているのか、返事をする気力もないようだった。

「じゃ、三時間目終わったらまた来るから。保健委員の役目だしね」「うん……」

「あ、それとも李くんが迎えに行った方がいいのかしらー？」

「つぐみちゃんー！」

「葦雀っ！！」

再び赤くなるさくらと小狼の声が、見事なまでのタイミングで重なった。

To be Continued

Opus FOUR (後書き)

ネタ切れしたため、英語タイトルを前回に引き続きでIntersections 2としました。□内は副題といったところででしょうか。omenは「兆し、予兆」という意味です。良いこと・悪いことの両方に対して使います。あるいは「予言、予知」という意味もあるんだとか。

さくらと一護、二人ともの事を同時に示したいと思い、わざと複数形にしてあります。

そして日本語タイトルはひねりもなくそのまんまです。

初登場の斬月のオッサンは、執筆を始めた当初からずっと書きたいと思っていた人でした。

ものっそい大真面目で威風堂々で貫禄たっぷりで言葉に説得力がみなぎっている。でも人の話を聞かない。

なんか読んで急に「がくっ」とずっこけたくなるようなキャラクター作りは、久保帯人先生ならではの手法だなと密かに惹かれました。

いやそれにしても重力方向がデタラメな一護の精神世界の描写は難しかった。

そして今回のテーマは読めばわかると思いますが「さくらにぞっこの小狼君をいじり倒そう」です(待て)。

普段落ち着いているけど、さくらに何かあると簡単に取り乱して周りが見えなくなる彼を無性に書きたくなりました。人はそんな彼をヘタレと呼ぶ(超失礼)。

実家で武芸を仕込まれたであろう彼ならば、姫様抱っこくらいお茶の子でしょう。

ちなみにアイスやプリンを幸せそうに頬張るケロちゃんは結構かわいいんじゃないかと思う今日この頃です。

最後に。当作オリキャラのつぐみちゃんのプロフィールなんぞ載せてみます。彼女はこんな女の子です。

葦雀つぐみ TSUGUMI YOSHIKIRI

>誕生日< 6月24日

>血液型< AB型

>好きな科目< 英語・美術

>嫌いな科目< 歴史

>好きな色< 紫

>好きな花< 桔梗・紫陽花

>好きな食べ物< 水ようかん・グレープ味のもの

>嫌いな食べ物< そば・ブルーベリー味のもの

>得意料理< 魚の煮付け・パスタ全般

>趣味< 人をおちよくすること

>特技< 言葉遊び

>欲しいもの< 秘密

Opus FIVE

「——お外に出たいよーお外に出たいよーお外に出たいよー出せつつつてんだコノヤロオ!!」

「うるせえ黙れ静かにしろッ!!」

インターセクション
ets CARD CAPTOR
[DEATHBERRY
me

一月光と星明りの満天の下—

夜。

自分の部屋で勉強机に参考書とノートを広げた一護は、ベッドの上で喚くコンに怒鳴った。

しかしコンはいっこうに大人しくする様子がない。この無駄なやりとりも数十分は続いている。

なんとか解答を試みている参考書の問題も、コンの妨害のために進度がガタ落ちしていた。

イヤホンを耳に突っ込んで、音楽を聴きながらやればマシになるかとも考えたのだが、そうしたら今度は騒音だけでなく実力行使で訴えてくることは目に見えている。むしろその方が面倒だ。ならば、と一護は持っていたペンを置いて、引き出しを開ける。コンを住まわせてから常備するようになった粘着テープを手を取った。

びっ、と耳障りな音を立てて、テープの端の部分を剥がす。

その動作を見たコンが、途端に「ひッ」と息を吞んで硬直した。一護は座った椅子をくると回転させ、ベッドの方へと向き直る。

「まっ……まままま待てッ！ 話せば分かる！」

「話して分かんねえのはテメーの方だろうが。そのボロいフェルトが破けるのがイヤなら大人しく貼り付けられてろ」

「ギャ——ッ！！」

ベッドの上で走って逃げようとするコンだが、柔らかい布団が敷かれていたので如何せん足場が悪い。下部強化型改造魂魄としての本領を発揮できずに、ずりっ！と不様な音を立ててすっ転んだ。

その体をテープを持たない方の一護の手が驚掴みにした——が。

ホロ——ウ！！ ホロ——ウ！！

ベッドのパイプにぶら下がったまま叫び出した代行証に「……ちっ」と舌打ちが出る。

「……お……おう、ホラ、虚ホロウが出たって言ってるぞ一護。ははは早く行った方がいいんじゃないのか！？」

遠回しに「自分を放せ」と言っているコンに、「分かってるよ」と答えた。

持っていたテープをぽいっと放り出し、手で代行証の紐を解く。しかし、コンを掴む手はそのままだ。

「おい……オマエなにやっておプ！！」

尋ねようとしたコンの言葉を遮り、べしっ！と小気味のいい音を立てて代行証の札部分を叩きつける。

直後、ライオンを模したぬいぐるみの口から、丸葉がころりと零れ落ちた。ただの抜け殻となったぬいぐるみがへにやりと力を失う。

一護はぬいぐるみをベッドに放置すると、落ちた丸葉をシャツで念入りに拭き、「ホントは使いたくねえんだよな、コイツ」とぼやきながらぐくりと飲み込んだ。

瞬時に、黒の死覇装を纏った一護の魂が外に抜け出し、代わりにコンが入った肉体が床に尻餅について痛そうな声を上げる。

「いてえなチクショウ！ 前もって言うってからやれよオマエ！」

「ゴチャゴチャ言うな。親父や夏梨たちが来たらマズイから、今日は身代わりさせてやるよ。怪しまれるようなことはすんじゃねえぞ」目尻に涙を浮かべて不満を言うコンに人差し指を突きつけると、一護は開けた窓から軽い身のこなしで夜空へと飛び出した。

「はい、分かりましたよー。大人しくつまらない勉強に集中してオマエのフリを……するワケがないだろーがア！」

一護がいなくなるや否や、コンは一人でぐっ！と親指を立てた。

「さアーてさてさて待ちに待ちかねたぜこの日を！ 今宵はよい子には見せられないデンジヤラスかつエキサイティングあんどセクスィな旅路へ一名様ごあんなーい！！」

鼻の下を伸ばしながら、コンは普段の一護なら絶対にありえないでれっとした顔で窓枠に足を掛け、同じように夜の町に身を躍らせようとした。

だが。

「おにいちゃん、お夜食持ってきたよー」

タイミング悪くノックをしてきた遊子の声に、ぎくつ、と動きを止める。

無視して出て行ってもいいのだが、家族に不在がバレて騒ぎになったら、帰ってきた一護に今度こそ冗談抜きでフェルト製の仮の体をズタズタにされるに違いない。

コンはビデオの早送りも顔負けの素早さで勉強机に座った。そのままだアの向こうに「入っていい」と言いかけて、ベッドに放置されたライオン型の『せくすいぼでい』を慌てて引っ掴み、引き出しに押し込んだ。

「おにいちゃん？」

「おっ、おう！ 入っていいぞ！」

許可を得た遊子が、おにぎりを載せた盆を持って部屋に入る。

「はい、お夜食。お皿はあとで取りにくるからね」

「ああ……サンキュな」

緩みやすい眉間に無理矢理皺を寄せるのは、実は（コンにとって）至難の業である。内心で偽者だとバレやしないかとハラハラしつつ、一護はなんで二十四時間こんな堅苦しい表情を維持できるのかと疑問に思う。

おにぎりを盛った皿を机に置いた遊子は、ふと視線を落とし、そのまま動かなくなった。

「ん、どーした遊子……」

コンはその様子に、同じように視線を落とし——全身から血の気が引いた。

先刻閉めたばかりの引き出し。だが、急いでいたために閉め方が甘かったらしく、わずかに開いた隙間から、三角の白いフェルトの爪が特徴的な丸い足がほんの少しだけはみ出していた。

しばしの間、足を見つめていた遊子が「これって……」と手を伸ばそうとする。しかし、その指が到達する前に、コンは思いっきり引き出しを閉め直して、隙間を塞いだ。

「わ……悪いな遊子！ 兄ちゃん明日大事なテストがあるんだ、集中したいから外出てくれ！」

「えっ、でも……」

「いいから！ 夜食ありがとな！！」

洩る遊子の背中を押して廊下に出し、近所迷惑になりそうなほどの音を立ててドアを閉める。そのまま閉めたドアに寄りかかると、大きく溜息を吐いてずるずるとへたり込んだ。

「あぶねえ……っていうか、これじゃ迂闊に外出れねーじゃんかよ……」

一護の身代わりという本来の役目は二の次だが、『せくすいいぼでい』が遊子の手に移ったら確実にいじり回されること請け合いだ。もうあの悪夢を味わうのは御免である。大事な『せくすいいぼでい』を守るため部屋への缶詰が決定したコンは、がくりと肩を落とした。

「あーあ……なんで気付かなかったんだろ」

光源が街灯しかない夜道で、牛乳の入ったスーパーの袋を提げたさくらはとぼとぼと歩いていった。

三時間目が終わってすぐ、校医に異常無しと診断されたさくらは、いつも通りその後の授業に参加した。保健委員として迎えに来たつぐみと共に教室に戻ると、千春や奈緒子といったクラスメイトに心配されたが、普段の元気な笑顔を返して安心させた。

しかしそれ以上に心配した小狼が「帰りは家まで送る」と言い出したのをきっかけに、クラス中から冷やかされた（といっても悪意はない）ので、いつもより疲れてしまった。

そのまま帰宅し——本人は渋っていたが、小狼とはいつも待ち合わせる場所で別れた——念のために夕方まで軽く眠ってみた。起きてすぐ、藤隆も桃矢もないので夕飯の準備をしようとしたのだが、冷蔵庫を覗いてみて、ほとんど空に近い牛乳パックを見つけて、帰り道で買ってくるつもりだったのを思い出したのである。

仕方なく、さくらは牛乳を買いに近くのスーパーへ行ったが、たまたま行きつけのスーパーが定休日で閉まっていたため——易西神社のときといいこんなことばかりだ——仕方なく少し遠出をして空座町との境界近くにある別な店へ立ち寄った。

家を出たときはまだ夕焼けの残っていた空が、すっかり暗くなってしまうている。

「ケロちゃん、一人でお留守番してもらってるけど、だいじょうぶかなあ……わたしがいない間に、お父さんが作っておいてくれたアイスとか、勝手に食べちゃってるかも」

独り言を呟きながら、冷凍庫から発見したアイスの一つ残らず平らげて喜ぶケルベロスの姿を脳裏に描き、さくらは深い溜息を吐く。

そしてふと、「あっ」とさくらは立ち止まった。

道路の脇に並んだ住宅の建物——ほとんどが一户建てだ——の合間から、暗がりにもその赤を映えさせた大きな鳥居が見えた。

横から見ているので、掲げられているはずの「易西神社」の文字は

視界に入らない。

「……そういえば、今日目が覚める前にも夢で見たっけ」

体育のとき、気絶していたのはほんの数分のことだったと聞いた。その程度の時間だったら、眠りは浅く、普通は意識を失う前後で記憶が途切れているだけにとどまるだろう。だがさくらは確かに、夢を見たのだ。それも前の日の朝に見たのと似たような夢を。

といっても、共通しているのは、空が闇に覆われているということと、あの黒い着物を着た人が出てくるということだけだが。

「……あれ？」

夢の内容を思い出していて、さくらは眉を顰めた。頭の奥底に、何かが引っかかった。

元から、夢で見たものの全てをはっきり覚えているわけではない。どれも色の滲んだ水彩画のように曖昧で、ぼんやりとしている。

それでも、さくらの中の直感が告げていた。

何かを忘れていると。

「なんだっけ……」

さくらは頭を押さえて、それを懸命に思い出そうとする。

しかしさくらの努力は叶わない。手を伸ばすと今にも掴み取れそうなのに、いざ指先が触れようとすると、瞬く間にそれは遠ざかってしまう。

とても重要なことだというのは分かる。あの黒い着物の人が視界からいなくなった直後、それを追おうとして——その後に見たはずのものが思い出せない。

遠くで犬が吠える声が聞こえて、さくらはハッと顔を上げた。

辺りはすでに暗く、少し前の方にある街灯の光がじりじりと耳障りな音を立てながら点滅している。

頬を撫でる生温い風が、この季節の暑さを物語る。それなのに何故か、さくらはぞわりと鳥肌が立つのを感じた。

「……はやく帰ろう……ケロちゃんに相談すれば、何かわかるかもしれないし」

眩くと、さくらはそれまでのゆっくりとした歩調から一転して、小走りに道路を駆けていった。

——その瞬間、背筋が訳もなく粟立った。

「……………っ！」

さくらは立ち止まり、勢いよく背後を振り返る。そこには何もなく、ついさっき通り過ぎたばかりの路地の風景が変わらずに広がっているだけだった。

「……気のせい……？」

何もないと分かっても拭いきれない、得体の知れない不安を抱えたまま、さくらは再び走り出した。——いや、走り出そうとした。体の向きを戻してすぐ、さくらは絶句した。

コンクリートの地面に亀裂が入っている。

最初はそう思ったが、違っていた。亀裂が入っているのは、地面の真上——すなわち空中だ。

非現実的な光景に思考回路が停止する。その間にも、亀裂は硝子が軋むような音と共に広がった。

亀裂を押し広げるようにして、一本の腕が顔を出す。その腕は、人間のそれとは明らかに異なるものだった。

人間の腕の数倍は太く、指先に生えた爪は獣のように鋭く尖っている。

ざり、と足下で音がした。無意識にさくらは後ずさりしていた。

腕から繋がった頭が、亀裂の向こうの黒い混沌から現れる。

大きくくりぬかれた眼窩と、ぞろりと生え並んだ鋭い歯。刺青のような黒い模様の施された白い仮面は、髑髏を彷彿とさせた。

眼窩から覗く、濁った眼差しと目が合ったとき、さくらの全身から嫌な汗が噴き出した。

——ぐおおおおん！

白い仮面で顔を覆ったその異形は、大きく口を開け、野太い咆哮を

上げて体を芯から震わせた。

地面すらも揺るがすかのような咆哮に、さくらは踵を返し、異形に背を向けて走り出していた。先刻の小走りとは全く違う、全力疾走だ。

あれが一体何なのかなど、考える余裕はなかった。

逃げなければ。ただその危機感だけが、さくらの足を動かしていた。すると、ずうん、ずうん、と重い足音と共に気配が迫ってくる。走りながら顔だけを振り向かせると、亀裂から全身を這い出させたあの異形が、腕に劣らず太い足を動かして追いかけてきていた。

「いや……こないでっ！」

無駄だと分かっているにも、叫ばずにはいられなかった。

さくらは足の速さに関しては自信があるが、体格に伴う歩幅の差は埋めようがない。みるみる内に、距離が縮まっていくのが分かった。ふと、視界の端を見覚えのあるものが横切った。

ペンギン大王だ。気付かないうちに、ペンギン公園の方まで走ってきていたらしい。

——だれか助けて……！

そう願ったとき、ハッとひらめいていた。

さくらは走る速度を緩めないまま、スカートのポケットに手を入れ、一台の携帯電話を取り出した。画面やボタン、通話口の周りに月や太陽がデザインされたその携帯電話は、明らかに近頃の市販物とは一線を画している。知世の母・園美そのみが会社の試作品として提供してくれた代物だ。

携帯電話を開くと、すぐさまリダイヤルボタンを押して耳に当てた。掛ける相手が誰でも構わなかった。

トゥルルル、という悠長な呼び出し音が焦燥を煽る。

「はやく……はやく出て！」

そうしている間にも、異形はどんどん近づいてくる。

まだ？と焦れた瞬間、ぶつっと耳障りな音を最後に呼び出し音が途切れた。

「もっ、もしもし!?!」

回らない舌で通話口に呼びかける。

『——はい、李小狼です。電話に出ることができないので、発信音の後にメッセージをお願いします』

「……っ!」

偶然にも、かかった電話の相手は小狼だった。だが不運なことに、さくらに応えたのはあらかじめ録音された留守番電話用の音声だ。さくらは歯噛みしながらも、発信音が鳴り終わるのを待った。

「……もしもし小狼君!?! 今、ペンギン公園の近くにいます!」
よく分からないけど、なんかおっきなお化けみたいなのが——」

悲鳴を上げることができず、華奢な体が路地の両側を塞ぐ固い塀に叩き付けられる。持っていた携帯電話が弾け飛び、かしゅん!と乾いた音を立てて地面に転がった。

頭をもろに打ち付け、ずるずるとへたり込む。

「……う……」

痛みと眩暈に呻きながら、思わず右の肩口を手で押さえた。指先にこびりついたぬるっとした感触に驚愕する。

見ると、上着の袖が斜めに裂け、その下から血が溢れ出していた。片足のふくらはぎにも真っ直ぐに赤い線が走っている。

「あ……ッつ……!」

いたい。

あつい。

傷を目にした途端、神経を灼き始めた激痛に、さくらの目尻へ涙が浮かんだ。座る体力すらも血と共に流れ出してしまったのか、ぱたりと地面に突っ伏する。

すぐ近くで再び咆哮が聞こえ、さくらは目を薄く開いた。

あの異形が目の前に佇んでいる。まだ低い位置にしか昇り切れていない月を背負って、さくらを見下ろしている。

異形が、ゆっくりと片腕を振り上げた。爪を濡らした血が僅かな月

光を反射して、ぬらぬらと気味の悪い光を放つ。

大きく開けた仮面の口の中に、二回りほど小さな口がもう一つ見えるのが不思議だった。巨大な胴体の真ん中に、ぽかりと空けられた丸い孔も。

さくらはその光景を、ただぼんやりと眺めることしかできなかった。

——にげなければ。

それは十分理解していた。

だけど、からだがうごかない。

腕が空気を引き裂きながら振り下ろされる。今度こそ、さくらの体を八つ裂きにしようとしている。

——たすけて。

朦朧とする意識の中、声にならない声でそう言っていた。

刹那、視界を塞いだのは、死を象徴する漆黒の色。

がん！という鈍い金属音が、狭い路地に響き渡った。

「——させるかッ！！」

一軒家の尖った屋根から飛び降り、落下しながら巻き布を解いた斬月を横に構え、虚の掌を食い止める。がん！という鈍い金属音が、狭い路地に響き渡った。

虚の腕の勢いと力を殺しきれず、コンクリートに亀裂を刻みながら、一護の草履が道路に沈み込んだ。

「くっ……！！」

想像以上に重い一撃に、一護の額へ汗が滲む。虚が「邪魔するな」と言いたげに唸った。

「ッ……おらあッ！」

気合の込もった声を上げながら、空気を捌くようにして斬月を振るう。掌を裂かれた虚は即座に後ろへ飛び退き、様子を窺うようにして一護から距離をとった。

一護は斬月を握り直しながら、道路に佇む虚を眺める。

大きき自体は大したものではない。だが、先刻受けた一撃と体から立ち昇る霊圧が、その虚ホロウが今まで多くの魂魄を取り込み力を強めたものであることを物語っていた。

「くそっ……おい、大丈夫か!？」

悪態を吐きながら顔を振り向かせ、背後に横たわる少女に呼びかける。そこで、ハッと息を呑んだ。

——見覚えのあるショートカットの髪の毛。

間違いない。昨日、町中で死神化したときに目が合った、あの少女だ。

何故ここに、という疑問が浮かんだが、それを打ち消すように地面へじわじわと広がっていく血溜まりの色が視界へ飛び込んだ。

致命傷でないのは分かるが、目蓋は閉じられ、ぴくりとも動かない。しかし、一護の声に反応して「う……」と小さく呻き声を漏らした。生きていることに安堵はするものの、まだ油断はできなかった。すぐにでも手当してやりたいが、先に虚ホロウの昇華をしないことにはどうにもできない。

——もっと早く駆け付けていれば。

そんな後悔に胸の内を覆われながらも、虚ホロウの方に顔を向き直す。そして、突然視界の端へ飛んできた物体に、咄嗟に反応できなかった。右半身に何かがぶつかってきた。もろに喰らった一護は吹っ飛び、地面へ投げ出される。

あまりにも唐突で受身をとれず、道路の上をボールのように跳ねた。拍子に、傍に立っていた電柱に手をぶつけて、握っていた斬月を放してしまう。斬月はくるくると回転しながら、地面に転がった。

——しまった!

一護は慌てて起き上がり、斬月を拾おうとする。その前に虚ホロウの伸ばした手が一護の体を鷲掴みにし、地面へ押し付けた。

一護は身動きを封じられながらも、力任せに虚ホロウの掌をこじ開けようと抵抗を試みる。

しかし、虚ホロウは手に力を込めて、一護の体をぎりぎりと締め上げた。

「が……ッあ……！」

死覇装越しに鋭い爪が皮膚に食い込み、全身の骨を握り潰されるような感覚に一護は呻く。肺が圧迫され、呼吸もままならなくなった。酸欠でぼやけ始める視界の中で、虚ホロウが嘲笑うかのように肩を揺らす。その肩の向こうで、細長いものがゆらゆらと宙に揺れていた。

尻尾だ。

この虚ホロウはいざというとき武器として使うつもりで、尻尾を自分の背中へ巧妙に隠していたのだ。そして、邪魔な乱入者を退けるために早速活用したのだろう。

斬月さえ手放さなければ。

文字通り手も足も出ない自分の失態に、反吐が出そうだった。虚ホロウの手の力はさらに強まっていく。

——ちくしょう……ッ！

己の無力を心の底から呪ったとき、光が星空を照らした。

遠くで呻き声が聞こえ、さくらは重い目蓋を持ち上げる。

黒い服を纏った人間が、あの異形の手で地面に押さえ付けられていた。その顔は遠目にも分かるほどに歪められ、苦悶しているのが分かる。

——あの人……わたしを、助けようとして……

異形が腕の力を強めたらしく、その人はますます苦痛に呻いた。

——だめ……

それを見たとき、さくらは突っ伏した体をゆっくりと起き上がらせていた。

少し動くだけで、傷の痛みが増した気がする。それでもさくらは靴底で地面を踏み締め、扉に手をつき、息を乱しながらも立ち上がった。

気を抜けば倒れそうなのを押さえて、必死に体を支え続ける。傷口から溢れる血がぼたぼたと滴り、路上に赤い模様を描く。体に力を

入れたせいで、出血がひどくなったのだろう。

それでも今のさくらを、一つの思いが突き動かしていた。

——このままじゃ、あの人……死んじゃう……！

さくらは傷口を押さえていた手を離し、胸元へと差し込む。手に掴んだ物を、緩慢な動作で取り出す。

握ったままの掌を真っ直ぐ前に伸ばし、そっと開く。掌に載っていたのは、端に星を象った小さな鍵だった。

荒い息を整え、さくらは口を開いた。

「……星の力を秘めし『鍵』よ、真の姿を我の前に示せ」

静かに唱えると、鍵は手の中で淡い光を帯び、ふわりと浮き上がる。

「契約の元・さくらが命じる——『封印解除』！！」

声を張り上げた瞬間、さくらの足下で光の線が一つの図形を描いていく。それは中央に大きく星を配し、左右に月と太陽が置かれた魔法陣だ。魔法陣から溢れる光が星空を照らした。

鍵はより強く光を放ち、徐々に大きくなった。それは最早鍵ではなく、一本の杖。

さくらは顕現した杖を、しっかりと掴み取る。数年ぶりの感触だが、それに気を取られている余裕もなかった。

異形が、異変を確かめるように顔を振り向かせた。

「なん……だよ、あれ……」

虚に捕らえられたまま、一護は呟いた。

光の中に、先刻まで倒れていた少女が立っている。手の中には、先端に星のようなものが付いた一本の杖がある。その杖は、元々は少女が取り出した小さな飾りのようなものが長大化した姿だ。

これまで何人かの死神と戦い、始解しかいによって斬魄刀が変形する光景を何度も目の当たりにしてきた。だがあれば、斬魄刀の始解とは似て非なるものだ。一護は直感的に悟っていた。

少女の足下には、光る線が何か複雑な図形を描いている。そこから

霊圧とは異なる、何らかの力が溢れ出していた。

すると、虚^{ホロウ}が揺らしていた尻尾を鞭のようにしならせ、少女の方に飛ばした。

「危ねえッ!!」

一護が搾り出すような声で叫ぶが、少女は動じない。代わりにポケットから何かを取り出した。――細長い一枚のカードを。

少女はそれを上に放り投げた。重力に従って地面に墜落するはずのカードは空中に留まり、回転ドアのようにくると回り始める。

「『盾^{シールド}』!!!」

少女の凜とした叫びが餌し、掲げた杖の星の部分と、回転の止まったカードが触れ合った。

キン、と耳鳴りのような音。構うことなく、虚^{ホロウ}の尻尾が少女を打ちのめそうと迫る。

しかし寸前で、ばしん!と見えない壁に遮られるようにして弾き返された。

一護は目を見開き、虚^{ホロウ}も動揺するのが分かった。

少女はさらにもう一枚カードを出し、やはり宙に放り投げる。

「……炎よ、彼の者^かを焼き払え……!!」

震える声で、少女は呟いた。先刻と同じように、杖とカードに触れさせる。

「『火^{ファイアー}』!!!」

途端、すでに冷え始めていた夜気の中に熱が生まれた。

オレンジ色の光がカードから破裂し、炎と化して少女を包み込んだ。

炎は生き物のように渦巻き、少女の頭上に集まる。そして何かの輪郭を形作り始めた。

炎が形作ったのは、一人の子供の姿だった。子供は衣服を纏っておらず、はっきり見えているのは上半身だけで、下半身は炎の中に消えている。少女とも少年ともとれる中性的な顔立ちで、逆立った髪の毛もまた、炎と同化していた。何より、子供の背中から炎と同じ色をした翼が二枚、広げられている。

子供が、不意に片腕を前に伸ばした。その動きに呼応するように周囲の炎が波打ち、ビーチボール大の火の球をいくつか形作る。それらは矢のような速さで虚^{ホロウ}へと向かった。

直撃した炎の勢いに押されて虚^{ホロウ}の体が傾き、一際大きな火の球がぶつかると、その巨体はあっけなく吹き飛ばされた。

同時に一護を捕らえていた手が離れ、動きが自由になる。一護は跳ね起きて、路上に放置されていた斬月をガツと拾い上げた。

炎を振り払い、今度は直接向かおうと唸り声を上げる虚^{ホロウ}を睨みつけ、一護は一直線に走る。しっかりと手にした斬月を、力の限り大きく振り上げた。

「失せろ……ッ!!」

月光を反射して輝く刃が、堕ちた魂魄の変わり果てた姿を頭から両断する。虚^{ホロウ}が上げる断末魔の悲鳴が路地に響き渡った。

斬月の切先が体を通り抜け、地面にめり込んだ直後、虚^{ホロウ}は塵となって星空に消えた。

「……………」

塵と共に消え失せる霊圧を感じ取ると、一護は荒い息をぜいぜいと整えてから斬月を持ち上げ、肩に担いだ。そして、ゆっくりと振り返る。

そこには、杖を手にしたままの少女が立っていた。

肩口と足からは、未だに血が流れ続けている。しかし少女はその場に佇み、一護を真っ直ぐに見つめていた。周囲を包み込んでいた炎は消え失せていた。

振り返った一護の視線と、少女の視線がぶつかり合う。

その時、少女がふっと表情を緩めた。

浮かべられた淡い笑顔に、一護は思わず息を呑んだ。

——よかった

僅かに動いた唇が、そう呟いた気がした。直後、少女の体がぐらり

と前へ傾く。

「お……おいっ！」

一護が慌てて駆け寄り、地面に膝をついて崩れ落ちそうになった体を受け止める。からん、と音を立てて杖が掌から滑り落ちた。杖は途端に光を放ちながら輪郭を縮小させ、指で摘むくらいに小さな鍵となった。

一護は驚愕するが、とりあえずそれは置いて、抱きとめた少女の体を腕の中でひっくり返してみる。少女はすでに意識を手放していた。暗闇で見えづらいが、額が汗に濡れ、顔が心なしか青白い。出血が原因だとすぐに気付く。

斬月の巻き布の一部を引きちぎり、肩口や足の傷を止血する。さらに傷口そのものも覆ってやった。こういう時、曲がりなりにも医者である親から応急処置を教わっておいて良かったと思う。

肩口の方を手当てしていて、一護は手に握られた二枚のカードに気付いた。少女の体はすでに力を失っているが、指先は辛うじてカードを手の中に留めている。一護は恐る恐る手を伸ばし、カードを取ってみた。

片面には桃色を基調とした何かの図形が、細長く潰された形で収まっている。まじまじと見ていて、少女の足下に光の線で描かれたのと同じものであることに思い当たった。中央に大きく描かれた星が特徴的だった。

その図形は二枚とも全く同じだったが、もう片面に関しては違った。縁取りが似たデザインではあるが、絵柄が違う。一枚には鎖が絡みついた羽根を象った盾のようなものが、もう一枚には翼を体の前で閉じた子供——そう、あの炎の中に現れた子供だ——が描かれている。他に異なっていたのは、カードの上下に書き込まれた文字だった。上の方には漢字でそれぞれ「盾」「火」、下のほうには英語で「THE SHIELD」「THE FIREY」。それなりに勉強をしている一護は、漢字と英語の意味が対応していることに気付いた。

「……なんだってんだ、一体」

気絶している少女の青白い顔を改めて見て、一護は呟く。当然、彼女が応えることはない。

分らないことだらけだったが、今は彼女の怪我をどうにかするべきだと思い直す。これだけの手当てでは不十分だ。

「ここから行くとしたら……浦原さんトコが近いか」

負担がかからないよう姿勢に気を付けながら、少女の体を背負った。考えてみると、年下の女の子を背負うのは妹の遊子や夏梨以外では初めてだったので、少し緊張してしまう。

一護は持っていたカードと地面から拾った鍵を懐に入れ、ついでに傍に転がっていた牛乳入りのビニール袋を提げて、星空に向かって跳躍した。

「悪いな……もう少し辛抱しろよ……！」

背中へしなだれかかる少女に呼びかけながら、一護は住宅の屋根を飛び移り、目的地を目指す。

後に残されたのは、道路の上に転がされた、一台の携帯電話だけだった。

T o b e C o n t i n u e d

Opus FIVE (後書き)

お待たせしました、ようやく両作の主人公ズが鉢合わせです。今までさくら視点と一護視点で分けていた描写をやっとこさ統合できます。……あ、それはまだ先か。

初回執筆当時の裏話をひとつ。

このエピソードの終盤まで書き進められたタイピングで、いきなりノートパソコンが凍りつきやがりました。

マウス動かしてもキー押しても再起動試みても無反応。泣く泣く電源のアダプタを抜いて、バッテリー切れで自然とブラックアウトするのを待つ羽目に。

もう一回起動かけて確認したら、直近でファイル保存をかけた序盤あたりからそこまでのテキストが見事におじやんとなっていました。その時にもう執筆辞めようかと本気で思いましたからね。こまめに保存しなかったのも悪いけど、いくらなんでもこりゃねえわと。

でもなんとか記憶を頼りに文章打ち込んで復元しました。ほとんど意地だけでキー打ってましたね、「あの量をまた書き直すのかア!」という感じで。

おかげでこれ一話だけで二倍くらい疲れた記憶があります。

タイトル解説です。懲りもせずに「Intersection3」と引き続きできました。ほんとすみません。

副題の「DEATHBERRY meets CARDCAPTOR」について。

DEATHBERRYは原作のサブタイトルでよく使われる一護の代名詞です。「死神イチゴ」……みたいな意味合いなんでしょうか。先日発売されたアニメBLEACHの主題歌アルバム第三弾の名前も「BLEACH BERRY BEST」。ブックレットで久保先生が「BERRYって一護の名前使ってくれた!」といたく嬉し

そんなメッセージを寄せてらっしゃいました。

CARDCAPTORは言うまでもなくさくらのこと。読んで字のごとし。ひねりが無いとも言える。

よく「ボーイ・ミーツ・ガール」っていう言葉を聞きます。辞書で調べたら「boy-meets-girl」で「(恋愛小説などで)よくありがちな」という意味があるそうです。恋愛は男の子と女の子が出会ってスタートするものだから。今回はそれをもじってみました。

日本語タイトル「月光と星明りの満天の下」は、坂口安吾の「桜の森の満開の下」をもじりました。読んだことは無いですが題名だけ知ってます(コラァ!)。

出会いが夜ってことで「月光と星明り」なんです、こっそりと一護の斬月とさくらの星の鍵もかけていたりする。

そして、この話を書いていてコンと一護のやりとりが意外と面白かったことに気づきました。なんかやりとりの中で次の科白を考えるのがすごく楽しかったような気がする。

最後に。

前回の更新分にて、ある特定の方が入れてくれた感想に対しかなりきついコメントを返してしまいました。

私としては悪意等はなく、ただ感想として受け取るにしても目に余るようなものは投稿されても困る、という軽い警告程度の気持ちで返信していました。

しかし、矛盾しているようですが、本来小説を綴るモノカキの立場としては「感想」はもらえるだけでも本当にうれしいものです。宝物同然です。

なので、もし前回の感想返信を読んで委縮してしまい、コメントの投稿がしづらくなった読者様がいらっしゃいましたら、心からお詫びを申し上げます。

今後は発言に気を付けて返信をしていきたいと思っています。

それから、私的事情により「次は早め」と予告しつつも更新が遅れ
まして、申し訳ありませんでした。
それでは、またの機会に。

O p u s S I X (前書き)

遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます。

2011年も、拙作と不肖モノカキみけぺんをどうぞよろしく願
いいたします。

Opus SIX

綿がふんだんに詰められた柔らかな高級ベッドの上で、マナーモードの携帯電話が低い音を立てて震える。

知世は電話を手に取り、画面に表示された相手を確認してから通話ボタンを押した。

「はい、大道寺です」

『もしもし？ おれだ！』

「李君ですわね。こんな時間にどうなさいました？」

やけに慌てた口調の小狼に、知世はいたって穏やかに応える。表情もにこやかだ。

しかし、電話の向こうで喋り始めた小狼の話を聞くと、その顔はみるみる内に強張っていった。

インターセクション

Intersection 4

ウォーリアーズ

「WARRIERS」

一彷徨、そして遭遇一

うらはら

空座町・浦原商店。

昭和風の駄菓子屋を模した店に設けられた狭い畳の部屋の中、敷かれた布団に少女が横たわっている。その少女の体を、アーモンド型をした淡い光のドームが包み込んでいた。

普段着の井上はその外側に正座し、両手を翳して念じるように目を

閉じている。

襖の前で胡坐をかいた一護が見守っている先で、光に包まれた少女の体の傷が徐々に塞がっていき、裂けていた衣服もビデオの逆再生映像のように元通りに修復され、血の染みすらも消えていく。青白かった顔色も良くなってきた。

不意に後ろの襖が静かに開いて、一護は顔を振り向かせる。そこには、室内にも関わらず縞模様の帽子を目深に被った男——浦原喜助うらはら きすけが立っていた。

「お待たせしてすみません」

のりくらりとした口調で言いながら入室する。後ろから、いかつい容貌と体格には不似合いなエプロンをした店員・テッサイが、湯呑みを載せた盆を持って続く。

浦原が一護の前に座ると同時に、少女を覆っていた光が消え「ふうっ」と井上が溜息をついた。

「これでよし、と。黒崎くん、終わったよ」

「ああ。サンキュ」

額に浮かんだ汗を手の甲で拭う井上に、テッサイが「どうぞ」と湯呑みを差し出した。

「あいつ、具合どうだ？」

「うん……怪我は一通り治せたから、大丈夫だと思うけど」

もう一つの湯呑みを受け取り、中に注がれた麦茶を飲みながら聞く一護に井上は答えた。

「すみませんねえ、井上サン。夜中にわざわざ呼び出したりしちゃって。治療だけならテッサイの鬼道きでうでも良かったんですが、相手が女の子だし、いざというときは傷痕も極力残さないようにして帰してあげなきゃならないもんで」

浦原が帽子の上から頭を掻きながら言う。後半の科白に耳ざとく反応したのは一護だ。

「傷痕残さないってことは……やっぱ記憶も消すのか？ ああ『ボン！』ってやつで」

「普通ならそうします。けど今回ばかりは……どうっスかねえ」

浦原は言い淀みながら視線を落とした。その先には、例の鍵とカードが畳の上に並べられている。鍵を指先で摘み上げて眺めると、「うーん」と気難しそうに唸った。

「黒崎サン……やっぱりこの鍵が杖に変わったなんて、アタシはにわかには信じがたいんスけどねえ」

帽子の下から覗いた垂れ目が一護の方に向くが、その目には明らかに疑惑の色が浮かんでいる。

「ほっ、ホントだって！ あいつがなんか変な呪文唱えたらその鍵が……えーと……これくらいの大きさになって、でもってそのカード使ってよく分かんねーけど見えない壁とか火とか出したんだよ！マジで」

身振り手振りを交えて必死に説明するものの、浦原の目に浮かんだ不審そうな色はなかなか消えない。無闇に信じろという方が無理なのかもしれない。しかし、実際に目前で起こった本当のことなのだ。「でもこの鍵って……死神が持つてる刀とは全然違うよね。こっちのカードだって、見た感じは普通だし」

浦原の脇で井上がカードを手に取りながら言う。素直な感想に反論する余地もなく、一護は黙り込んだ。

「まア、黒崎サンの話が本当かどうかは別として——」

「ホントだっつってんだろうが！」

さり気なく自分の話を聞き流そうとする浦原の態度に、一護は思わず怒鳴り散らす。

「話は最後まで聞いて下さいよー。いいですか、アタシが気になるのは、彼女が虚に襲われてたってことっス」

鍵を元の所に置き低い声で言う浦原に、一護が眉を顰め、井上はきよんとした表情を浮かべた。

「黒崎サンはもう分かってると思いますが、虚が狙うのはその辺に漂う魂魄が常で、生きた人間を狙うとしても、それは高い霊力を持つている場合に限られます。あとは、その虚が堕ちる原因となった

肉親ぐらいつスカね」

『肉親』という単語が出たとき、井上が静かに目を伏せた。かつて虚^{ホロウ}となった実兄に殺されかけた記憶が蘇ったのだろう。

「ところが彼女は、感じられる霊圧からそんなに大きな霊力を持っているとは思えません。虚^{ホロウ}に狙われる体質だとは考えにくい」

「じゃあ、その……肉親関係か？」

「そう考えるのが自然なんスけどね。確認しますが、黒崎サン。彼女、アナタのこと見えてましたか？」

浦原の質問に、一護はハッと息を呑んだ。

昨日と、つい数十分前。確かに自分はこの少女と目が合った、

二の句を継げずにいる一護を見て「見えてたんスね」と浦原は答えを先回りした。

「そうになると、ひとえにその虚^{ホロウ}が肉親だったと決め付けることもできません。何も知らない人にあーだこーだ問い詰めるのは不謹慎でしょうが……念のため、本人に確かめる必要があります。また同じことが起こらないとも限りませんから。とりあえず今は、彼女が目覚ますのを待つのが賢明でしょう」

「……そうか」

一護は頷くと、布団の中で小さく寝息を立てている少女を見た。どこか申し訳なさそうな横顔に、井上の表情も曇る。

「……黒崎くんのせいじゃないよ。間に合っただけでも、よかったと思うよ」

大した慰めにはならないと思いながらも、井上がそう話しかけると、一護は少し考え込むように目を閉じてから「そうだな」と軽く笑みを浮かべた。その顔に、井上はほっと安堵の息を吐く。畳の上で、鍵についた黄色い星がきらりと光った。

友枝町・ペンギン公園。

日中ならば、遊び盛りの子供や時間を持て余す若者などが立ち寄る

この公園も、日のない夜の下では、静けさが際立つだけだった。敷地の中に鎮座するペンギン大王の表情さえも、どこか寂しげに見える。

そこへ、ばたばたと慌てた様子で一人の少年が駆け付けた。

「……くそっ！」

少年——小狼は公園やその周りを見渡しながら悪態を吐く。誰もいない。その事実が、小狼を苛立たせていた。

すると、背後からかつかつという靴音が聞こえた。

小狼は思わず「さくら!？」と捜し人の名前を口にしながら振り向いた。

「——遅くなってすみません、李君」

困惑した顔でそこに立っていたのは、軽装に身を包んだ知世だった。小狼の口から、露骨な落胆の溜息が漏れてしまう。

「大丈夫ですか？」

「ああ……ごめん。おれは、平気だ……」

心配する知世にそう答えながらも、そのまま地面に座り込んだ。知世は驚いて傍に駆け寄る。

家から飛び出して走ってきたのか、小狼は全身汗だくになっていた。Tシャツにジャージのズボンという、寝巻き同然のラフな格好も焦燥ぶりを示している。

知世は予想以上に落ち込んだ小狼の様子にかける言葉が見つからなかったが、すぐに気を取り直して口を開いた。

「……あれから、さくらちゃんからご連絡はないんですか？」

問いかけられると、小狼は少しだけ顔を上げた。

「……ああ、来てない」

「では、先ほど電話でおっしゃっていたメッセージを聞かせていただけますか？」

知世にいつもの丁寧な言葉遣いで頼まれ、小狼はジャージのポケットから携帯電話を取り出した。さくらや知世と一緒に、揃いで持っている物だ。

小狼が無言で携帯を操作すると、ピーツ、と甲高い電子音が響き渡った。

『メッセージが一件あります』

片言の女性の言葉が続く。雑音を背景に、聞き慣れた声が受話口から流れた。

『……もしもし、小狼君！？　今、ペンギン公園の近くにいますの！　よく分からないけど、なんかおっきなお化けみたいなのが――』
がしゃん！と何かが壊れるような音を最後に声は途絶えた。再び電子音が響いて、再生終了を伝える。

知世は小狼の手から携帯電話をそっと抜き取り、画面を見つめた。

「……手掛かりはこれだけですの？」

「それだけだ……こっちから掛け直しても、つながらない」

「ペンギン公園とおっしゃってましたから、この近くで電話したのは間違いないのでしょうね」

「けど、どこにもいない……」

状況を答える小狼に、知世の表情も不穏な色を帯び始めた。

電話で聞いた声の焦りようから、さくらに何かあったことは想像に難くない。にもかかわらず、その場へ駆け付けることも、安否を確かめることもできないという歯痒さが、二人の心を覆っていた。

どうしようもないのか、という落胆が脳裏に重くのしかかった時だった。

「知世！　小僧！　何してんねん！？」

頭上から聞こえた声に、二人は同時に視線を上げる。夜空に浮かんだオレンジ色の小さな影を認めて、知世が真っ先に「ケロちゃん！」と使い古した愛称を口にした。

ケルベロスは背中の羽根を動かし、二人の元へと降りる。

「ケロちゃん……いったいどうなされたのですか？」

「そりゃわいのセリフやがな。二人そろってこんな夜中に――」
知世に答えながら、汗だくの小狼を見たケルベロスが言葉を途切れさせる。おそろおそろといった様子で「……なんかあったんか？」

と尋ねた。

「ケルベロスっ！ さくらは！ さくらがどこに行ったか知らないか！？」

いきなり立ち上がり、物凄い形相で小狼が詰め寄る。ケルベロスは勢いに圧倒されて一瞬呆然とした。

「え……なんや、小僧もさくら探しとったんか？」
小僧も？

ケルベロスの言葉を反芻して、小狼と知世は顔を見合わせた。

「いや…それがな、さくらのやつ夕方ごろに買い物行ってくるって出かけたまま、もう二時間ぐらい帰ってこなくて……電話に連絡してみたけど出えへんし、しゃーないからこうして探しにきとったとこなんや」

「そ、そうなのか……」

自分達と大して変わらない経緯に小狼は脱力する。何か分かるかと期待したのだが、無駄骨だったらしい。

「……で、なんで小僧と知世はこんなところにおんねん？」

もっともな質問をするケルベロスに、知世が説明し始めた。

日没頃のこと、小狼は少し早めにシャワーを浴びて一日の疲れを落としていた。

浴室から出て、何気なく携帯電話を確認していると、シャワー中に一件の留守電メッセージが入っていたことに気付いた。

相手がさくらだと分かってても「内容を聞いてからかけ直そう」と呑気に構えていたのだが、実際に例のメッセージを再生して、一気に血の気が引いた。

具体的に何が起こったのかは分からない。ただ、さくらが自分に助けを求めていたことだけは理解できた。

すぐにさくらの携帯電話にかけたものの「繋がらない」という単調なアナウンスしか届かなかった。

急遽知世にこのことを伝え、とりあえずメッセージにあったペンギ

ン公園へ行ってみようという結論に至った。現場に行けば、さくらもいるかもしれないという希望に縋っての答えだった。

しかしそれも無駄足に終わり、こうして途方に暮れているのだった。

「……その、メッセージっちゅうのは？」

「こちらになりますわ」

知世の説明を受け、ようやく事態の深刻さを理解し始めたケルベロスが聞くと、知世は小狼から借りたままの携帯電話を操作して、先刻のメッセージを再生した。

『……もしもし、小狼君！？　今、ペンギン公園の近くにいるの！　よく分からないけど、なんかおっきなお化けみたいなのが――』

がしゃん！と物音。そして再生終了を教える電子音。
何度も聞かされたさくらの声に、小狼は再び座り込み「くそっ」と呟いた。

「こりゃ……確かにやばいかもしれんな」

「ケロちゃん。さくらちゃんがおっしゃっていた『お化けみたいなもの』には心当たりありませんか？」

「いや、ないなあ。けど、今まで遭ったことのないようなものつちゆうんは分かる」

いつになく緊迫した声音でケルベロスは答えた。

そしてふと、何かを感じ取ったようにぴくりと動きを止めた。

「……ケロちゃん？　どうなさいました？」

知世が様子の変化に気付いて声を掛けると、ケルベロスは辺りを見回しながら「カードの気配がする」とだけ答えた。

それを聞いて、座っていた小狼が弾かれたように顔を上げる。

ケルベロスは公園の敷地を出て、外側を通る道路へと飛んで行く。

知世と小狼が後に続いた。

路上に浮遊しながら気配をたどるケルベロスに、小狼が話しかける。

「カードって……さくらカードか？」

「ああ、間違いあらへん。微かやけど、カードの気配が残っとる。

おそらく、さくらはここで魔法を使たんや」

告げられた事実、小狼は目を見開き、知世は口元を覆って言葉を失った。

「魔法を使った……？　けど、どうして……」

「はつきりとはせえへんけど、さくらが電話で言うとした『お化けみたいなもの』と関係あるかもしれん。とにかく、魔法使わなあんほどのことがあったって考えるんが自然やな」

淡々と言いつつも、冷や汗を浮かべ始めたケルベロスの推測を聞に「そんな…」と知世が呟く。

小狼は、ぎり、と奥歯を噛み締めながら、もう一度周りを見回してみる。すると、視界の端で何かが光った気がした。ハツとして、その方向を見直す。

道路の脇に立てられた街灯の光で、丸く照らし出されたアスファルトの路面。その黄色い円の真ん中に、見覚えのある物体が灯りを反射しながら横たわっている。

それが何か認識した瞬間、小狼はすぐさま走り寄っていた。そして、路面に落ちている物体——自分が持つのと揃いの携帯電話を拾い上げる。

そんな小狼の元に知世とケルベロスも駆け寄った。

「おい、小僧！　その携帯……」

「さくらちゃんのですわ！」

二人が背後で声を上げる中、小狼はその携帯電話を操作してみた。一瞬画面に光が灯ったものの、すぐに消えてしまう。何度も電源を入れようとするが、うんともすんとも言わなかった。

知世が横からその携帯電話を受け取って軽くボタンを操作するが、「駄目ですわ。バッテリーか中の機械が壊れてしまったみたいです」と告げる。

「これですます、さくらがここにおったことが確実にあったな」ケルベロスが言うと、「どこにいたかが分からないんじゃない仕方ないだろ」と小狼が一蹴した。

「……ケロちゃん、李君！ その塀を……！」

突然切羽詰まった声を漏らした知世が指差した方へ、小狼とケルベロスは視線を移す。そして、瞠目した。

平らな塀の足下。そこに、赤黒い斑模様まだらが散っていた。

凍り付くケルベロスと、立ち尽くす知世を置いて、小狼はおそろおそろ塀の方へと近づいていく。その場に屈み込み、赤黒いものに指先で触れてみた。軽く擦るようにして感触を確かめてから、指先を見直す。

塀にあるのと同じ赤黒い色が、僅かに指先へこびりついていた。

「李君、それは、まさか……」

後ろから様子を窺っていた知世が言葉を詰まらせる。小狼は躊躇したものの、掠れた声で「……血だ」と答えた。

「まだ乾ききっていない……ほんの少し前に、付けられたんだと思う」

「まっ、まさか、ほんまにさくらの血じゃ——」

ケルベロスが言い終わる前に、だんっ！という音が遮った。

小狼が拳を塀に叩き付けていた。

小狼は俯き、喉の奥から絞り出すような声で「くそっ！」と唸る。

「どこにいるんだ、さくらっ……！」

ぎりぎりと押し付けられる拳は、ざらついた塀との摩擦によって皮膚が傷つき、血が滲み始める。赤黒い染みの上に鮮やかな赤色が重なっていくのを見て、知世が「李君、いけません！」と咄嗟に制止した。

すると、ケルベロスが「小僧！」といきなり叫ぶ。

「お前、たしか人捜しの術修得しとるんやろ！？」

脈絡のない物言いに、小狼は思わず呆けてしまう。知世も小狼の手を押さえたまま「はい？」と間拔けな声を出した。

「前にクロウの気配をたどって学校行って、知世とはぐれてしまったときに言うとしたやないか！ 何か本人が残したものがあれば捜せるって！ せやったら、この携帯電話を媒介にすれば……！」

懸命に言うケルベロスの科白に、時間を置いてからその意味を察して、小狼は「そうか」と呟く。焦っていたあまり、簡単なことも思いつかなくなっていた。

小狼はポケットから、朱色の組紐と黒い宝玉が繋がった、中国風の飾りを取り出した。飾りをぎゅっと握り締め、念じるように目を閉じる。

途端、飾りが淡い光を帯び、次の瞬間には手に一振りの両刃の剣が握られていた。小狼が魔法を使うときにいつも使用する宝剣である。柄尻には、最初に取り出した組紐の飾りがそのまま結わえられていた。

小狼は知世が持っていたさくらの携帯電話を受け取ると、地面の上に、一枚の呪符を貼った。その上から携帯電話を置き、少し離れた所に立つ。

「……本当に見つけられますの？」

背後から知世が尋ねると、小狼は小さくかぶりを振った。

「分からない。強力な魔術で防御されたり、何らかの磁場の上だとうまく突き止められないこともある。……けど、やってみるしかない」

成功率の如何は、この際関係なかった。

早くさくらを見つけないければ。

その思いだけが、今の小狼の原動力となっていた。

小狼は剣を横に構え、柄を握ったのとは逆の掌を刀身へ軽く添える。そして、ゆっくりと瞑目した。

いつもは喧嘩腰であるが、今度ばかりは協力しないわけにはいかないと悟ったケルベロスが気を利かせ、知世に後ろへ下がるように指示する。魔術、特に小狼の専売特許である中国系は雑念を払い、集中力を高めなければならない。

——道路の真ん中で、すうつ、と小狼が息を吸い込んだ。
少しの間を空けて、ふーっ、と吸ったのと同じだけの量の息を吐き出す。

普通の呼吸とは明らかに違う。音が極めて静謐で、唇は必要最低限の隙間しか開けられていない。

どこからともなく、風が吹いた気がした。

残暑の温い風とは違う、冷涼な、見えない空気の流れが小狼の髪を揺らす。

やがて小狼は息を止めると、ぶつぶつと呪文を唱え始めた。それは少なくとも知世にとっては聞き慣れない言語から成る呪文で、何を言っているのか到底理解のできないものだった。

しかし、淡々と紡がれるその音と音の繋がりは確実に何らかの意味を成して、その場にゆるゆると凝集されていく。

ケルベロスは険しい表情を浮かべ、知世は祈るような眼差しを向けて、小狼の姿をじっと見つめる。

ゆっくりと流れていく風の中で、剣の鏢にはめ込まれた石がきらりと光った。

あふ、とあくびの呼吸音が聞こえて、一護は顔を上げた。襖に寄りかかるようにして座る井上が目尻に涙を浮かべ、口元を手で押さええている。

「……井上、疲れたんなら先帰っていいんだぞ？ 明日も学校あるし、寝といったほうがいいって」

一護が気を遣って言った。井上は治療術を使って力を消費している。高校生が寝るにはまだ早い時間だが、疲労で睡魔に襲われても無理はない。

「ううん、大丈夫……この子が起きるまで待ってるから。あたしもこの子が心配だもん……」

井上は眠い目を擦って答えた。一護は仕方なく「そうか？」と引き下がる。

治療を終えてから、そろそろ一時間が経とうとしていた。少女はいっこうに目を覚ます気配がなく、最初は気を引き締めたまま構えて

いた一護の姿勢も崩れ、後頭部で手を組んで、壁に寄っかかるようにして座り込んでいる。

「そーいう黒崎サンこそ、家空けたまんまで大丈夫なんスか？」

温くなった麦茶を注ぎ直しながら聞いたのは浦原だ。それに対して、一護は「ああ」と頷いた。

「あっちの体にコンを入れてきたから、簡単にはバレねえと思うけど……アイツがじっとしてられるかどうか」

黙って腰を据えるよりも動き回りたいタイプのコンの性格をよく知る一護は、今頃自分の体を借りた居候を思い浮かべて、辟易した表情を見せた。

それを見た浦原が「大変ですねえ」と他人事のように言う。

開け放された縁側から、涼風が緩やかに吹き込んでいた。

縁側の下に寝そべり、風を受けていた夜一が薄く片目を開き、即座に弾かれるような動作で立ち上がる。

すう、と目を細め、夜空の彼方を見つめた。

「いかなされましたか、夜一殿」

縁側に控えていたテッサイが気付いて声を掛ける。夜一は「うむ」と生返事をしてから、中にいる浦原の方へ向き直った。

「――喜助」

「なんでしよう」

「何か来るぞ」

「……はい？」

脈絡もなく、ただそう告げた夜一に浦原が頓狂な声を上げる。同じく夜一の言葉を聞いた井上と一護も顔を見合わせた。

夜一は静かに、先刻見ていた方向へ再び視線を向ける。つられて、浦原や井上、一護も、同じように視線を動かした。

僅かな星と、月しか見えない夜空。一見すると、何の変哲もない風景だ。

ところが、数少ない星がある中、不意に強く輝く星が現れた。その星の光はどんどん大きくなっていく。

——誰もがそう思ったが、実際は違っていた。

星ではなく、それは光を帯びた何か別のものだった。光が大きくなっていくように見えるのは、それとの距離が徐々に狭められていつているからだ。

気付いたときには、それは店のすぐ近くにまで迫ってきていた。

「なんだありや……って、こっち来てるぞ!？」

一護が言った直後、それは蛇のように空中でくねりながら凄まじい勢いで風を切り、店の庭先から夜一やテッサイの頭上を通過して縁側の軒下へと飛び込んできた。

ゴォッ!!

と突風のような音と衝撃が小さな和室に乱入し、一護と井上は「おわぁッ!」「きゃあ!」と口々に叫んで壁際に逃げる。浦原はいたって落ち着いた動作で体を傾け、それを躲した。

彼らの間を飛び回りながら、それは部屋の中で軽く旋回すると、まるで餌でも見つけたかのような生き物じみた軌跡を描いて、少女の眠る布団の傍らへ勢いよく向かっていく。

そして、長方形の敷布団を囲むような輪となって、畳の上すれすれに留まった。

突然のことに思考停止する一護と井上だったが、その輪を描く物を見て驚愕する。

——それは、文字の群れだった。

走り書きの黒い墨跡を思わせる判読不能の文字たちが、空中で円形に並び、浮遊しながらルーレットの回転盤のように少女の周りを回っていた。文字の中には漢字と思しきものも含まれていたが、やたらと複雑だったり、一部が模様のように変形していたりしている。オカルト映画で見えるような、呪詛を髣髴とさせる特徴的な字体だった。

そこまで理解した所で、光を帯びていた文字たちは、空気に溶け込むようにしてゆっくりと消えていった。

「……な、なに? 今の……」

壁に張り付いた井上が呟く。眠気はどうに吹き飛んでしまっていた。一護もあまりのことに言葉が出ず、呆然としている。

文字に囲まれていた少女は、そんな一護たちをよそに平和な寝息を立てている。

店の表の方から小さく「ごめんください」という声が聞こえたのはその時だ。全員の視線が一斉にそちらへと向く。

「このような時間に……？」

そう言いながらテッサイが首を傾げた。浦原商店はとっくに営業時間を終え、シャッターを下ろしている。にもかかわらず来客、というのは奇妙以外の何物でもない。

それでも店員として務めを果たそうと立ち上がりかけるが、浦原がやんわりと手で制した。

「表の方にはウルルとジン太がいるでしょう。わざわざ行く必要はない」

「しかし店長……」

「まア、あの二人じゃ対応しきれないと思いますからね。代わりにアタシが行きますんで、テッサイは残ってください」

「おぬしが直々に出迎えとは、何か企みでもあるのかのう？」

浦原の申し出に、冷ややかなツツコミを入れたのは夜一だ。浦原は「ひどいっスねえ、邪推ですよ」と答える。

「ただ、ちょっと厄介な珍客みたいなんですね。丁重に迎えてあげようっていうだけっス。ま、そういうことで、黒崎サンたちは待って下さいねー」

勝手に進められていくやりとりを間抜けな顔で見ている一護と井上を差し置いて、浦原はさっさと襖を開けて部屋を出て行ってしまう。『厄介な珍客』という言葉の思い出して、二人はまた顔を見合わせた。

町の空を一直線に翔けていく光。それは、魔法によって実体化した

追跡呪文だった。光を帯びた呪文は一字一字が蛇のように連なり、時折くねりながら、己が命じられた者の居場所へと向かっていく。呪文はすでに町の境界を越え、友枝町から空座町の領域へと入り込んでいた。

そして、それを追いかける一つの影があった。

その影は、月光に映える白い翼を大きく広げて飛翔しているが、鳥の類からはかけ離れた輪郭をしていた。

翼が伸ばされているのは、大きな四本足の獣の背中である。獣は鬣たてがみを持たず、一見するとトラのようだが、細長い尻尾の先にはふさふさとした毛が生えていて、その部分はむしろライオンを彷彿とさせる。さらにその獣の体のあちこちには、宝石や金属のような飾りが取り着けられていた。

獣の背中には、二人の人間が跨っている。前にいるのは剣を携えた小狼だ、後ろにいるのは知世だ。

「——小僧！ まだ着かんのか！？」

獣——真の姿となったケルベロスが、仮の姿の時よりも幾分か低くなった声で尋ねると、小狼は耳元で唸る風の音に負けないよう大声で「まだ先だ！」と答える。

「居場所を突き止められたということは、さくらちゃんは無事なのでしょうか！？」

「無事かどうかまでは分からない！ けど、魔法を発動させたときの手応えからして、そんなに遠くではないと思——」

知世の問いに答えている途中、一直線に飛び続いていた呪文が不意に急降下して、視界から遠ざかっていった。

地表近くまで落ちていった呪文は、立ち並ぶ家々の中にあった一軒家のような建物へすると侵入した。途端、小狼の剣が何かに反応するかのように光を帯び、幾度も点滅させる。

「見つけた、あの家だ！ 降ろしてくれケルベロス！」

「小僧のくせに、わいに命令すな！」

不満を言いながらも小狼の言葉に従い、一軒家に消えた呪文の軌跡

をたどって、翼を羽ばたかせて高度を下げていく。

そして、目的の建物の前へ静かに降り立った。小狼が先に背中から飛び降り、後から降りようとする知世の手を取って手伝う。

二人が地面に足を着けたのを確認すると、ケルベロスの体は金色の光に包まれ、小さな仮の姿に戻った。

彼らは視線を動かし、目の前に佇む一軒家を眺めた。

表にある広い出入り口をシャッターで塞ぎ、上に『浦原商店』と白抜きされた看板が掲げられている。名の通り、単なる家というより店の方が正しいらしい。

「……えらい小^ちっちゃん店やな」

眺めていたケルベロスが正直な感想を口にした。こぢんまりした店舗は見る者に「小さい」という印象しか与えない。それと、現代としては「古風」という印象も。

第一、その見た目と看板の名前だけでは何を売る店なのか分からない。「小さい」「古風」に加えるなら、「胡散臭い」といったところであろうか。

ぴたりと閉じられたシャッターには「本日閉店。」と、お世辞にも上手いとは思えない字で綴られた紙が貼り出されていた。

「閉まತ್ತるみたいやけど……どうすんねん？」

「行くしかないだろ」

戸惑っているケルベロスに、小狼が即答した。未だに光を発し続けている宝剣をぐっと握り締め、仇を前にしたかのような鋭い眼差しで、小さな建物を睨みつける。

「さくらがここにるのは分かってるんだ。強引にでも見つけ出して――」

「李君、落ち着いてください」

殺気にも似たオーラをみなぎらせている小狼の肩へ手を置いて、知世が宥めた。

「そんな怖い顔をしていては、こちらのお店の方に警戒されてしまいます」

「怪我をした人間を無理矢理連れ去ったんだ！ 警戒も何もあるか！」

「無理矢理とは限りませんわ。何か事情があったのかもしれませんがとにかく、こちらの方にさくらちゃんを知っているかどうかを確認して、それからどうすべきか考えるのが一番ではありませんか？」

もっともな正論を口にする知世に、小狼は言葉を詰まらせる。

「さくらちゃんの無事を確かめるには、まず相手に怪しまれないようにするのが得策です。李君、とりあえず剣をしまっていただけないでしょうか？」

下手をすると凶器と勘違いされる物を手にしていることに今更気付いて、ぎくりとする小狼。知世の顔を見ると、にこり、いつもの穏やかな微笑みを返され、熱くなっていた頭を急速冷却された気がした。

小狼は自分の混乱ぶりをようやく悟って恥ずかしくなる。剣を握った手を見つめて、「なにをやってるんだ」と心の底からなじりたくなった。

軽く息を吐き、目を閉じる。剣全体が強く光り、すうっと消え失せた。掌には最初に取り出した組紐の飾りだけが残される。

「……これで、いいか？」

飾りをポケットに押し込みながら尋ねると、知世は「上出来ですわ」と優雅に笑った。

「よし、ほんなら行くか」

「——あ、申し訳ありません。ケロちゃんは隠れていてくださいな」「なんでや!？」

「さくらちゃんが心配な気持ちは分かりますが、何も知らない人がケロちゃんを見たら、警戒どころではすまないのです……」

面目なさそうに説得する知世に反論できず、ケルベロスはがつくりと項垂れながら「しゃーないなあ」とぼやいた。そして、知世が肩から提げていたバッグの中へもぐり込む。

「苦しかったら言ってくださいね」

知世がファスナーの開いたバッグに向かって話しかけると「おう」とくぐもった返事がする。

一通り準備が整った所で、小狼と知世は改めて『浦原商店』を見、閉じられたシャッターへ近づいた。

「大道寺、お前に任せる。おれには、最後まで冷静でいられる自信がないから」

心なしか小さくなった声で頼むと、知世は軽く頷いてから、シャッターに向けて「ごめんください」と呼びかける。

——返ってきたのは、静寂。

聞こえなかったのかと思い、再度呼びかけようとしたが、その前にガラッ！と音を立ててシャッターが上へスライドした。

突然のことに驚いて、知世は半歩後ずさる。目の前で、ガラガラとシャッターは上がっていき、入り口を三分の一ほど開けた所で止まった。道路に下りる夜闇の中で、淡い暖色の光が店内から溢れ出す。

引き上げられたシャッターの下から、ひよこり、と顔が二つ覗いた。一人は赤茶けた髪に、釣り上がった目付きの少年。もう一人は鼻柱の辺りで二股に分かれた長い前髪と、気弱そうな眼差しが印象的な少女。どちらも小学生ぐらいの背丈に、『浦原商店』と揃いのゼッケンが縫い付けられたTシャツを着ている。

「……店、もう閉まってんだけど」

いきなりつつけんどんな口調で言ってきたのは、少年の方だった。子供とはいえ粗雑すぎる物言いに、小狼がムツと顔を顰める。

大道寺に任せてよかった。自分だったらこれだけでムキになりそうだ——そう思った。

「ジン太くん……お客さんにそんな言い方すると、キスケさんに怒られるよ」

「うるっせえな雨^{ウルル}！　こんな夜中に閉店済みの店開けさせるなんて迷惑以外のなんでもねーだろ！」

見た目通り控えめな声で少女——雨^{ウルル}というらしい——が注意すると、

ジン太と呼ばれた少年が唾を飛ばして怒鳴る。至近距離で大声を出されたためか、雨ウルルという少女は慌てて両手で耳を塞いでいた。

「その大声の方がよほど近所迷惑じゃないのか」というのが小狼の密かな感想である。

「夜遅くに申し訳ありません。実は、少々おうかがいしたいことがあるんです」

ジン太という少年の横柄な態度に動じることなく、知世は屈んで視線を合わせながら丁寧な物腰で話しかける。

そして、バッグのサイドに付いていたポケットから、例の母親の試作品とは別の、一般の携帯電話を取り出した。それを開いて操作し、さくらがピースサインをした画像を表示する。ジン太と雨にその画像を見せ、

「この方を探しているのですが、ご存知ありませんか？」と尋ねた。

二人はじつとさくらの画像に見入っていたが、少ししてハッと息を呑み、ばつが悪そうに視線を逸らした。

「——知ってらっしゃるのですね？」

目ざとく見とめた知世が確認すると、ジン太は「あー、いや……」とそっぽを向いたまま歯切れの悪い返事をする。

横から雨ウルルがシャツの裾を引っ張りながら「ジン太くん、言った方がいいんじゃない？」と囁いた。

「バカ、店長と相談ナシに勝手に話せるかよ！」

「相談ナシに勝手に帰しちゃってもよくないと思うけど……」

ジン太と雨ウルルは顔を突き合わせ、ひそひそと小声で言葉を交わす。小声といっても、内容はほとんど丸聞こえだった。

いずれにしても、この店が当たりであったことに変わりはないさそう

だ。
するとその背後から、からん、からん、と軽快な音が聞こえ、知世や小狼だけでなく、ジン太と雨ウルルもそちらを向いた。

屈んだ知世の目にはその音の源が見えていたが、小狼の目線からは

窺うことができない。仕方なく、同じように屈んで、店の中を覗き込んだ。

店には壁際を中心に大小様々な棚が置かれ、瓶や箱に詰められた駄菓子^{ダクシ}を所狭しと並べている。さらに奥の方には、一段高い廊下^{ナカド}が設けられていた。その廊下の前から、時代錯誤な木の下駄を、からんからん、と鳴らして歩み寄ってくる男がいる。

濃い緑と白の縞模様が入った帽子を目深に被り、裾に白い菱形が並んだ黒の羽織を纏い、その下には帽子の模様と同じ色の甚平を着ている。

男は自主的に道を開けたジン太と雨の間^{ウルル}を通ると、半端に開いたシヤッターの端を掴んで、さらに引き上げる。自分の頭の上まで開放したところで止め、知世と小狼に視線を向けると、にっ、と笑った。「こんばんは。アタシがここの店長ですが……夜分に何の御用でしょう？」

のらりくらり、という擬態語の似合いそうな口調で尋ねる男に、小狼は一瞬、ただならぬものを感じた気がした。

「あの、人を……探しているのですが」

知世が答え、携帯の画像を見せようとするが、男は手で軽く制した。代わりに懐へ手を入れて、何かを取り出す。

「そのコって、こーゆうモノを持っていたりします？」

言いながら目の前に突きつけられた物に、知世も小狼も、ぎょつと目を見開いた。

——男が手にしていたのは、見覚えのある細長いカードと、小さな鍵。

さくらの所有物である、『さくらカード』と、星の鍵だった。

「……！」

一気に警戒心を高めた小狼が知世を庇うようにして前へ出る。帽子の鍰の下から覗く垂れ目を睨み上げたが、男は相変わらず笑顔のままだった。それどころか、二人の反応を見てさらに笑みを深めたようにも見える。

「ご安心下さい。彼女は無事ですから」

カードと鍵を見せびらかすようにひらひらと振りながら、男は告げる。しかし小狼の表情は変わらない。知世も先刻までの穏やかな表情が消え、不安げな色を浮かべていた。

その様子に、男は「うーん、困りましたねえ」と顎へ手をやる。科白とは裏腹に顔が困っているように見えない。

すると、男は何か思いついたようにぽんと手を叩いた。

「ああそうだ。信じられないんでしたら、見てきます？　この奥で寝てるんスよ、彼女」

一人だけ明るい声のまま、案内をするように店の奥を掌で示す。これ以上ない申し出だが、大袈裟な喩えをするなら、敵地へ特攻に行くようなものだ。だが、さくらの無事を確認したいという気持ちも強い。

警戒の揺るがない小狼はどうすべきか判断に迷い、知世の方を振り返る。

視線に気付いた知世も一瞬戸惑っていたようだったが、すぐに決意を固めたように、こくりと頷いて見せた。小狼もそれを確認して、頷き返す。

男をもう一度睨んでから、無言でシャッターをくぐって店の奥へと進んだ。知世は「お邪魔します」と軽く会釈してから踏み入る。

「ウルル、お茶淹れてくれるかい？　ちょっと多いけど七人分」

その後ろで男が話しかけるのが聞こえた。小狼と知世が見ると、雨ウルルは「分かりました」と頷く。

「店長、オレは？」

「ジン太はこの掃除をやり直し」

「……へーい」

容赦のない命令に、ジン太は開けっ放しのシャッターを再び下ろしながらげんなりとした声を漏らす。

身構えていたにもかかわらず、随分と平和な光景に、小狼も知世も毒気を抜かれてしまう。男はそんな二人を見て、楽しげに肩を揺ら

した。

「さ、どうぞどうぞ」

先に下駄を脱いで廊下へと上がり、奥へ促す男。二人（特に小狼）は疑念の込められた視線を送り続けながらも靴を脱ぐ。

さつさと歩き出した男の背中についていくと、障子で閉め切られた部屋の前に来た。

男は一度二人を見やってから障子に手を掛け、からり、とそれを引き開ける。

からり、と引き開けられた障子の方を見ると、そこには浦原と、二人の人間が立っていた。

一人は、少しはねた焦茶色の髪の少年。もう一人は、その少年と同年ぐらいで、ゆるく波打った長い黒髪を下ろした少女。どちらも年恰好は自分より二つほど下といったところだろうか。

なんだ？と一護が訝った直後、部屋の真ん中に敷かれた布団を見て、二人は目を見開いて駆け寄っていた。

「——さくら！！！」

「さくらちゃん！！！」

少年と少女は同じ名前を叫んで、枕元に膝をつき、布団に眠る人物の顔を覗き込む。知り合い同士であることは一目で分かった。ついでに言うと、未だに眠っているショートカットの少女は、さくらという名前らしい——

傍で人が声を荒げているというのに、当の本人であるさくらは起きる気配が全くなかった。

「やっぱり知り合いでしたか……来てくれて助かりましたよ。こっちもどうしようか悩んでたトコだったんで」

後ろ手で障子を閉めながら言う浦原。すると、少年の方が敵意の込もった眼差しを向ける。

「ああ、そんなコワイ顔しないで下さい。言っときますけど、その

コをここに連れてきたのはアタシじゃなくって、そっちの目付きの悪いお兄サンっスからね」

「なッ……人に責任転嫁すんのかテメエ!!」

無責任なことを平然と言つてのける浦原に、一護は青筋を浮かべて怒鳴った。

「転嫁も何も、黒崎サンがそのコを連れてきたのは事実でしょ」

「だからって、人のことを誘拐犯みたいな言い方すんな!」

「あれ? 違うんスカ?」

「違うに決まってるだろ! 大体俺にそんな趣味は無え!」

「――連れてきたって、どういうことだ」

下手をすると永遠に続きそうなやりとりを遮ったのは、少年の低い声だった。底知れぬ怒気を孕んだ声音に、浦原と一護は驚いて視線を向ける。

少年はさくらにかけられた布団の端を握り締め、ぎろり、と子供のものとは思えないような鋭い睨みを利かせた。

「お前ら……何をしたんだ。こいつに……さくらに、何をしたんだ!!」

抑え込んでいたものを吐き散らすように問いただす少年に、黒髪の少女が慌てて「李君!」と宥めようとする。少年は止まらなかった。

「こいつがいなくなった場所に、血の跡が残ってた……! お前らは……お前らが、さくらを傷つけたのか!?!」

少年がズボンのポケットへ乱暴に手を入れ、何かを引っ張り出す。

朱色の組紐が印象的な、中国風の飾りだ。

浦原や一護、井上には少年が何をしようとしているのか分からなかったが、少年の態度に思わず表情が強張る。一護にいたっては、殺気にも似たものを本能で感じ取り、横の壁に立てかけていた斬月へ手を伸ばしそうになった。

張り詰めていく空気の中、それを破ったのは、微かな呻き声だった。「……う……」

ぴたり、と空気が止まる。見ると、安らかだったさくらの寝顔がし

かめられ、僅かに身じろぎをしていた。

「……さくら？ さくらっ！」

「さくらちゃん……！」

少年と少女が幾度も呼びかける。閉じられていた目蓋がうつすらと開かれた。

しばらくの間焦点が合わず、宙を彷徨っていた視線が、自分を覗き込む二人の顔に固定される。

意識を取り戻したさくらはぼんやりとした表情のまま、「……知世ちゃん、小狼君……」と呟いた。

「さくらちゃん……！ ご無事でよかったですわ！」

黒髪の少女——こちらは知世というらしい——の顔が明るくなり、小狼と呼ばれた少年も脱力した様子で、盛大な溜息を吐いた。

無論、安堵したのは一護や井上も同じことである。

さくらは自分が覚えのない和室に寝ていることを理解すると、目を瞬かせ、ゆっくりと布団から起き上がる。

「……あれ？ わたし……」

「大丈夫か？ 怪我してるんだろ！？ 痛くないか！？」

矢継ぎ早に問う少年——小狼に圧倒されながらも、さくらは「そ、そうだ！」と叫び、右肩の辺りへ手をやった——が。

「……ほえ？」

間拔けな声を上げたさくらに、少女——知世が不思議そうな顔で「どうなさいました？」と尋ねた。

「あの、えっと、ここに、傷がある……はずなんだけど……」

言いながら、さくらは右の袖を捲くってみせる。しかし、その下の皮膚は傷一つなく、痕すら刻まれていない。無傷以外の何物でもない自分の肌をまじまじと見て、首を傾げるしかできないようだった。不思議がっているさくらに気付いて、井上が事情を説明しようとするが、

「怪我でしたら、ここに来たときに治させてもらいましたよー」という浦原の科白が遮ってしまう。

さくらたち三人が一斉に視線を動かすと、浦原はいつの間にか畳の上に胡坐をかいていた。その姿を初めて見とめたさくらが「あなたは……？」と口にするが、浦原は口元に笑みを浮かべるだけだ。

そこでふと、壁際にいた一護が身を乗り出して、「大丈夫か？」と問いかけようとした。

ところが、

「近寄るな!!」

突然小狼が声を張り上げ、さくらと一護の間で壁のように立ち塞がった。

「さくらに近寄るな! 何を企んでるのか知らないが、これ以上好き勝手にさせてたまるか!」

どうやら小狼は、この場にいる知世とさくら以外の人間を『敵』と認識してしまったらしい。一護は小狼の剣幕に圧倒されて、呆然と見上げるしかできない。

しかし、そんな小狼を止めたのは、他でもないさくらだった。

「小狼君待って、違うの! その人、わたしのこと助けてくれたんだよ!」

必死な声で告げられたさくらの科白に、小狼は目を瞠り、彼女を振り返る。

硬直している小狼の顔を真っ直ぐに見返し、さくらは言葉を続けた。

「わたしが……その、大きなお化けみたいなのに追われて、怪我して……そしたら、その人が来てくれて、わたしのこと守ってくれたの! 悪い人じゃないんだよ! だから——」

できる限りのことを説明して、敵意剥き出しの自分を宥めようとするさくらに小狼はしばし黙り込む。

やがて落ち着いたらしく、その場に腰を下ろした。

ひとまず誤解が解けたと悟って、一護はほっと胸を撫で下ろした。だが、すぐにあることに気付いた。

「お前ら……俺のこと、見えてるんだな?」

ある意味見当外れともとれる質問に、三人は狐につままれたような

顔をした。

「……は？」

「え……えっと、見えてますけど……」

「な、何か支障でもあるのでしょうか？」

三人それぞれで肯定の答えを述べられ、井上が「黒崎くん……」と声をかけてくる。一護は複雑な表情で頷き返す。

そのやりとりの意味が分からない三人は、頭上に疑問符を浮かべてお互いの顔を見合わせる。

「さてと……それじゃ、一通り落ち着いたところで、お茶なんていかがです？」

能天気提案したのは浦原だ。三人——特に、小狼はまだ気を許していないようだが、知り合いを助けたという人間と一緒にいるという事で信用したらしく、黙ったままだった。

浦原の言葉を待っていたかのように、一枚の襖がすっと開き、湯呑みの並んだ盆を抱えた雨ウルルが入ってくる。

「……お茶、淹れてきました……」

いつものおどおどとした様子で、盆を差し出す雨に、浦原は「ご苦勞様」と答えて、湯呑みを和室の中の全員に配っていった。それまで部屋の隅で黙りこくっていたテッサイも手伝い始める。

茶の入った湯呑みが浦原を含め全員の手へ渡る。ところが、雨ウルルの持つ盆の上に一つだけ余ってしまった。

それを見た井上が「誰か、まだもらってない人いる？」と尋ねる。雨が持ってきた湯呑みは七つ。店員としてもてなす側である雨ウルルとテッサイを除くと、和室にいるのは六人。明らかに、一つ多い計算になる。

「一人隠れておるからのう。そいつを入れれば数は合うぞ」

雨ウルルが開けた襖から声がして、和室の中の全員がそちらへ目をやった。途端、一護たち以外の三人がぎよっとする。

当然であろう。そこで喋っていたのは人間ではなく、四本足の黒猫だったのだから。

そんな彼らに構うことなく、黒猫——夜一はしなやかな動作で知世の方に歩み寄っていく。

「やれやれ……いつまでそうしているつもりじゃ？ 気配を殺しきれとらんぞ。儂らを舐めてくれるなよ」

夜一が呆れたように話しかけているのは、知世が床に置いたバッグ。それに気付いて、知世がぎくりとした表情を見せた。

さくらがきよんとしていると、不意にそのバッグがごそごそと音を立てる。まるで、中に生き物が潜んでいるかのように。

やがて、バッグから何かがびよこりと頭を出した。

——丸い頭に、大きな平べったい耳が付き、女性受けしそうなつぶらな瞳が顔面に据えられたオレンジ色のぬいぐるみ。ご丁寧なことに、背中には小さな羽根が生えている。

知世とさくらが「ケロちゃん！」と、咎めるような声を上げた。しかし、ぬいぐるみは応えることなく、バッグから這い出して畳の上へと降り立った。つぶらな目に真摯な光を宿して、自分の存在を見抜いた夜一を見やり、さらに浦原の方へくると向き直る。

「……そのにーちゃんも気付いとったな？」

単なる質問というより、確認に近い科白に、浦原は軽く笑みを返すことで答えた。

それを肯定と受け取ったぬいぐるみは、

「何者や、にーちゃんなにもんら」

と、外見には不似合いな陰しい口調で言う。

浦原は帽子を手でぐっと押さえるようにして被り直してから、口を開いた。

「そうですねえ……どうやら、お互いに色々説明する必要があるそうっスねえ」

相変わらぬの掴み所のない態度。ちらり、と浦原は視線をさくらたちに向けて、言葉を続ける。

「じゃあ、こんなのでどうでしょう。アタシたちは正直に自分らが何なのかをお話します。その代わり、アナタ方も正直に何者なのか

を話してもらおう。まア、ギブアンドテイクってことで」

「ちょ、ちよっと待てよ浦原さん！」

勝手に仕切りだした浦原に、動揺した一護が話をせき止める。

「正直に……そんな簡単にばらしちまってるのかよ」

「大丈夫っスよー。この人たち、割と口堅そうですし。お互いワケありってことで、事情は察してくれるだろうし……第一、ここまできて隠し立てするだけ無駄でしょ。それに――」

かなり呑気な捉え方に、誰もの脳裏へ一瞬「それでいいのか」という思いがよぎった。そんな最中で、浦原が視線を動かし、さくらの方へと向く。

目が合ったさくらが、小さく息を呑む音が聞こえた。

「そのコが持つてる能力^{チカラ}。アタシも個人的に、興味がありますしね」
浦原は、ずっと懐に入れていたカードと鍵を畳に置く。

帽子の下でたたえられた怪しげな笑みは見慣れたものだったが、一護は湧き上がる不安を抑え込むことができなかった。

ああ嫌な予感がする。

――これからどうなるってんだ、一体。

一護は目の前で不審な顔をしている三人の少年少女、そしてオレンジ色のぬいぐるみのような生き物を見て、小さく溜息を吐いた。

T o b e C o n t i n u e d

Opus SIX (後書き)

お久しぶりです。

これまでに比べて分量が随分と大きくなってしまいました。こんなに長くなる予定じゃなかったのに。

当初は一回どこかで切ろうかと思ったんですが、内容的にちょっと無理と判断しました。

というか、何がどうあれここまでは全部一つの話として収めたいという気持ちで押し込みました。

Intersectionの四回目。

サブタイトルのサブタイトル……いわばサブサブタイトルは「WORRIERS」。

これは「心配する」を意味する動詞・worryを無理矢理名詞化してworrer、さらに複数形にしてworrersとしました。

ようは「心配する者達」という意味です。小狼や知世やケロちゃん は勿論、一護や井上もみんなでさくらを心配してたので。

日本語タイトルはいいのが浮かばなくて、そのworrersがあちこち彷徨ったりいきなり出くわしたりしたんで、そのまま使いました。ひねりがなくてごめんなさい。

私が考える小狼像。前々回辺りもそうでしたが、さくらが絡むとにかくテンパります。いつものクールさなんて宇宙の彼方に吹っ飛んで血の気が多くなります。

きっとそれが彼の本来の姿なんだと思う、多分。そしてそんな小狼を止められるのはさくらだけなんです。↑ここ重要。

ちなみに小狼が作中で使った人捜しの術は、原作で熱出したさくらにエリオルがコートを掛けて、それを使って持ち主割り出そうとしていたアレを意識しています。

「実際に成功してたらこんな感じじゃないかな？」というのを書いてみました。

ついでにおまけ。

うちの娘……イヤイヤ違う違う。拙作のオリキャラ葦雀つぐみちゃんのカラデザイン画なんてものを、年末に報告記事にてUPしてみました。

これが意外と好評を得まして、せっかくなのでこちらにも展示してみます。

右側にこまごまと書いているのはちょっとした補足とか裏設定とか。……別に読まなくても、作品を読む際には全く支障はないです。ただ、読みながら「実はこの子ってこうなんだよね」って思い出し笑いのネタにでもしてもらえれば、と。こちらになります。

>i15872—543<

あと、彼女は私の娘……じゃなくてオリキャラですが、あくまで「CCさくらサイドの人間」ということで、目元まわりとか髪の毛の流し方といった絵のタッチはCLAMP先生の画風に準じるよう意識しました。

実際、CLAMP画風よりも、ざざっと走り書きした感じのBLEACHの絵のタッチの方が描きやすいですが、仮にも「友枝中学校の生徒」がBLEACHチックな雰囲気撒いてたらおかしいですからね。

それからもう一つ。これまで作品への感想投稿を「サイトユーザー登録者のみ」に限定していましたが、もっといろいろ聞かせていたきたいという欲求が高まりましたので、以降「ユーザー未登録者も投稿可」としました。

なので、どーんどん意見でも文句でも疑問でも感想でも（前三つがなんか違う）聞かせて下さい。でも最低限のマナーは守ってね。よろしく願います。

Opus SEVEN

見えないということと
知らないということは
存在しないということの
証明にはなり得ない

>i16950—543<

インターセクション
スピリッツ
Intersection 5
マジック
[Magic
アンド
& amp,
S
pirits]

—隣り合う力—

「えーと、ケ……ケロベルス？」
「ちやう！ わいの名前はケルベロスや！ ルとロが逆になつとるわ！！」

名前を復唱しようとして間違えた一護は、ものすごい勢いでケルベロスに怒鳴られる。どう見てもぬいぐるみ以外のなんでもない単純な輪郭の丸い頭がドアップで目の前に迫った。

「……けど『ケロちゃん』って呼ばれてたじゃねえか」

「わいかて好きで呼ばれとるわけやない！ このわいのかっこええ

名前を間違うなんて失礼なー！」

「わ、分かったって！ 分かったからそんなに顔くつつけんな、近えんだよ！」

さらにぐりぐりと額を押し付けてくるので、一護はいい加減耐え切れなくなり、首根っこを摘んで引き剥がす。

一護の手を振り払い、空中に留まったケルベロスは勢い余ってぜーぜーと荒い呼吸を繰り返した。

「なるほど、魔法ねえ。……まさか本物にお目にかかるとは思いませんでした」

愛用の扇子で口元を覆いながら呑気な感想を言うのは浦原だ。あっさりとした反応に、布団から起き上がった状態のさくらが「おどろかないんですか？」と思わず尋ねてしまう。

「ま、こっちも色々ありましたからね。多少突拍子なことに出くわしても、免疫ができちゃってるんすよ」

一体今までどんなことがあったんだろう、と考えずにはいられない返事に、さくらは「はあ……」と曖昧に答えた。

「そういや、にーちゃんがその死神っちゅーのだとすると、もう生きとらんってことになるんか？」

名前を間違えられた怒りはどこへいったのか、ケルベロスが思い出したように問いかける。

一方で、今度は自分が死人扱いされたため、一護は露骨に顔を顰めた。

「勝手に殺すな。俺は例外なんだよ……正確には死神代行だし」

「では、井上さんは？ 死神ではいらっしやいませんか？」

知世が、布団の横に座り込む井上の方を見て言うと、

「あたしは違うの。生きてはいるんだけど、ちよつと靈感が強いだけだから」

ひらひらと手を振りながら答える。「本当は『ちよつと』で済むレベルじゃないんだろうけどな」と、一護は心の中で密かにツツコミを入れた。

浦原の提案により、一護とさくらたちはお互いのことを明かし合った。

といっても、一から百まで何もかも話そうとするとキリがないため、必要最低限の部分だけをかいつまむ形となった。

さくらは『さくらカード』という魔力を持ったカードの所有者であり、そのカードと、カードの力を発動させる鍵を用いることで、いわゆる「魔法」を使うことができる。

一護の前で使ったのもその一つだ。

小狼と知世は、そんなさくらの秘密を共有する数少ない同級生。

そしてケルベロスは、カードの守護獣として創られた存在だという。

一護は、現世に徘徊する悪霊・虚^{ホロウ}を退治する『死神』を務めており、身に纏う黒の死覇装がその証である。

ちなみに、虚^{ホロウ}も死神も幽霊に属する存在で、普通の人間が見ることはできない。

浦原は簡単に言うと、その死神稼業に関わる協力者のようなものだ。一護の同級生である井上は、死神でも浦原のような立場の人間でもないが、他者の怪我を治療できるという特異な能力を持っていることから、たまに駆り出されることがある。

互いが話したのは、この程度の内容にとどまった。

さらに自己紹介をしていくうち、さくらと一護が暮らす場所や学校的位置が隣町同士であることも分かってきた。

「えっと……じゃあ、さっきわたしを追いかけてきたのは——」
さくらが確認するように言うと、

「ああ、アレが虚だ。^{ホロウ}出るのは時々だけど、その度に他の浮遊霊とか、人間とかを襲う」

と一護が後の科白を引き継ぐ。

「……もし、あそこで一護さんが来てなかったら、わたし……」

「生きてはいなかったでしょうね。運が良かったんすよ、アナタは」
きっぱりと言い切る浦原に、さくらは夜闇の中で目の当たりにした
白い仮面や凶暴な姿を思い起こして、ぶるりと身震いした。

^{ホロウ}虚によって傷を刻まれた（今はふさがっているが）肩口へ、無意識
に掌を添える。その仕草を見た井上が、

「大丈夫？ 怪我した所、まだ痛む？」

と優しく話しかけてきた。さくらは慌ててかぶりを振る。

「ぜっ、全然平気です！ あ、あの、治してくれたんですよね。ありがとうございます」

舌をもつれさせながら頭を下げると、井上は「どういたしまして」と笑った。

「ねえねえそれより……その話が本当だったら、さくらちゃんは——
いわゆる『魔法少女』ってことだね！？」

突然目をキラキラと輝かせ、手を握って迫ってきた井上に、さくらは「ほえ？」と間拔けな声を漏らした。

「すごい！ 想像の話だと思ってたけど、ほんとにいたんだー！
じゃ、魔法使うときって、なんとかかんとかメイクアップ！って
言って杖振って変身したりするの？ あ、それとも鏡に向かって

呪文唱えてポーズ決めるとか？」

「え……えっと、変身はできないんですけど……」

「……井上、テレビの見すぎだ」

突拍子もない事を言っている井上と、明らかに困惑しているさくら
を見て、一護ががくりと項垂れる。

脇で見ていた知世やケルベロス、浦原もどこからツツコむべきか真
面目に悩みそうになった。

「それより、一つ聞いてもよいかの」

畳の上に行儀よく座った夜一が口火を切り、和室にいる全員が視線を向ける。猫が喋っていることに最初は驚いていたさくらたちだったが、時間が経つうちに案外簡単に慣れてしまった。

『免疫ができてる』というのはさくらたちにも言えることなのかもしれない。

「さくらと言ったか。おぬし、霊感は強い方か？」

尋ねられたが、さくらはすぐに首を横に振った。

「いえ、霊感はないと思いますけど……」

「霊感っちゅーより魔力は強いけど、幽霊とかは見えへんやろ。大体、それ以前の問題で、怪談話とかちよつと聞かされただけで悲鳴上げとるし」

勝手にコンプレックスを暴露しているケルベロスを「ケロちゃんっ！」とさくらが咎める。

その言葉に一護が眉をひそめて、

「幽霊苦手なのか？」と尋ねた。

幼少時から、幽霊の存在を風景の一部のように当然のものと意識してきた一護にとって「幽霊や怪談

・が苦手」という人種は珍しかったのだ。

「ゆ、幽霊……っていうか、その、なんかよく分かんないものは苦手なんです」

「でしたら、実際にその類を見たのは今日が初めてで、今までそういったことはなかったんスね？」

浦原が自分なりの解釈を述べたので、さくらはこくりと頷いた。

「うーむ、それは妙じゃのう」

唸り始めた夜一に、知世が「何が妙なんですの？」と問いかける。

「いや……さくらの言うことが本当だとすれば、昨日の今日で、いきなり死神や虚が見えるほどの霊力が目覚めたということになる。それは本来、有り得ぬことなんじゃ」

「……そうなんですか？」

「ああ」

「そういえば、知世ちゃんと李くんも、黒崎くんのこと見えてるよね」

ふと、井上が思い当たったように告げると、そこで初めて気が付いたのか、知世と小狼がハッと息を呑んだ。夜一の目がさくらから二人の方へと移される。

「……私は、靈感があると意識したことは全くありませんでしたわ」「おれも、魔力は生まれつき持つてはいたけど、靈感は全然……」

夜一の問おうとしていることを予想して、知世と小狼がそれぞれ答える。「ますます妙っスねえ」と、浦原が感想を口にした。

「ひょっとして、さくらがその、ホー……なんちゃらに襲われたのと関係あるんか？」

覚えたての名詞が浮かばず、適当に誤魔化したケルベロスに、一護が「ホロウだよ」とすかさず補足する。

浦原は問いに答えることなく、顎に手をやって、考え込むような様子を見せた。

「ここまでの話の流れからして、コチラで言うところの霊力と、木之本サンが元々持つてる魔力っていうのは、あくまで別物で互いに独立した種類の力らしいっスね」

「……それって、その魔力ってのがでかろうと小さかろうと、死神が見えるかどうかとは関係ないってことか？」

一護が言うのと、浦原は「まあ、そんなトコです」と肯定した。

「木之本サンは、今まで魔力のみが目覚めている状態だった。だから魔法を使っても、虚^{ホロウ}や死神を見ることはできなかったんス。それが、何かのきっかけで霊力も目覚めることになり、死神化した黒崎サンが見えるようになった……そう考えるのが、妥当っスかね」

軽く整理するようにまとめると、一護もさくらも合点がいったのか、小さく頷く。

「ところで木之本サン、ここ最近変わったこととかありませんでしたか？」

「変わったこと？」

「ええ、何でもいいんです。内容にもよりませんが、それが霊力を目覚めさせるのに繋がった可能性がありますんで」

さくらは眉根を寄せて、浦原の言う「変わったこと」を思い出そうとする。なかなか心当たりがなく、難しい顔になってくると、知世が代わりに答えた。

「実はさくらちゃん、今日の体育の授業のときに倒れられたんです」
「――倒れたあ？ そんな話聞いたらんぞ！」

知世の言葉にケルベロスが驚いて声を荒げた。さくらは「あれ、言っ
てなかったっけ？」と小首を傾げる。

「でも、倒れる前も後もずっと元気だったし、保健室で目が覚めたときも普通だったし、別に関係ないんじゃない……」

「そう簡単に決め付けるわけにもゆかぬ。おぬし自身が変化に気付いていないということもあるじゃろう」

さり気なく否定しようとするさくらだったが、夜一が即座に一蹴した。

「木之本サンについては何とも言えませんが、大道寺サンと李サンは、木之本サンの霊力が目覚めたことに影響されたと言っているでしょう」

「……あるんかいな、そんなこと」

霊的なものに関しては門外漢のケルベロスが、浦原の結論に怪訝な声を出した。

「ありますよー。井上サンがその例ですし」

さらっと肯定する浦原の科白に、ぎくり、と一護が動きを止める。

浦原の言う通り、井上は元々靈感を持たない普通の人間だった。それが、一護が死神の能力を獲得したことをきっかけに霊力が開花し、今では『超A級霊媒体質』と言われた当初の一護と同程度か、それ以上の力を宿している。

強いものであればあるほど、互いに影響を受けやすい――それが霊力というものなのだ。

「じゃあ、ケルベロスさんもその影響を受けたのかな？」

井上が呟いたが、「いや、それは当たらずとも遠からずやな」とケルベロスが首を横に振った。

「わいは主であるさくらの力を源に^{あるじ}しとる。さくらがその幽霊やら何やらが見えるようになったから、わいもそういう力を共有するようになったんやろ」

そう説明すると、浦原は「成程」と納得したが、さくらは内心で「幽霊って言わないでよう」と泣き言を呟いていた。

ふと、ケルベロスは何かを感じ取ったようにぴくりと耳を動かした。そして、ゆっくりと視線を巡らせる。

行き着いた先で、一護が手の平サイズのケルベロスの体を、穴が空きそうなほどにじーっと凝視していた。

「な、なんやにーちゃん。さっきから人のことじろじろじろ見よって」

「イヤ……お前って、ホントに生き物なのかなーと思って」

「はあ？ 何言うтонねん、しゃべって動いたら生き物に決まってるやろ」

「……それにしちゃ、見た目がヌイグルミみてーだよな」

言いながら一護が脳裏に思い浮かべたのは、フェルトと綿と糸しか使っていない体をせわしく動かし回っているコンの姿だ。

「なに……このかっこええわいをぬいぐるみ呼ばわりするなんて、ええ度胸しとるやないか！」

オレンジ色の顔を真っ赤にして再び声を荒げるケルベロスに、思わず一護は後ずさった。

頭の中だけで、ケルベロスが自称する「かっこいい」という形容詞を反芻してみても、無意識に不審の目を向けてしまう。

「なんやその目は！？ 小僧といいどいつもこいつもわいのことをばかにしよってー！」

「ケ、ケロちゃんってば！ 落ち着いてよー！」

一護の目が語る本音を察して、憤慨したケルベロスが小動物のように飛びかかろうとする。さくらが慌てて尻尾を掴んで引き止めた。

どんなに羽根を動かしても、尻尾の長さ分しか一護に近寄れないケルベロスは「放せーっ天罰下したる！」と喚きながらじたばたと空中で暴れる。

なんともにぎやかなその光景を、一護や井上は呆然と眺めていた。すぐ傍にいる知世がにこにこ穏やかに微笑んでいるので、どうやら彼女たちにとっては日常的なものであるらしい。

——そんな中、小狼が無言で、すっと立ち上がった。

突然部屋の真ん中に立った小狼に、全員の視線が集まる。さくらが「どうしたの？」と訝った。

一護はその時になって初めて、小狼が自身の靈感について答えたとき以外殆ど喋っていないことに気付いた。

小狼はしばらく立ち尽くしていたが、いきなりさくらの手を掴んだ。

「じゃっ、小狼君？」

「話すことは全部話した。夜も遅いし、もう帰った方がいい」

「ちよっ……待ちいや！ まださくらがホロホロつつうのに襲われた原因も分かってないんやで！」

再び適当に誤魔化したケルベロスに、本来なら「だからホロウだよ」とツッコむところだったが、小狼の強引な発言に一護も言葉を失くした。

店に入ってきてからの様子を見ていればすぐに分かる。ここにいる人間の中で、一番さくらを心配していたのは小狼だ。

その小狼が、これからのさくらの身の安全に関わる話を深めることもなく強制終了させようとしている。

「確かに、原因は分かっていますが……手掛かりもないようじゃ、ここですっと話し込んでいても無意味っス。今日はお開きにしましょう。その代わり、木之本サンの連絡先を黒崎サンに教えておいてくれませんか？ もう一度襲われる可能性は十分にありますからね」掴んだ手を引っ張り、さくらを立たせて、今にも部屋を立ち去りそうな勢いの小狼を宥めるように浦原が言う。

小狼は陰しい表情で、唇を固く引き結ぶ。すると、知世が自分のバ

ツグをごそごそとあさり始めた。

「では、こちらをどうぞ」

知世が取り出したのは、紺色の携帯電話。――さくらや小狼が持つ、試作品の電話とよく似た形のものだ。こちらは少し高い年齢層向けに作ってあるらしく、さくらたちの物にあるような星や太陽といったシンボルが使われていない、シンプルなデザインだった。

一護は不思議そうな顔をして、差し出された携帯電話を受け取る。

「なんだコレ？」

「私の母が勤めている会社の試作品です。よろしければ、それをお使い下さい」

「え……いいのか、もらって？」

「はい。私たちもそれと同じタイプの携帯を持ってて、電話帳にある『同機種1番』でさくらちゃん、『2番』で李君、『3番』で私につながるようにあらかじめ設定してありますの。メール機能も搭載していますわ」

「ほお、これは便利じゃのう」

感嘆の声を上げながら、夜一が横から電話を覗き込んだ。知世はさらに、今度は銀色で同じデザインの携帯電話を手にして「井上さんどうぞ」と差し出す。

「ありがとう。大切にするね」

井上はそれを受け取ると、素直に喜びながら早速ボタンを操作し始めていた。

浦原の言った連絡手段も確保したので、一護が「さてと」と腰を上げようとする。

「じゃあ、外暗いし……帰るんなら送ってやるよ」

「いい」

気を利かせたつもりで言ったが、即答で拒否された。一護はぽかんとしてから、聞いてもないのに返事をした小狼を思わず睨む。

小狼は一護の方を見向きもせず、戸惑いながらもいそいそと立ち上がるさくらを手伝っていた。

「さくらはおれが送る。わざわざ来なくていい」

「お、お前な……！」

「黒崎サン」

素っ気ないとか無愛想とかのレベルではない態度に一護は思わず激昂しかけたが、その前に浦原が名前を呼び、やんわりと制止した。

「黒崎サンは、井上サンを送ってあげて下さい。夜道を女の子一人で出歩くのは危険っすからね」

口先から出た科白はもったもたではあるが、一護はそれが明らかな口実であることを見抜いていた。

向けられた視線が「無闇に構うな、好きにさせておけ」と告げている。無闇に突き返すこともできず、渋々頷くしかなかった。

小狼がその反応を待っていたかのように、さくらの手を少し乱暴に引っ張り、障子を開けて外に出ようとする。

「ちよっと待って下さい。これ、忘れちゃダメでしょ」

わざとらしく引き止めた浦原が掲げたのは、さくらカードと星の鍵、そしてさくらが買ってきた牛乳の入ったビニール袋だ。

「あつ、す、すみません。どうもありがとうございます——」

さくらが礼を言いながら手を伸ばそうとするが、その前に小狼がひったくるようにして浦原から取り上げていた。

小狼は「行くぞ」とだけ言い、困惑しているさくらの手を引っ張ってさっさと部屋を出てしまう。

「……な、ちよっ……置いて行くなや！ さくらー！ 小僧ー！」

小狼の言動を呆然と眺めていたケルベロスが我に返って、慌てて飛び上がりながら後を追った。知世は落ち着いた動作で一護たちの方に向き直り、「お邪魔しました」と丁寧に頭を下げてから、さらに後へと続く。

一気に人口密度が低下した簡素な和室に、静寂が戻った。

「……な、何だったんだ？ あいつら……」

取り残された一護が、まだ体温が残っている布団と、開けっ放しの障子を見比べて、呟く。

井上は知世がくれた携帯を握ったまま「さあ…」と首を傾げた。

浦原は「やれやれ」といった様子で帽子からはみ出た髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き、夜一は小さく溜息を吐いていた。

深深と、夜が更けていく。

『浦原商店』の看板が掲げられた、こぢんまりとした店。

表のシャッターがからからと口を開けると、そこから人が二人出てきた。

前にいるのは少年、後ろからついてくるのは少女だ。正確には、少年が少女の腕を掴んで引っ張ってきている。

少年は競歩と見紛うような早足で、さっさと店から離れていく。少女が何か話しかけているようだったが、少年は聞く素振りを見せなかった。

その様子に、古いアパートの屋上の縁に座り込んだ幼い少年は、月が鎮座し、星の光が散りばめられた夜空を背負って、くすくすと笑う。

「とりあえずは、上々かな」

呟いた直後、開け放されたシャッターからさらにもう一人の少女が出てきた。すぐ傍の空中を、何か小さな影が飛んでいる。

幼い少年は目を細め、ゆっくりとそこから立ち上がる。

一歩間違えば、そのまま地面へ墜落しかねない——そんな場所に、少年は平然と突っ立っている。

そして、口元に楽しげな笑みをたたえたまま、夜色よるいろの天頂をゆっくりと見上げた。

「でも、まだこれからだよ」

——そう、まだ終わらない。
これから、始まるのだから。

To
be
C
o
n
t
i
n
u
e
d

Opus SEVEN (後書き)

大変お待たせいたしました、第七話です。

会話ばかりの文章は難しい……ただでさえ人数多いし。最大参加数8人ですよ、8人。

「漫画みたいにテンポよく」を目標にしているのですが、こんなのでやっつけていけるのか不安です。

タイトル解説まいります！

「Intersection」シリーズはこれで終わりです。長かった！。サブサブタイトルは「Magic & amp; Spirit's」。

magic∥魔法・魔力、spirit∥霊力・死神みたいな感じですよ。

霊力についてはspiritsよりもsoulsの方が語感的に合ってるかもしれないーと思って、今回の修正にあたって改題も考えたんですが、やっぱりそのままにしました。

それから「隣り合う力」。

今回の話でも書いたように、魔力と霊力は基本的には全く別の力。本人次第で精度や強度を上げることはいくらでも可能で、さくらと一護はいわばそれぞれの力の完成形の代表格みたいな感じだと思うんですが、一緒にくたになって混じり合うっていうことは原則的に有り得ないという扱いにしました。

両者は互いに異なるフィールドを司る力。だけど、「そこにある」ことは明確に分かる。導入編とかで綴った平行線のように「隣り合っ」て「存在する」——そういうイメージ。

まあ、これは私自身の解釈であって公式設定がどうっていうのは度外視していただければ助かります。

ところで話の中で「織姫の霊力が開花したのは一護の影響」って書

きましたが、これは『BLEACH』原作6巻にて明言された内容に基づいてます。でも、最近になってそうではない事が判明したんだよなあ、とか思い出しました……。

どっちにしても、この作中での設定時期ではまだ明らかになってない事実ってことで、修正せずに通しています。

さらに、今回ちょっと頑張って扉絵みたいなイラストも入れてみました。

相も変わらず鉛筆ラフと筆ペンで済ましてるんですが、何年かぶりにスクリーントーンなんて引っ張り出したりします。

一護の霊力を燃える炎で、さくらの魔力を淡い灯火のイメージで表現してます。深いことは考えずに雰囲気さえ伝わればオッケイです。ただものすごく心残りなのが、最初「Spirits」を「Spirits」って素で書き間違えちゃって、後でスペルミスに気付いて無理矢理「I」を「r」に誤魔化した痕跡がありありと見てうかがえること……。

筆ペンって楽しいけど厄介です。

ついでに、第1・2話にもちゃっかり挿絵を追加しております。興味がありましたらどうぞご覧くださいませ。

この話で一番書きたかったのは、ケロちゃんについて色々不思議があったり、無自覚のうちに馬鹿にしちゃって食って掛かれる一護。そしてベタなことを言う天然な織姫です。

「なんとかかんとかメイクアップ」の辺りはかなりベタです。自分でも書いててちょっと噴き出しそうになった。ついでに「テク○クマヤコン」も付け加えようかと思ったけどさすがに自重した。

とにかくこの三人は書いてて楽しかった。

小狼がやたら不機嫌な理由は次回で明らかにします。

……で、この話を書くために魔力と霊力の位置づけと関係性について考えてたんですが、なんか自分でもよく分かんなくなって、原作と照合したら致命的な矛盾点とかが出てきてすごい混乱しまして……。

それで、自分なりにこの『昏き翼』の世界における両者の力の関係と性質についてまとめたお話を、特別編というような形で後日お送りしたいと考えております。

『BLEACH』と『CCさくら』の原作を読んで考えた自己流解釈および設定を説明してもらう予定ですので、よろしければ目を通してみてくださいます。

……え？ 誰に説明してもらうのかって？ それは読んでの楽しみ。

おまかせ☆KEROKON STATION!! vol. 1 (仮) (前書き)

前章のあとがきにて触れました通り、特別編で失礼。

「あの二人」にご説明を頼みました。

本編のストーリーには直接関係ない内容なので、構えずにさらっと読み流す感じでよろしくお願いします。

おまかせ☆KEROKON STATION!! vol. 1 (仮)

コン「スプラッシュ！(あいさつ) BLEACH界のオダギリ
ジョー・コンと!!」

ケルベロス(以下ケロ)「ここにゃちわー！ CLAMP界のイ
ケメントップ・ケロちゃんの!!」

ケロコン「ラジオケロちゃんコンにおまかせベイビー・リターン
SUNLIMITE D特別版!!」

オープニングBGM…ORANGE RANGE「＊＼アスタリ
スク」

♪見上げた夜空の 星たちの光♪

ケロコン「……………」

コン「ゴラァ!! テメーなに勝手に番組名変えてやがんだ! お
かげで出だしのタイトルコールから全く揃わなくて読者がキョトン
として疑問符まき散らしてんじゃねーか!!」

ケロ「何言うてんねん、そっちこそ相談もナシで一人で名前決めよ
うとしたやんか! おあいこやろ!!」

コン「アホかァ! 決めるも何もこういう質問番組のタイトルは『
ラジコン』って付けるのがウチの定番なんだよ! アニメ放送期間
半年以上も残して打ち切りにさせられたヘボコーナーのタイトルな
んか付けられるかつの!! (史実です)」

ケロ「なにい!? そっちは原作で存在すら忘れられつつあるくせ

にえばるなっちゅうねん!! ていうか最早別な小ネタ(カラクラヒーローズとか)に取って代わられて作者からも拒否れとるくせにー!!」

コン「ふおおオオオウ!! 言ったなこんチクショウ、この下部強^{ポッドモッドソウル}化型改造魂魄・コンサマのイナヅマトルネードキックで天罰下してやるア!!」

ケロ「ほんならこっちは必殺・大阪名物ハリセンチョップで叩き返したるわー!!」

カンペ(取り込み中にすみません。作者Mから伝言が届きました)

ケロ「……あ? 作者M? だれやねん」(寸止め)

コン「最近猛絶スランプで文章詰まってる自称モノカキのへボみけぺんのコトだろうが。つーか作者Mって、オメーアニブリの主題歌(「少女S」)もじりやかっこのいいと思ってるのか? バカか?」(寸止め)

カンペ(その話聞こえませーん。

「ケロちゃんへ。放送が無事に終わったら特製マカロンーダースを差し上げます。

コンへ。放送が無事に終わったらルキアの限定ブロマイド写真を用意します。

というわけで仲良くやってね。Mより」)

ケロコン「……………」

(何事もなかったかのようにいそいそと席に戻る二匹)

ケロ「」匹”は余計や。まあ、それはともかく……よっしゃあ! なんかいのろとスタートからつまづきよったけど、早速コーナー始めよか」

コン「おうよ! そんなじゃあまず、このコーナーの主旨を説明して

やるゼイ！」

ケロ「このコーナー『ケロちゃんにおまかせ！リターンズ・特別版』は、小説……えーと、『The Shadow of VIOLET WING―昏き翼の紫影―』……長いからあとは『昏き翼』にしようか。これに関する読者の質問や疑問、小説の舞台裏についてぜひ答えたい企画や！」

コン「ザッツライト！ 小説の中身を堪能しつつ、本編じゃ触れられんような裏話や裏設定を情け容赦なく暴露し丸ハダカにして、さらに読者に楽しんでもらおうという前代未聞・賛否両論・話題沸騰間違いナシのプログラム——それがこの、『ラジオコンベイビ―・UNLIMITED』だっ……！」

ケロコン「……………」

ケロ「せやからなんで勝手に番組名まとめてんねん……！」（どどどどど）

コン「だからこの手の番組は『ラジコン』で決まってるって言っただろうが……！」（ゴゴゴゴゴ）

カンペ（一応この番組は『おまかせ☆KEROKON STATION!』という名前なんです）

ケロコン「やかましい……！」

カンペ（ちゃっちゃと進行していただかないと、せっかく用意したプレゼントが没収に——）

ケロ「さーてと！ で、そういうコンセプトの企画の記念すべき第一回、ちゅうことなんやけど」

コン「うむ……残念なことに、肝心な質問を用意してねえんだなコレが。事前告知して募集すりゃよかったのに、うちのボケみけペんが思いつきでやるからこういう事になるんだ！ ったくよオ」

ケロ「しかーし！ 今回は特別に、番組側で話のテーマを用意したんやで。その内容はどうと……」

ケロコン「『BLEACH』における霊力と『CCさくら』にお

ける魔力について!!」」

コン「っておいおい…なんかスゲー面白味に欠けてとっつきづらいテーマだな、大丈夫かよ。大学のレポートじゃあるまいし」(小声)
ケロ「いや…なんとなくノリで言ってみたけど、わいも不安になってきた。けど、さくらもなかなか食べさせてくれない高嶺の花のマカロンが待ってるんや、迷ってる場合やない…!」(小声)

コン「それもそうだな…こっちもルキア姐さんのセクシー(願望)ブロマイドが待っている。ここは長年ラジコンでトラウマこさえながらも踏ん張ったオレの腕の見せ所だぜ…!」(小声)

ケロ「で、なんで今回こんなテーマを扱うかと言うとやな。この『昏き翼』を書くにあたって、作者のみけぺんが霊力と魔力の違いについてどう設定しようかでかなり悩んだんや。それで、自分自身でも確認を兼ねて、二つの力の違いと位置づけについて整理して、読んでいる人も混乱しないように何かの形で考えをまとめようと思ったらしいで」

コン「オレはこんなつまねえテーマより、『BLEACHとCCさくらに登場する全女子キャラのスリーサイズを実地調査する旅口ケ』に出たいけどな!」

ケロ「意味の分からんこと言うとするやつがおるけどシカトして続けよか。結構長い話になると思うけど、順序立てて説明していこうや。まず、こないだ更新した第7話「Intersection」[Magic & amp; Spirit]で分かった、霊力と魔力の位置づけをまとめると、こうなる」(フリップボードを出す)

(1) 霊力と魔力は基本的に別物であり、互いに干渉する事のない独立した種類の力

(2) さくらは当初、魔力のみが目覚めている状態だったが、何ら

かのきっかけで霊力も覚醒

ケロ「ちなみに、あの死神のイチゴっちゅうにーちゃんは魔力はてんで持つとらん。ど素人もいいところや」

コン「なんか知らねートコでひでえ言われようだぜ、一護……つーかイチゴって本人に言ったら確実に昇華されちまうから気を付けろよ……。それで、この二つの事実が現段階で判明してるんだが、作品の中ではかなり重要な柱を成す大前提になってるらしいな」

ケロ「せや。でもって、(1)の事実からさらに派生させると——よいしょ」(ボードの紙をめくる)

・魔力があっても、霊的存在(死神など)が感知できるとは限らない
・霊力が強くても、魔法を扱う素質には繋がらない

ケロ「こういう結論が出てくる。みんなついてこれるかー？」

コン「オイ、どこのどいつだよ……この、みの○んたを髭髯とさせるめくり式解説を提案したアイディアの古いヤツは……」

カンペ(作者Mです)

コン「やっぱアイツかよ!?! 今度で年女になったとはいえいい加減にしろっての!?!」

ケロ「何騒いでんねん。まあええ、要するにこういう理由で、さくらはクロウをしのぐ強い魔力を持ってたけど、今まで幽霊は見えず、霊感みたいなモンも発揮しなかったちゅうわけやな」

コン「ナルホドな。そんじゃ同時に、霊力の強えー一護がいくら鍛えたところで、魔力自体がからっきしだから、さくらちゃんみたいな魔法使いにはなれねえってコトか」

ケロ「その通りや! さらに、死神のにーちゃんは霊力しか使いこなせとらんけど、やり方によっちゃさくらは元々の魔力に霊力がプラスされる!」

コン「両刀遣いってヤツだなブッ!?!」(ボードの角で殴打)

ケロ「そこはバイリンガルと言わんかいっ！ 無闇にヒワイな言葉吐いてR指定義務付けられたらどないすんねや！！」

コン「何言ってんだ、両刀遣いなんてまだまだセーフじゃねーか！」
ケロ「だからやめいっちゅうねん！！」

カンペ（※「両刀遣い」は俗語でbisexualを意味することがあります。bisexualについては辞書等でお調べください）

ケロ「……とまあ、霊力と魔力の大雑把な違いはこんなところやな。どや？ わいの説明でよお分かったやろ」

コン「……フッフッフ、バカめ。それで解説しきったと思ってんのか？ 大事なことを一つ見落としているぜ」

ケロ「な、なんや。気味の悪い笑い方しよって」

コン「いいか、よく聞けエ！！ 確かにさくらちゃんには靈感はなかった！ だがなあ、『CCさくら』の原作本によれば……さくらちゃんのアニキはバリバリ幽霊が見えていたという事実が存在するんだよッ！！」

ケロ「……それがどないしてん。ていうか、あんさんいつの間にこっちの原作本読んだんや」

コン「アホかーッ！！ 他のマンガから超絶カワイイ年頃のヒロインちゃんが出張してくるって聞いて興味も示さず落ち着き払って待ってるなんて男のすることじゃねえぞ！ この世の全ての盛りと女子を愛するコン様は、この数ヶ月間いてもたってもいられずだなあ、さくらちゃん含めその身の回りのことを徹底リサーチしたんだよ、部屋で菓子食ってゲーム三昧にふけてるテメエと違ってな！！」
（ビシッ！）

カンペ（スタジオの窓から井上さんが手を振ってますよ）↑ウソ
コン「いのうえすアアアン！！ ごきげんようッ！！」（ハートが飛びまくっている）

ケロ「……要するにただの慢性的浮気性プラスアルファでストーリーカ

ーの気アリってことかいな」

コン「あぁーっ、ゴホン！ と、とりあえずだな。さくらちゃんのアニキは子どもの頃から幽霊が見えてたし、実際に死んだ母ちゃんとも話せているッ！（単行本第1巻参照）」

ケロ「桃矢兄ちゃんのことやろ。だから何がおかしいねん」

コン「ところがだ、終盤になってその霊感が、実はアニキ自身の持っていた魔力が源になっていることが判明したんだッ！！（第9巻参照）」

ケロ「だからそれがどう——ハッ!?」

コン「ようやく気付いたな。いいか、さっきのテメエの説明だと”幽霊が見える”力である灵力と、魔力は基本無関係ってことになる。だが！ それだとこの”霊感と魔力が直結していた”さくらちゃんのアニキのケースと完全に矛盾する!!」

ケロ「——た、確かに」

コン「極め付けに、同じく魔力を持ってた……えーと、なんだ。ナントカの生まれ変わりの黒髪眼鏡も、幽霊になったさくらちゃんの母ちゃんが見えているシーンが描かれている！（第9巻参照）」

ケロ「……クロウの生まれ変わりのエリオルのことやろうけど随分いい加減な記憶力やな」

コン「さーらーに！ その後、魔力をもらったさくらちゃんの父ちゃんも母ちゃんの幽霊に会えるようになってる！（第12巻参照）
オイコラ、これはどう説明するってんだ？」

ケロ「ぐう……」

コン「ま、テメエが答えられねえのは予想済みだったぜ。むしろ、この辺はウチのロクデナシみけぺんもどうやって乗り切るか悩みに悩んだハードルの一つだからな」

ケロ「なんかさっきから容赦のない悪口が頭に付きまとう作者やなあ……」

コン「そして、この矛盾をプータローみけぺんがどう辻褃合わせたかをコン様がご教授してやろう！ しかと聞けよ!! その前に、一

個補足説明が必要だな。よう、読者ども。オメーら『整』^{プラス}が何のこ
とか分かるか？」

ケロ「ぷらす？　タスやなくてか？」

コン「整はいわゆる浮遊霊とか言われたりもするが、基本人畜無害
のそこら辺にフヨフヨいる幽霊連中の事だ。これに対して、バケモ
ノみたいな姿をして他の霊や人間を襲うのが、悪霊とも称される虚^{ホロウ}。
この程度の話なら『BLEACH』を読んだことのある奴らはとっ
くに知ってるよな？」

ケロ「ほうほう。つまり、わいらが今まで”幽霊”って呼んでたの
はほとんど整で、そいつらは虚^{ホロウ}の餌にされることもあるっちゅうこ
とやな」

コン「エクセレント！！　そこでだ。この整と虚^{ホロウ}の区別を『CCさ
くら』に当てはめて考えてみるぜ。突然ですが第一問！　さくらち
ゃんのお母さんは整か、虚^{ホロウ}か？　どーっちだ！」

ケロ「は？　えーと……整やろ」

コン「そんじゃ第二問！　さくらちゃんのアニキが子供の頃から見
てたのは！？」

ケロ「まあ……整やろなあ」

コン「正解！……と言ってえとこだが、残念ながら二つの問題には
きちっとした正解はねえんだなコレが。なんせ『CCさくら』は整^{ホロウ}
とか虚^{ホロウ}とかを想定して描かれてなんかいいねーから」

ケロ「そりゃ当たり前やんけ。元々の作者だって違うし」

コン「とりあえず、ここではどっちも整^{プラス}ってことにしておくぜ。次
に！『BLEACH』を読んだグウタラみけぺんが”霊力で出来る
こと”を、独断と偏見で以下の通りまとめた！　とくと見やがれ！」
(ホワイトボードを引っ張り出す)

霊力を持った人間が出来ること

(a) 整^{プラス}が見える、聞こえる、触れる

(b) 虚^{ホロウ}、死神が見える

- (c) 他者の霊圧（居場所や状態など）の察知
- (d) 死神化
- (e) 霊体における戦闘力（鬼道^{きどう}、瞬歩^{しゅんぽ}など）を行使する
- (g) 斬魄刀の始解^{しかい}
- (h) 斬魄刀の卅解^{ばんかい}
- (i) 虚化^{ホロウ化}

ケロ「おおー。なんやよう分からん言葉が散りばめられとるけど、霊力って色んな使い道があんねんなあ。ところで、そのホワイトボードどこに隠してん」

コン「不毛なツツコミが聞こえるがここは華麗にスルーだ。一応ここに並べた内容は、下に行くほど強い霊力を必要とする段階の順にランク付けしてある。ただし、しつこいようだがウチのボンクラみけぺんの独断と偏見だ。原作描いた帯人的^{たいと}には「ちよつと違う」って指摘されても仕方ねえから、その辺は目をつぶってくれよな」

ケロ「ふーん」

コン「ルキア姐さんに出くわす前の一護は（b）のレベルだったが、姐さんの力を受け取ったことで（d）のレベルまで一気にのし上がって、今現在（尸魂界篇終了時点）は（h）から（i）の間辺りまで到達してるってトコか。ただし、必ずしも全ての段階を会得しとかねーと次に進めないってワケじゃねえらしい。現に、井上さんとか色白メガネ（石田）とかは（d）の死神化ができないけど、それより上をいく（e）の戦闘力の行使をとくにクリアしてるからな！」

ケロ「……ほー」

コン「それで……ええと、なんだ。くそつ、適任がいらないからってこんな小難しい話をオレにさせるなってんだ！ それから、『昏き翼』の中のさくらちゃんかというと、今は（b）のレベルの霊力を持つちゃってるんだな。死神化する前からただでさえ霊力強かったっていう一護もこのレベルにいたっていうから、すでにそこに達し

てるとなると確かに普通じゃない。あのゲタ帽子達が首をひねって
も当然だろう？」

ケロ「……へー」

コン「でもって！ 問題のさくらちゃんのアニキ他もろもろがどう
かつつー話だ。こいつらが見ていた霊は、さっき話した通り整であ
る可能性が高い。こいつらを霊力のレベルで言う（a）に当たる。
しかし、”霊が見える力”——便宜上、”靈感”って呼んで区別し
とくか。こいつらの”靈感”が（a）レベルの霊力によるものだとし
たら、魔力がなくなったりしても、”靈感”を失って整が見えな
くなるはずはない。魔力と霊力が独立し合っている以上、魔力がス
ツカラカンでも霊力だけは取り残されてるはずだからだ。ここまで
はいいよな？」

ケロ「……うーん」

コン「だが、実際さくらちゃんのアニキは魔力が無くなると同時に
整が見えなくなったし、逆に父ちゃんは魔力をもらうと同時に整が
見えるようになった。こいつらの場合、魔力と”靈感”は直結して
る——あるいは同じものって見なすのが自然だ」

ケロ「………」

コン「フヌケみけぺんは、脳味噌から無い知恵を絞りに絞って考え
たんだぜ……この矛盾をどうやって解消すれば、妙な所で凝り性な
自分自身も読者もすんなり納得してくれるのか——

そしてエ！ ひらめいた！ この食い違いを解決できる素晴らし
い独自解釈を……」

ケロ「……ぐー」

コン「テメエら！ 耳の穴かっぽじってよく聞け！ その解釈は——
——ってオイイ！？」

ケロ「……zzz」

コン「このヤロ……人が慣れねえ長ったらしい解説講座の教鞭をと
ってるっつーのに番組最中に寝コケやがって！」

ケロ「……くかー」

コン「——起きろってんだゴルアアア!!」(容赦ない踵落とし)
ケロ「ッ!!!」(スタジオに用意されてた机に沈没。失神)
コン「ったく、しょうがねえ。先進めるぞ、さっさと終わらせてこ
んなグダグダプログラムから可及的速やかにオサラバしてやらア!」
カンペ(机弁償してから帰って下さいね)

コン「シャラアッ!」いいか改めてよく聞け!ズボラみけ
ぺんが最終的に辿り着いた結論について説明してやるぜ!みけぺ
んは改めて、霊力と魔力の位置づけについて考え直し、『昏き翼』
の中で通用させるために自分なりにそれぞれの力の定義や性質って
ヤツを決めたんだ。それが——コイツだぁッ!!」(ホワイトボー
ドを裏返す)

霊力の定義・性質

(ア) 霊的なもの(整、虚、死神など)を感知できる力。
プラス ホロウ

(イ) (e)の戦闘力の源となるもの。

(ウ) 基本的に、強かれ弱かれ全ての生物が宿しており、互いに影
響し合う傾向が見られる。

魔力の定義・性質

(エ) 魔法を行使するための素質と、その源となるもの。

(オ) ある程度この力を有していれば、霊力が微弱でも(a)と同
等の”霊感”が身に付く場合がある。

(カ) 霊力と違い、この力を生まれながらに宿し成長させる才のあ
る者と、そうでない者との個人差が明確。

コン「そう!見て分かる通り、さくらちゃんのアニキや父ちゃん
の、整が見えるという”霊感”は霊力によるものではなく、魔力の
性質の一つってことにしたんだ!どうだ、あのウスノロみけぺん
にしちゃあよく出来た発想の転換だろブおアッ!」(引っぱたか
れて壁に激突)

ケロ「——どや！ 必殺・大阪名物ハリセンチョップ改^{カイ}の切れ味は！！ 人の安眠妨げた罰や！！」（失神から回復）

コン「……ぼはッ！（めりこんでた壁から復帰）テメエエエエエ！！ 許さん今度という今度は許さアアアん！！」

カンペ（壁の弁償も後ほどよろしくお願いします）

ケロコン「うっとーしいッ！！」

カンペ（それとも、マカロンとブロマイドをお預けにして相殺ってことにしようか）

ケロコン「ごめんなさ——いッ！！」（土下座）

（しばしお待ちください）

ケロ「ふあふ…（あくび）。で、わいが寝てる間に話はどこまで進んだんねや？」

コン「ほっとんど終盤じゃイ！！」

ケロ「（ホワイトボード眺めて）おー、なるほど。こういう感じでまとめたんやな。若干こじつけ感は漂っとるけど、そこそこ納得できるかもしれんなあ」

コン「シカトすんじゃねエエ！！」

ケロ「せやけど、そうするとこれも矛盾が出てくると違うか？

さくらは以前の桃矢にーちゃん以上の魔力を持ってたのに、なんで桃矢にーちゃんと同じような”靈感”を持っておらんかったんや？

魔力の方の（オ）と食い違っとるやんか」

コン「テメー人の話を聞きやがれ！ でもってマブタを極限まで見開いてよく文章読み直しやがれ！！（オ）の最後に『身に付く場合がある』って書いてあんだろーがア！！ つまりは魔力持ったりや100%”灵感”が付くワケじゃねーんだよッ！ 本当に”灵感”も付くかどうかは個人差があって、さくらちゃんの場合は魔力がハンパなかったけど（オ）だけ身に付く素質を持って生まれなかっただけだッ！！ 以上証明終了！ 分かったかオラァ！！」

ケロ「ははあ、そういうことかいな。ふむふむ」

コン「ちなみにッ！ 念を押しとくが、この設定と解釈はグズみけぺんが自分なりに編み出した独自のモンだッ！ それも基本『昏き翼』の作中限定！ 決して『BLEACH』や『CCさくら』の原作公式設定と合致してるとは限らねえってことをよく頭に叩き込んでおけェ！！」

ケロ「ま、とりあえずは霊力と魔力の位置づけとか矛盾は解消されたか。一件落着ちゅうこっちゃ。

—— じゃ？これでみんなも納得して、小説の続き読んでいけるやろ」

コン「テメーは仕事の三分の一以上オレに押し付けただけだろうが
アアアア！！ 今回はブロマイドに免じてこの黄金の御御足おみあしを収め
といてやるが、次こそは覚悟しとけよ！」

カンペ（すいません、そろそろシメでヨロシク）

コン「おおおう！？ もうそんな時間かよ……あっちゅう間だなホントによ。ていうか大した話できてねーだろ、読者の連中そろって不満たらたらだぜきつと」

ケロ「そんなら、その不満を聞かせてもらえばええねん。パソコンや携帯電話の前のみんな、この小説に対して何か疑問や質問があったら遠慮なく言ってもらおか。感想欄に直接書き込んでもええけど、それだとみけぺんが返信で答えてしても、こっちの放送と内容がかぶってしまうからな。みけぺん宛にメッセージでこっそり応募をおススメするで！ その時には、メッセージの件名でも本文にでも、この番組宛ての内容やって事をはっきり書いておくように。あと、名前出すのが恥ずかしかったら匿名希望とか、自分でペンネームとか添えてもらえると助かるわ」

コン「質問のジャンルは基本的になんでもオツケーだ！ オリキヤラ含めた登場人物のこと、能力のこと、ついでにネボスケみけぺん

についてもツツコミ大歓迎、容赦なく締め上げてくれ！　あとはこの番組の中でやってほしいミニコーナーのアイディアなんかがあれば採用されるかもしれないぜ！？　あえて言うなら『BLEACH』原作に載ってる『ラジコン』で取り上げた質問なんかを見本にしてくれるとやりやすいかもな」

ケロ「それじゃあ今日はここまでや！」

コン「くっ：『ラジコン』でいつもトラウマを刻み込まれるかたわら断末魔の悲鳴上げながら終わってたせいか、何事もなく終わるのが逆にシツクリこねえ……」

ケロ「またの放送楽しみにしといてや。ほななー！！」

コン「次回もトばすぜ！　グッナイベイビー！！」

エンディングBGM…広瀬香美「Catch You Catch Me」

♪会いたいな　会えないな　切ないな　この気持ち♪

～収録終了後～

ケロコン「——なんじゃこりゃあああああッ！！」

ケロ「これのどこがマカロンやねん……どー見たってマカロニやないか——ッ！！　しかも生で食べへんし！？　ていうかシャレにしても面白くないしこんな三日分もいらんがな！！」　（バリバリバリ）↑マカロニを踏み潰す音

コン「『ルキアのブロマイド』……クックック、確かにな。だが、ルキアはルキアでも、某精密機器会社製の腕時計のLUKIA^{ルキア}の写

真を渡されても意味ないんじゃない？（びりびりびり）
↑写真を破り捨てる音

カンペ（ちなみに、このコーナーがあまりウケなかったり作者Mが
ネタ切れしたり飽きたりしたら容赦なく打ち切りになりますんで。

第二回も気分次第で、あるかどうか分からないのでその辺よろしく）

ケロコン 「なんという悪質ボッタクリ詐欺！！？」

終わっとけ。

特別編でお送りしてみました。いかがでしたでしょうか。

ケロちゃんとかンで組ませてお遊び企画っていうアイディアは初稿版から温めてたけど、なんとなく出し損ねてました。

最初は、今日の内容である魔力と霊力についての解説を普通に書いてたんですが、

「なんか堅苦しいなー、読む方も飽きちゃいそうだなー……じゃ、こいつらに説明してもらっちゃえば面白くなるんじゃないか？」

と思いついて、突発的にこの企画を立ち上げることに……。

いや、勢いに任せるって怖いですね。やってみたはいいけどこの後どうすんだお前って感じです。でも意外と楽しかったです。本人たちの不満は置いて。

というわけで、もしよろしければ『おまかせ☆KEROKON STATION!!』宛てのメッセージ等々お待ちしてます。

感想欄にて書く場合は、本文中に「KEROKONで答えてほしい」とか、一言添えるようにお願いいたします。

あくまで(仮)なんで単発で終わる可能性も大です。

適度な量の質問が集まったら、再度ぬいぐるみコンビ(失礼)に収録頼んで一気に答えていく予定です。

お付き合ひありがとうございました。お口直しに、こちらのイメー
ジイラストなんてどうぞ。

> i 1 6 3 6 3 — 5 4 3 <

Opus EIGHT

冷え切った夜気の降りた路地を、死覇装姿の一護と井上、夜一が並んで歩いている。

不意に、一護は「はぁー」と疲労の色濃い溜息を吐いた。

「なんじゃ、もうへばっておるのか。修行が足りんのう」

「……うるせえ」

すかさず夜一がからかったが、まともに言い返す気力もないらしい。井上が顔を覗き込んで、「大丈夫？」と案じた。

「大丈夫っちゃ、大丈夫だけど……なんつーかも、色々ありすぎてついていけねえよ」

歩調は変わらないまま、がつくりと項垂れた。

今まで死神や虚や尸魂界のことだけで、すでに手一杯だったのだ。
ホロウ ソウル・ソサエティ

そこへさらに魔法やら何やら知らなかった要素が追加され許容量が限界に迫り、精神的に参っているのだろう。

一護の場合、それだけではないというのも事実だが。

「……なんで浦原さんは、あいつら送ってくの止めたんだよ」

不満じみた疑問を口にする、井上と夜一の視線が一護の方へ向けられる。

「さくら……って子の方は、考えなくても分かりきってる。それだけじゃなくて、他の二人も狙われる可能性があるんだろ」

一護が言うことは正論だ。

突然目覚めたとはいえ、さくらと同じように死神が見えるレベルの霊力を宿したとなれば、小狼と知世も、虚ホロウにとっては恰好の餌食である。

そんな三人が街中で集まって無防備に歩くということは、虚ホロウに「襲ってください」と触れ回ると同義。浦原も当然承知していただろう。

にもかかわらず、浦原はあえて一護とは別行動で帰らせることを選んだ。今に始まったことではないが、あの男の考えることはさっぱり分からない。

「仕方あるまい……本人たちが要らぬと言っておるのだ。無闇についていても、余計に空気が悪くなるだけじゃ」

夜一が言ったが、一護の表情は晴れなかった。

「さくらを送る」と豪語していた、小狼という少年の顔を思い出す。いきなり敵意剥き出しで迫られたが、さくらの弁解で少しは信用してもらえたかと思っていた。しかしそれは全くの間違いで、まるで嫌がらせのように睨まれたり、せっかくの申し出を拒否されたりで散々だった。

「……俺、あの小狼って奴に、なんか気悪くするようなことしたか？」

考えても答えの出ない問いを口にする、と、「そんな単純なことではないのじゃろう」と夜一が呟いた。

「何だよ、単純じゃないって」

含みのある科白に、即座に問い返す。夜一はこのこと歩きながら、ちらりと一護の顔を見て、すぐに「はーっ」と呆れたように溜息を吐いた。

「やれやれ……おぬしも本当にニブい奴じゃのう」

「にぶっ……!？」　な、何なんだよ。何が言いたいんだよ夜一さん！」

「多分、あの李くんって子……黒崎くんに妬いてるんじゃないかな」訳の分からないまま勝手な感想を述べている夜一に問い質し、井上が代わりに答えた。その言葉に、一護は眉をひそめる。

「妬く？　俺に？　なんで？」

「それは男の方がよく分かるのではないかの」
尋ねると、また夜一から逆に問い返される。一護はますます頭がこんがらがって、難しい顔を浮かべた。仕方なく、小狼の言動を思い起こしてみる。

一護をどこまでも警戒し、気を許そうとしない、あの態度。

だがそれは、さくらの行方が分からず、心の底から心配していたからで――

そういえば、彼が激昂したのもさくらに近付こうとした時だったよ
うな――

「……………あ」

一護は思わず声を漏らしていた。

――ひょっとしてアイツ、さくらのことが……………？

思い当たった瞬間、意味もなく急に顔が火照ってきた。一護の変化に気付き、夜一が「やっと分かったか」と呟く。

「くれぐれも、不要な世話は焼くでないぞ。本人が気持ちを整理して、けじめをつけねばならんからな」

「……………わ、分かったよ」

諭すような夜一に、何故か気恥ずかしそうに頬を掻きながら返事をする一護。

それを見て、井上がくすりと微笑んだ。

シングス
Things You Can Do Now
ユー キャン ドウ ナウ

― 日常の歯車 ―

暖かな電気の光が漏れる、二階建てのレトロな一軒家。表の門には『KINOMOTO』と刻印された表札が掲げられている。

その前に立っているのは、さくらと知世、小狼の三人だ。ケルベロスはさくらの肩口に乗っかっていた。

「……それじゃ」

浦原商店からここまで、どんなに話しかけても無言を通していた小狼がそれだけ言い、さくらの前でくると踵を返した。

家まで送り届けるという役目を終えたからには、さっさと帰宅する以外にない。

小狼は、どこか心配そうな顔をしている知世の横を素通りしようとする。だが、

「待って、小狼君！」

さくらが呼びかけると、小狼はぴたりと足を止め、顔だけを振り向かせた。

「あの……今日は、探しに来てくれてほんとにありがとう」

表情の硬い小狼を氣遣うように、さくらは懸命に言葉を選ぶ。そして、できる限り、自然な笑顔を浮かべてみせる。

「また、何かあったら……ちゃんと知らせるから」

ずっと以前に交した約束を今でも守り続けようとしているさくらに、小狼はほんの少しだけ気持ちがあがった気がした。

さくらと同じように、自分もできる限りの自然な笑顔を作って、「ああ」と頷く。

「じゃあ、また明日」

「また明日……」

「知世ちゃんも、またね」

「はい。今夜はゆっくりお休みになってくださいね」

「うん」

さくらは二人に軽く手を振りながら門を開け、玄関のドアへと行き、家の中に消えた。ケルベロスも「またなー」と申し訳程度に手を振っていた。

ぱたん、と音を立てて玄関の扉が閉まる。直後、小狼が小さく溜息を吐いて、再び歩き出した。

知世が慌てて追いかけて、横に並んで、夜道をゆっくりと進んでいく。知世は浦原商店を出た後、家に電話をして、小狼の暮らしているマ

ンションの前で迎えに来てもらう手筈となっていた。

さくらは当然のこと、同じ女の子である知世も単独で帰すわけには
いかない。考えた結果、先にさくらを送ってから、知世が小狼の帰
り道に付き合い、マンションに着いてから車で家に戻るといいう形に
なったのである。

——ただし、知世がこうすることを選んだのには、他に理由があっ
た。

「悔しいんですね」

不意に、知世が言った。無意識に俯いていた小狼は顔を上げ、横に
並んだ知世を見る。

知世は労るような優しい微笑みを浮かべて、言葉を続けた。

「本当は李君がさくらちゃんをお守りしたかったのに、黒崎さんに
先を越されてしまったから」

自分の心を覗き込んだかのような指摘に、息を吞まずにはいられな
かった。

胸の内で、抑え込んでいた後ろめたさが急速に膨れ上がり、小狼は
いたたまれなくなつて、知世の顔から視線を外した。

知世は何も言わない。ただ、横顔へ視線が真っ直ぐに注がれている
のが分かる。

小狼は観念したように、言葉を紡いだ。

「……さくらが無事でいてくれたのは、本当によかったと思ってる。
でも——」

言いかけて、口を噤む。このまま続けてしまうと、取り返しのつか
ないようなことまで吐露してしまいそうな気がした。

さくらを守れなかった。——助けられなかった。

その思いが、小狼の心に重くのしかかっていた。

虚というものに襲われたとき、さくらの携帯電話が小狼に繋がった
のはあくまで偶然だったらしい。しかし、さくらが他ならぬ小狼に
助けたことに変わりはない。

なのに、その時自身はのうのとシャワーを浴び、そばに駆け付けることもできなかったのだ。

不甲斐ないと言う以外に、どう表現しろというのか。

小狼が許せないのは、それだけではなかった。

自分の代わりにさくらを助けた、あの黒崎一護という死神。

浦原商店に入ったときから、ずっとさくらのそばに付いていた一護の姿に、小狼は何故か息苦しさを覚えた。

自分以外の人間がさくらを助けた。自分以外の人間にさくらが心を許している。

その光景に途方もない苛立ちが募り、胸の奥をきりきりと締め付けられた。紛れもない、嫉妬だ。

一護に他意はなく、「虚に襲われた人間を助ける」^{ホロウ}という役目を果たしただけ、ということとは理解している。

それでも、さくらを守りたいという自分の願いを横取りされたような気がして、あんな無愛想な態度をとってしまった。

思い返すと、後悔ばかりが押し寄せる。無力な上に、浅ましいことこの上ない。

しかも、さくらはこれからも狙われる可能性があるという。今日と同じような状況に陥ったとき、さくらを守り続けることができるのかどうか、不安で仕方なかった。

——こんなおれに、何ができるんだ。

諦めにも似た疑問が、小狼の頭の中をぐるぐると回っていた。

「李君」

知世が、そっと呼びかける。小狼は知世の顔を見ることができなかった。

それを承知の上で、穏やかな声が話し続ける。

「焦りは禁物ですわ。たとえば黒崎さんでも、限界というものがあるでしょうから……さくらちゃん一人だけを完全に守りきることはできないでしょう。李君はそんなとき、さくらちゃんのそばにいてあ

げてください」

「……けど、おれは」

「もし、少しでも力になりたいのであれば、今自分にできるのは何なのか、それを見つけるのが一番の近道です」

知世の言うことは正しい。

だが、小狼は素直に受け入れる気にもなれず、黙りこくってしまう。すると、不意に知世がくすりと笑い声を漏らすのが聞こえた。

「大丈夫。さくらちゃんが一番は、いつでも李君だけですから」

小狼は知世の科白を聞き流そうとしたが、それが意味する所を察して、ぼっ、と赤面した。

「んなっ……そ、おっ、おれはそんな……！」

慌てふためいた拍子に、小狼は今まで見ることでできなかった知世の方を思わず向いてしまう。予想通り、知世はにこにこ楽しげな笑顔を浮かべていた。

確かに今日のこと、さくらが一護に何か特別な感情を抱いてしまったのではないかと疑ったことは否定できない。しかしほんの一瞬のことだ。自分で言うのもどうかとは思いますが、さくらはそう簡単に心変わりするような人間ではない。

真っ赤になっている小狼の顔を眺めながら、知世が優しく語りかける。

「何かあれば、また言って下さいな。さくらちゃんや李君のように魔法は使えませんが、お二人がいつでも笑顔でいられるように努めるのが、今、私にできることですから」

知世の言葉に目を見開く。

——そうか……大道寺は、ちゃんと分かってるんだ。自分がどうしたらいいのか。

小狼は思った。

知世は自分のように魔力を持っていない。かといって、一護のように死神であるとか、何か特殊な立場というわけでもない。知世自身、それを誰よりも自覚している。ひょっとしたら、今の自分以上に無

力だと感じた経験すらあるかもしれない。

それでも、知世は落ち込んだりしない。自分の限界を知っている――だからこそ、自分にできる精一杯のことを、誰よりも真摯に、冷静に、考えることができるのだ。

「……李君、着きましたわ」

気付かないうちに俯いていたらしく、知世の声でハッと顔を上げる。目の前には、自分が住んでいるマンションが佇んでいた。入り口に、何度か目にしたことのある、夜に溶けるような暗色のリムジンが横付けされている。後部座席のドアが開いていて、黒いスーツをびちりと着こなしたサングラスの女性――知世専属のボディガードだ――の姿があった。

知世は「では、私は行きますね」と言って、リムジンの方へ小走りに寄って行った。ボディガードの女性と二言三言会話を交すと、開いていたドアから車に乗り込む。そして、ドアが閉められる寸前に、「李君、また明日!」

と手を振った。小狼は「ああ」とだけ呟き、軽く手を振り返した。ばたん、とドアが閉じられ、ボディガードの女性が運転席へと乗り込む。すでにエンジンがかけてあったらしく、車体は滑らかな軌跡を描いてマンションの前から走り去った。

取り残された小狼は、しばらくその場に立ち尽くす。

何気なく夜空を見上げ、今日何度目か分からない溜息を吐いた。しかしそれは、今までの憂鬱や苛立ちといったものとは別の意味の溜息だった。

「今、自分にできること……」

知世の言葉を繰り返し、小狼は静かに目を閉じた。

さくらの笑顔。知世の助言。

一護の顔。浦原の警告――

今日見たもの、聞いたものを、反芻していく。

ゆっくりと目を開き、真っ直ぐに前を見据えて、マンションの中へと入った。

月が沈み、入れ替わるようにして、日が昇る。
濃紺の夜空は、明るい青色に塗り替えられ、新しい一日が始まる。

いつもより少し早く登校した一護は、朝のホームルームが始まるのを座って待っていた。

「……はあ」

頬杖を突きながら溜息を吐く。

あれから井上をアパートに送って家に帰り、珍しく大人しくしていたコンを体から追い出して死神化状態から戻った。そのままベッドに入って眠ろうとしたが、どうにも寝付きが悪く、おかげで今朝もすぐに目が覚めてしまったのだ。

「……魔法か……」

自分にしか聞こえないくらいの小さな声で、ぽつりと呟く。

——まさか、本当にそんなものがこの世に存在するとは思わなかった。だが、実際に目の当たりにしたからには、信じるしかないのだろう。

一護は昨晚見せつけられた、杖へと変わった星の鍵や、生き物のように操られる炎を思い起こした。

あれが、魔法。

今思うと、とても幻想的な光景だったと感じる。

自分たち死神の斬魄刀のように力任せなものではない。周りにあるものと共鳴し、その力を借りる。上手く言えないが、そんな感覚だ。考えてみれば、子供の頃から幽霊を当たり前に見てきた自分が、今更「魔法を信じられない」と言うのもおかしい話かもしれない。

「……はあ」

——けどなあ、実際にそれに出くわして平然としてるなんて無理な話もいいとこだよな。

心の中でぶつぶつと言っていた時だった。

「イ——チゴお——うッ!!」

どどどどどど、という騒がしい足音が近付いてきて、一護は無言で机の横に引っ掛けていた鞆を手に取り、頭の脇へと掲げる。

途端、「おブッ!」という声と共に、廊下から駆け込んできた啓吾が鞆へ顔面を勢いよく衝突させた。ちょうど車のエアバッグに顔を埋めるような形で。

「おっす、ケイゴ」

「おう、一護……一日の始まりがカバンとの口付けとは刺激的だ……!!」

べりっ、と音がしそうな動作で顔を引き剥がして、啓吾が言った。その背後から「おはよう、一護」と軽く手を挙げて水色が歩いてきた。

「ああ、水色。おっす」

「どうしたの、一護? 珍しいじゃない」

「そうだよ、どーしたんだよこんなに早々と学校へ来やがって!」『もういつ先生が入ってきても準備バンタン♪』とでも言うかのような今の姿勢! 優等生とは程遠い見た目をしたお前には到底似合わないと思ったらありゃしない!」

「えーと……僕が『珍しい』って言ったのは、一護が迫ってくる啓吾を肘鉄とか膝蹴りとか、実力行使で迎えないで済ませたことなんだけど」

「おおそーかそーか……って何だソレ!? なに、水色はオレがいつものように一護に暴力振るわれてる方がいいって言うのか!!」

「……ケイゴ……あんまり人の脇でギャーギャー喚いてると、今度こそ本気で殴り飛ばすぞ……」

しれっとした顔で残酷なことを言う水色へブーイングを訴えた啓吾に、元からローテンションの低い声へさらにドスを利かせた一護の科白が投げかけられる。

啓吾がその言葉に「ひィ!」と息を吞んで、慌てて自分の席へと逃

げた。

そして「なんだよう一護の奴いつもに増して冷たくなりやがってオレが何したって言うんだよぉ」などと小さな声で嘆き始める。そんな啓吾を水色が仕方なく慰めていた。

また「はあー」と溜息が一護の口を突いて出る。

「どうかしたか？」

馴染みのある声に、一護は顔を上げた。目の前に立っていたのは茶渡。今日も鉢合わせたらしく、後ろには石田もいる。

「ああ、いや。ちよつとな」と適当に誤魔化すと、今度は背後から「おはよー！」と元気のいい声がした。

見ると、井上がぱたぱたと小走りで駆け寄ってくる。一護の席の傍まで一直線に向かうと、

「黒崎くん、おはよう！ 茶渡くんと石田くんも！」

と真っ先に挨拶。

「ああ、おっす井上」

「……ム」

「おはよう、井上さん」

三人三様に返事をする、井上は心から嬉しそうな笑顔を浮かべる。ところが、すぐに何か思い出したように「あ」と声を上げた。

「黒崎くん、あの後さくらちゃんから連絡とかあった？」

「えっ？ あ……いや、何も。代行証も鳴ってねえし」

突然の質問に、一護がうろたえながらも答えると、茶渡と石田が妙な顔をする。

「何の話をしてるんだ？ 黒崎」

石田が詰め寄ってきたので、一護は少しばつが悪そうな表情を滲ませた。茶渡は何も言わないが、前髪から覗く目が「事情を知りたい」と強く訴えている。

一護は、ちらりと井上の方を見た。

視線に気付くと、井上は少し考えるような様子を見せてから、黙って頷く。

一護も頷き返すと、軽く手招きして茶渡と石田を呼び寄せた。二人はそれに従って、一護の方へと顔を寄せる。

頭を掻きながら、一護はごく小さな声で、話し始めた。

「あのな。お前らにも一応話しとくけど、実は昨日の夜……」

きーんこーんかーんこーん。

これから、という所で割り込んできたチャイムの音に、一護は思いきりずっこけた。

あまりにもあまりなタイミングの悪さ。誰かが仕掛けたのではないかと疑いすらしそうだ。

「……ホームルーム、始まるな」

茶渡が呟いたそばから、越智が教室に入ってきて「席に着けー!」

と声を上げる。話を見事なまでに挫かれた一護は、額を押さえて「ちつくしよ……」と悪態を吐くしかなかった。

一護の話の続きが気になる石田や茶渡だったが、仕方なく越智の言葉に従って席へ座っていく。井上も同様だ。

一護はまた溜息を吐くと、

『昼休みに話す』

と唇だけを動かして石田と茶渡に伝える。二人は無言で頷き返した。

一護の気持ちをよそに、日常の歯車は何の変哲もなく、回っていく。

朝陽の零れる青葉の下で、小狼は憂鬱としか言いようのない顔で立ち尽くしていた。

小狼は無言で腕時計を見る。もうすぐさくらとの待ち合わせの時間だ。

「……はあ」

思わず、溜息が出た。

昨晩の態度に対する凄まじい後悔の念が湧いてきたのは、今朝目が覚めてからのことだ。

無論、浦原商店を出てからもそういう気持ちに染まっていたことは確かだが、何時間も経った朝になって、その重みが一気に膨れ上がり、おかげで目覚めは最悪だった。

登校の準備を整えてマンションを出て行き、今立っている待ち合わせ場所へ向かうにつれて、ある悩みが小狼の中で頭をもたげた。

——どんな顔をして、さくらと会えばいいんだ……！

気付いた途端、進む足が急に重くなった。

あくまで一護に対してではあったが、あんな態度を見せて、さくらは幻滅していいだろうか？

せっかく今までうまく付き合えていたのに、今日から振り出しに戻ってしまったかのように、ぎこちなく接するしかないのだろうか？ 考えれば考えるほど、思考は悪い方へと向かっていく。

知世の言葉を思い出して、これではダメだと何度も言い聞かせてはみたが、不安は拭いきれない。

ただ溜息ばかりが口から漏れた。

見たばかりの腕時計の文字盤を、再び確かめる。大して時間が進んでいないと分かって、また溜息が出た。

「おはよう、小狼君！」

「わあっ！！」

いきなり背後から掛けられた声に、小狼は飛び上がった。

振り向くと、きっちり制服を着たさくらの姿。小狼の過剰反応で逆に驚かされたらしく、表情が固まっている。

「ご、ごめんなさい……びっくりさせちゃった？」

「あ、いや……ちょっと、気配に気付かなかったただけだ。大声出してごめん……」

ばくばくと暴れている心臓の辺りを押さえながら、戸惑った顔をしているさくらに答えた。

そこで、はた、と二人の視線が重なる。

さくらに不思議そうな顔で首を傾げられて、小狼は思わず視線を逸らしてしまった。まともに目を合わせることができない。

沈黙が苦しくて、小狼は詰まりそうな声を無理矢理絞り出した。

「……きよ……今日は、来るのが、早かったな」

下手をすると片言かたことになりそうな日本語に焦ったが、さくらは気にした様子もなく「うん」と答えてくる。

「昨日、なんだか眠れなくて。久しぶりに目覚ましが鳴る前に起きたんだけど、そしたらお兄ちゃんに『今日は槍でも降ってくるのか』って言われちゃった」

あははは、という照れくさそうな笑い声。小狼は言葉を返そうとしたが、何と言ったらいいいのか急に分からなくなってしまった。

——いつも、どんな会話をしてたんだっけ？

今更になってそんな疑問が出てきて、情けなさに齒噛みする。

すると、さくらが視界の横から目の前へと自ら移動してきて、小狼は軽くうろたえる。

外したばかりの視線が再び合い、今度は逸らそうにも逸らすことができなくなってしまった。さくらは何も言わず、観察するように小狼の顔を真正面からじーっと見つめてくる。

小狼は目を瞬かせて、自分を凝視しているさくらを黙って見つめ返す。

しばらくして、さくらはふっと困ったような笑みを浮かべた。

「ごめんね。小狼君」

唐突な言葉に、小狼は「え？」と頓狂な声を上げた。

「昨日、ずっとむずかしい顔してたから、ちよっと心配だったの。それでよく考えたらわたし、小狼君にすっごく心配かけて、振り回しちゃったんだなーって思っ……だから、ごめんなさい」

小さく頭を下げたさくらの謝罪に、小狼は呆氣にとられた。

むしろ、謝らなければならぬのは自分の方なのに。今度はさくらに言葉を取られしてしまった。

のしかかっていた情けなさが重みを増して、小狼は拳を強く握り締める。

——いや、他人に先取りされたとか、そういう問題ではない。一番

問題なのは、幼稚なプライドに巻きつかれて手も足も出せずにいる、今の自分自身だ。

こんな自分が、あの一護という死神と対等に立とうなど、おこがましいにもほどがある。

「……ごめん」

小狼はどうか、小さな声でそれだけ詫びた。

「……おれも、お前に余計な心配かけた。本当にごめん」

「ううん、いいの。お互い様だよ。……でも、小狼君もこれから何かあったりしたら、ちゃんと行ってほしいかな」

さくらの純粋な気持ちを聞いて、心が洗われる気がした。小狼は自分から、さくらの顔をしっかりと見て、深く頷く。

気恥ずかしいのを堪えて会話を続けた。

「その……これからは、あまり一人で出歩かないようにしろよ。よければ、おれが付いていくから」

「でも、わたしといったら、ホロウっていうのに襲われるかもしれないんだよ？」

「だからこそだ。できる限りでいい。できる限りでいいから、お前を……守りたいんだ」

言った直後、首元から一気に血が昇っていき、顔が火のように熱くなった。

自分で確かめることはできないが、きっと今この顔はリンゴのように赤くなっていることだろう。

さくらはそんな小狼の動揺も気にせず、とても嬉しそうに微笑んで「ありがとう」と告げた。

礼の言葉に、小狼は少し頑張って、軽く微笑み返す。さくらが手に提げた鞆からくぐもった声が出したのは、その時だった。

「まったく、朝っぱらから仲のええことやなあ」

ぎょつ、と目を見開いて、同時に鞆へ視線を向ける。

すると、鞆がごそそと僅かに揺れ、拍子にぱかりと蓋が開いた。中から顔を出したのは、ケルベロスだった。

「けっ……ケロちゃん!?　なんでそんな所にいるの!？」

「なんでって、決まっとるやないか。さくらのボディガードのためや」

至極当然、という態度で言い切るケルベロスに、さくらと小狼は呆気にとられる。

「……ボディガードって」

「さっき、さくらも自分で言うとしたやろ?　またそのホロロンとかいうやつに襲われるかもしれん、って。せやったら、わいはカードの守護獣として、さくらのことを守らなあかん」

この際、『ホロウ』という固有名詞を相変わらず間違えていることはどうでもいいと思う。

「それで、なんでわたしの鞆にもぐりこむ必要があるの?」

「だーかーら、そいつはいつどこで襲ってくるか分かれへんのやろ。そんなら、常にさくらのそばにいて、ガードをするのが一番安全やと思わんか?」

「それは、そうかもしれないけど」

「ケルベロス……お前まさか、学校まで付いて来るとか言うつもりじゃないだろうな」

引きつった表情で小狼が尋ねると、ケルベロスはきよんとした。

「何言うてんねん。そんなん当たり前やろ」

「当たり前って——誰かに見つかったらどうするつもりだ!」

「そうだよケロちゃん!　学校まで来たら、授業中ずーっと鞆の中にいなきやならないんだよ?　その間、じっとしてられるの!？」

さくらがびしりと指摘すると、ケルベロスは「うっ」と言葉を詰まらせる。

ケルベロスは活動的かつ好奇心旺盛な性格だ。今までにも何度か、勝手にさくらの荷物に紛れ込んで外出に付いていき、あちこちを飛び回って軽い騒動を起こしたという前科がある。

「そ、そんなこともあるかと、ほら!　はやりの携帯ゲーム機・マシンドーT Sも入れてきたんや!　これさえあれば、退屈な授

業中もヒマを持て余さずに済む――」

「うちの学校はゲーム持ち込み禁止なの！」

「大体ゲームなんてやってたら、鞆の中でも音が外に漏れてすぐ見つかるぞ」

なけなしの対策に二人揃って難点を唱えると、ケルベロスはがくりと肩を落とした。

「もう、しょうがないなあ……。今日の帰りに、好きなお菓子買ってあげるから、学校ではおとなしくしててね」

「お菓子！？ よっしゃあ！ ほんなら何時間でも耐えられるでー！！」

好物を目の前にちらつかせた途端、自信満々にガッツポーズをとるケルベロス。小狼は「相変わらずだな」と思い、溜息を吐いた。

さくらや小狼の気持ちをよそに、日常の歯車は何の変哲もなく、回っていく。

T o b e C o n t i n u e d

Opus EIGHT (後書き)

サブタイトル解説から参りませう。

英語タイトルは「今あなたができること」。そのまんまです。

日本語タイトル「日常の歯車」は、普段のさくらや一護の穏やかな日常生活と、深刻な非日常とのギャップを醸し出したくて、こういう言葉を使いました。

一護はかっこいい。今時珍しくかっこよくて、余すことなくファンに好かれている主人公だと思います。

……いや、公式での人気投票の成績では冬獅郎やルキアが首位を占めていたけどそういう意味ではなくてですね。

設定上はまだ15歳なのにどこか達観したところがある。でも15歳っていう若さだからこそ、長い歴史に根ざした護廷十三隊や尸魂界の老獪な理念や体裁に縛られない純粋な一途さがあり、どんなに理屈で無駄を諭されても、物怖じして退いたりしない不屈の強い意志がある。

だから、人としてはまだ幼い所があるであろう小狼は、そんなかっこよくて迷いのない一護に何かしらの対抗心を抱くんじゃないかなーと思って、今回こういう内容に仕上げました。

一応補足しておきますが、さくらとは会って間もない一護をある程度慕ってはいるけど、それはあくまで命の恩人ってポジションであって、それ以上でもそれ以下でもありません。今の所は。

でも、かっちょええイケメン一護とかわいいさくらが並んでいたら、要らん心配もするんじゃないかと。実際は小狼がさくら一筋であるのと同じように、さくらの小狼への想いも揺らいだりはしないでしょうが。

ちなみに、さくらと小狼の係に気付いた一護が照れてるのは、一護は色恋沙汰とかそういう浮いた話に対して免疫がないからです。

夜一さん曰く「初心^{うぶ}」だそうなので。でもって、年下なのに、恋愛というジャンルで二人が自分の一歩も二歩も先を行っている事に対してちょっと悔しいなとか思ってるんです。

終盤に出てきたゲーム機「メンテナンス」は、実際にあるアレをもじった奴です。初稿版執筆当時に発売されたばっかだったのでネタにさせていただきました。もっとましなネーミングはなかったのか……orz

ちなみに、今のご時世だったらWiiかなーとか思ったんですが。ケロちゃんの体格だと、コントローラーやヌンチャク……でしたっけ。アレを振り回すのが結構大変そうなんで、意外と従来のPSシリーズのまんまでいいとかおっしゃりそうですね。

あとは「ゲームのコントローラーは振り回すもなくて、ボタン押しまくるもんや!」とか、ヘンなこだわりを持っていいそうですね。あくまで想像ですけども。

そういう私がどうかというと、ゲームは自分で遊ぶよりも人のプレイを眺めてるのが好きな人種です。せいぜいできるのはぷよぷよぐらいです。ぷよぷよなら俄然勝てる自信あります。他はからっきしだけどね。

Opus NINE

二十四時間営業洋裁店チェーン・ヒマワリソーイング。

空座町にある支店の一つこそが、桃矢と雪兎が現在勤めているバイト先の一つだった。

「難しい顔してるね、とーや」

品出しを終えてレジに戻ってきた桃矢に言うと、辟易したような表情で「そうか？」と聞き返される。

雪兎がにこにこ穏やかに笑ってみせると、桃矢は深い溜息を吐いた。

「……昨日帰ったら、家に誰もいなかったんだよ」

観念したように話し始めた桃矢に、雪兎はきよとした顔をする。

「昨日って……さくらちゃん？ 学校から帰ってなかったの？」

「どうしたのかと思ったら、だいぶ遅くなってから戻ってきやがって」

「何か用事でもあったのかな」

「近くに買い物に行ってたって話したけど、ありや嘘だろうな」

「……どうして？」

「近くに行ってたにしては、買ってきた牛乳がぬるかったんだよ。」

それと、あのぬいぐるみをポケットに隠してたし」

桃矢と雪兎の間で通じる『ぬいぐるみ』は一つしかない。

さくらが日頃から「ただのぬいぐるみだ」と誤魔化している、あのオレンジ色の手の平サイズの生き物——ケルベロスのことだ。桃矢は気付かない振りをしているが、とうの昔に正体は見抜いている。

今更言及する必要がないので、黙って見過ごしているのだった。

「また何かあったんだろ。けど、聞いたってあいつは言わねーだろうし」

腕を組み、カウンターに寄りかかる桃矢。その顔は苦虫を二桁単位

で嘔み潰したかのようだ。

「心配なんだ。さくらちゃんのこと」

くすり、と雪兎が声を漏らす。桃矢は拗ねたように目を逸らして「うるせー」と少々乱暴に返した。

「すみません、会計お願いします」

声が聞こえて、二人は視線を動かす。商品の糸や布が入ったカゴを手を持った、生真面目そうな眼鏡の青年が立っていた。

雪兎が慌てて「いらっしやいませ」と応対し、カゴを受け取って、中に入った商品のバーコードを慣れた手付きで読み取っていく。合計金額を出す間に、脇で桃矢が商品を袋に入れる。

「８７０円になります」

雪兎が値段を告げたそばから、眼鏡の青年は財布から出した小銭を渡す。買いながら計算して、あらかじめ用意しておいたのだろうか、支払いはいびつたり８７０円だった。

レジスターが吐き出すレシートを桃矢が破り取り、袋と一緒に手渡した。

眼鏡の青年は受け取ると、愛想の欠片もない無表情で踵を返し、店の出入口へと向かう。

「ありがとうございます」

店長からの指導通りの挨拶を、桃矢と雪兎は背中に投げかける。青年は外の夕闇の中へと消えていった。

「……あの人、最近よく来るよね」

目の覚めるような白いシャツの背中を見届けながら、雪兎が呟くと、桃矢は黙って首を縦に振った。

「ここの常連だと。店長が言ってた」

桃矢の情報に、雪兎は「そうなんだ」と相槌を返した。ふと、出入口の近くにかけられた時計に目をやる。

「……あ。ごめん、ぼくはそろそろ行かなきゃ」

「ああ。大学のゼミだろ」

「うん。じゃあ、あとは任せるね」

「おう」

会話を交わしながら、桃矢は雪兎が脱いだ店指定のエプロンを受け取った。

Missfortunes Never Come Singly

ミスフォーチュンズ
ネバーカムシングリー
――夕暮れの集い――

「ミシン用の糸と、刺繍針と、フェルトにレース……」

ヒマワリソーイングからの帰り道、石田は歩きながら袋の中身を確かめていく。買い忘れたはないようだ。

「あとは近くで夕飯の材料を買って、帰ればいいか」

かちゃ、とずり落ちた眼鏡を指先で押し上げる。橙色の黄昏の空は、化学実験の試験紙のように、東の端から徐々に暗い夜の闇へと変色し始めていた。

夕陽と同じ暖色へ薄く染め上げられた地面には、足元から長い影法師が伸びている。

「……魔法、か」

石田は一人、小さく呟いた。脳裏で繰り返し再生されるのは、昼休みに一護から聞かされた話だ。

正直言って、内容は信じがたいことこの上なかった。

――おとぎ話だけだと思ってたけど、本当にあつたとは……。

――まあ、能力は失ってるけど、自分も滅却師^{クインシー}なんて肩書き持つてるし、驚くのも筋違いか。

考え込みながら溜息を吐いて、袋を持っていないほうの手をぐつと

握り、それを見つめる。

クインシー

ホロウ

めつきやく

滅却師——文字通り虚を「滅却」する力を持つ者。亡き祖父からその手ほどきを受けた石田は、「最後の滅却師」を自称していた。

ソウル・ソサエティ

しかし、数日前までいた尸魂界で、石田はリスクを承知で自分の能力を極限まで解放し、結果その能力を失ってしまった。

今となっては、並よりも少し霊力が高いくらいしか特徴のない、ただの人間同然である。以前のように虚と真正面から戦うことは無謀

ホロウ

に近い。

「……僕は、何をしたらいいんだろうな」

思わず、自嘲的な笑みと共に弱音が口を突いて出る。すぐに「黒崎の前でこんな事言えないな」と思い直した。

「えーっと……こっちでいいのかな？」

進む先から声がして、石田は顔を上げた。比較的狭い石畳の歩道を、こちらへ向かって歩いてくる人影が三つ。

制服姿の少女が二人と、少年が一人だ。身長からして中学生くらいであろうか、制服は見慣れないデザインをしている。

少女のうち、髪の高い方が手に携帯電話を持っていて、他の二人と一緒にしきりに周りの景色と画面を見比べていた。地図を出してナビでもしているのだろうか。

「ええ、この道を真っ直ぐ進んで……突き当たりを左ですわね」

「……なあ、本当におれも行っているのか？ お前の兄貴はおれのこと……」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんが何か言っても気にしないでいいからね」

「あ、ああ……」

お互いが通れるようにそれとなく道の端を開け、すれ違いざま、他愛のない会話が耳に入ってくる。

学校帰りか、などと考える一方、大して気に留めることもなく歩き続けた。

そして——ぞっ、と背筋を駆け上がった冷たい悪寒に、足を止めた。

「……!？」

強張った顔で振り返ると、数メートル先を、すれ違ったばかりの三人が談笑しながらのんびりと歩いている。どこにでもあるような平和な光景だ。

しかし、それを眺める石田は暑さとは別の冷や汗を流していた。本能が危険を伝え、どっ、どっ、と心臓が早鐘を打ち、氷点下に置かれたかのように体の芯が冷えていく。

談笑する三人の頭上。空気しか存在しない位置の景色が、粘土細工のようにぐにやりと歪む。歪みに誘われるように、ぴきり、と稲妻状の亀裂が走った。

刹那、石田は全速力で駆け出していた。

「伏せろッ!!」

あらん限りの声で叫ぶと、三人が「え?」というような表情で石田の方に振り向く。その声が自分達に放たれていることすら理解していなかったかもしれない。

びきん、と広がった亀裂の穴から、鋭い爪の先が覗いた。それを見たとき、石田はあらゆる躊躇と迷いをかなぐり捨てていた。

呆然と立ち尽くしている三人を抱え込むようにして、できる限り前へと跳ぶ。どさっ!という音と共に、彼らの体は固い歩道の上へ引き倒された。

「痛っ……!!」

呻くような声が聞こえたが、背後で亀裂をこじ開けた異形の腕が伸び、凄まじい音を立てて、今まで三人がいた地面を粉碎した。

「なっ、なに!?!」

少女の一人が困惑した声を上げると、呼応するように、空中に開いた黒い穴からずるずると何かが這い出してくる。

人の何倍もの大きさを伴った胴体。そこに空けられた穴。死んだ魚のように濁った眼差しを覗かせる白い仮面。

ホロウ
「虚か……!!」

石田は小さく舌打ちをした。まさか一般人がいるところへ出現するなど、予想もしなかった。

少々乱暴ではあったが、霊圧に気付いて三人を退避させるのが間に合って良かったと心から思う。あと少し遅ければ、三人は虚の腕に潰ホロウされていたことだろう。

虚の体は、外形だけは人間と同じ二本腕と二本足のつくりだったが、獣のように四肢を地面に付けて胴体を支えている。背中には、鯨の背びれを思わせる突起が顔を出していた。
虚ホロウが、じろ、と石田たちの方を見やる。

「なっ……何だ？ あれは！」

少年が発した言葉に目を見開いた。三人を軽く観察してみると、視線は一樣に虚ホロウの方へと向けられている。

——虚ホロウが見えている……。霊力を持っているのか？ だとしたら……思考をフル回転させる石田の首筋を、一滴の汗が、つうつと滑り落ちた。

——だとしたら、あの虚ホロウは、彼らを狙った可能性が高い。なんとかしないと……。！
覚悟を決めるように、ぐつ、と軽く歯を食いしばってから、口を開いた。

「君たち、立てるか？」

早口で捲くし立てるように聞くと、三人は一瞬呆氣に取られたように動作を止める。ショートカットの少女が「は、はい」と慌てて返事をした。

「それなら、何も考えずに走って逃げるんだ。今すぐに」

立ち上がりながら、石田は有無を言わさない口調で命じるように言い放った。少女が驚いて「でも、あなたは……！？」と言いかけるが、

「いいから早く！！」
遮るようにして怒鳴りつけた。かたわらで、虚ホロウが大きく咆哮を上げる。

その咆哮に圧倒され、ようやく自分達が置かれた状況を悟ったのか、三人は素早く立ち上がり、慌てて駆け出していった。

ショートカットの少女は少年に腕を引っ張られ、無理矢理連れて行かれる形となっていたが。

——これでいい。

遠ざかっていく三人の背を見届けると、ホロウ虚を睨み付けた。

クインシー滅却師の能力を殆ど失くしている今、他人を庇いながら戦うことは自殺行為だ。今はホロウ虚を追い返すことに集中するしかない。

ホロウ虚が再び吼え、片腕に唸りを付けて振り下ろした。石田は横へ跳んで躲す。砕けた石畳の細かい破片が降り注ぐのを感じながら、懷に手を入れ、カメラのフィルムケースよりも一回り小さな金属の筒を取り出す。

適当な個数だけ出したそれらをホロウ虚に投げつけると、十字を作るように両腕を垂直に組んだ。

「レンゼ・フォルメル・ヴェント・イ・グラール大気の戦陣を杯に受けよ——『ハイゼン聖噬』!!」

独特の響きを持った口上が空気を貫く。自由落下していた筒が強い光を帯び、重力に逆らうようにして浮き上がり、薄い光の壁に覆われた直方体を形成する。

直方体に囲まれた領域にあったホロウ虚の片腕が、光で蒸発させられるように消し飛んだ。

肩にぶら下がった腕の残骸から血が噴き出し、バランスを崩して地面に突っ伏したホロウ虚が耳障りな悲鳴を上げる。着地をしながら確認して、「よし」と拳を握った。

クインシー滅却師の武器の一つ、ぎんどう銀筒。特殊な靈化金属でできた筒にあらかじめ自分の靈力を溜めておき、特定の口上を述べることで術を発動させる道具だ。

威力自体は大したことはないが、応用が利くので、うまく使いこなせば並程度のホロウ虚とも対等に戦える。

石田の中に余裕が生まれた瞬間、

「——きゃあっ!!!」

背後から聞こえた悲鳴に、視線を動かした。

見ると、走り去ったはずの三人が立ち往生している。理由は、彼ら

の前に刻まれた亀裂から顔を出している、白い仮面の異形だった。

「もう一匹いたのか……！」

予想外のことに舌打ちし、急いで駆け寄ろうとする。だが、踏み出そうとした足を強く引つ張られ、なす術もなく前へつんのめった。視線を落とすと、足首に太い触手のような物がぐるりと巻き付いていた。石田が相手をしていた虚ホロウの背びれが粘土のごとく長く引き伸ばされている。

「くそっ！」

再び銀筒を取り出すが、投げる前に触手の表面がごぼごぼと蠢き、植物の蔓のように何本も枝分かれし始める。目を瞠る間もなく、分かれた触手が石田の腕と体を素早く捕らえた。

虚ホロウが、にいつ、と口元を歪めた気がした。

「――下がれ！」

呼び出した剣を構える小狼の言葉に従い、知世とさくらが数歩下がる。

小狼は指に挟んだ呪符を宙に放ると、すぐさま剣の刀身を押し当てた。

「雷帝招来らいでいしやうらい!!！」

呪符から金色の稲妻が迸り、亀裂から顔を出した髑髏の仮面を撃つ。異形――恐らく、例の『虚ホロウ』というものだろう――は甲高い声を上げ、雷撃で焼けて煙を昇らせる自分の顔を手で覆いながらのたうち回った。

「今の内に早く……」

逃げろ、と続けようとして、小狼の体が吹っ飛んだ。

「小狼君っ!!！」

さくらが驚いて叫ぶ先で、小狼は街路樹の幹へと叩き付けられ地面に倒れ込む。

さくらたちの前にいる虚ホロウは、顔の周りに猛獣のような蠢たてがみが生え、上半身は人間のように直立しているが、腰から下が蜥蜴とかげのように地面

を這い、長い尻尾を引きずっている。小狼はその尻尾で弾き飛ばされたのだ。

さくらが小狼に駆け寄ろうとすると、ばしん！と音を立てて、虚^{ホロウ}の尻尾が目の前^{ホロウ}の地面に打ち据えられ、行く手を阻む。

「あ……っ」

摂食衝動で塗り潰された濁った目と視線が合い、さくらの中で昨晚の恐怖が鮮明に蘇った。

気管を驚掴みされたかのように息が詰まり、嫌な汗が体中から一気に噴き出す。

「さくらちゃん！」

背後で知世が叫ぶのが聞こえたが、足が竦んで動くことができない。思考が摩滅していた。

虚^{ホロウ}が腕を伸ばしてくる。さくらはそれを呆然と眺めるしかなかった。

——刹那、空から飛来した青白い光の矢が虚^{ホロウ}の掌を貫いた。

「！！」

突然のことに虚^{ホロウ}が悲鳴を上げ、穴の開いた掌を押さえる。さくらは地面に突き刺さった光の矢に既視感を覚え、飛んできた空の方を見上げた。

薄暗い夕空に広げられた翼と、たゆたう銀髪。白を基調とした衣服を纏う青年が、空中で静かに佇んでいた。

「——月さん！」

懐かしさと安堵が胸の内に生まれ、さくらは久しく会っていなかった自分の守護者——月^{ユエ}の名を呼んだ。

しかし月^{ユエ}はぴくりとも表情を変えずに、すつ、と右手を挙げた。掌に淡い光が集まり、細長い結晶が浮かび上がる。周囲にも同じものがいくつも現れた。

月^{ユエ}は虚^{ホロウ}を睨み付け、結晶を虚^{ホロウ}目掛けて投げ飛ばした。刃と化した結晶が空気を裂き、虚^{ホロウ}に襲い掛かる。

結晶の雨の中、体^{ユエ}のあちこちに傷を負いながら虚^{ホロウ}がさらに唸りを上げる。不意に月^{ユエ}の方を見上げると、がくん、と機械じみた動作で口

腔を開けた。途端、そこからはみ出していた舌がゴムのように延び、動揺して反応が鈍った月の体を縛り上げる。

「くっ……！」

月が逃れようともがいたが意味を成さず、大きく弧を描くように振り回され、地面に思い切り叩き付けられた。

凄まじい音を立てて地面に激突する月の姿に、さくらは息を呑んだ。動けなくなったのをいいことに、虚はあっさりと舌を解いていく。

拘束が解けたものの、痛みが勝って体が言うことを聞かない月の元へ、さくらが駆け付けた。

「月さん！　しっかりして！」

慌てて助け起こすと、月は顔を顰めて小さく呻き声を漏らした。

周りが翳ったのに気付くと、虚が堂々と立ちはだかり、さくらたちを傲然と見下ろしている。突然、首元に生えた鬘が、ハリネズミの体毛のごとく逆立った。

一瞬で硬化し、無数の針となった鬘の矛先を向けられ、さくらの顔と体が強張る。

「さくらちゃん！」

駆け寄ってくる知世の足音を聞いて、咄嗟に「知世ちゃん、来ちゃだめ！」と叫んでいた。

振り向いた先で、知世が反射的に立ち止まる。

次の瞬間、虚の鬘の針が吹き矢のように飛ばされた。数本などという単位ではなく、優に数十本はある。

自分たちに向かってくる針の群れに、さくらは月を庇うようにして伏せ、襲ってくるであろう衝撃にきつく目を瞑った。

——ががががん！

すぐそばから響き渡った金属音と、いつまで経ってもやってこない衝撃に不審を覚えて目蓋を開ける。

ゆっくりと顔を上げると、見覚えのある黒い着物の背中と、オレンジ色の髪があった。それが誰なのかを悟って、さくらは目を見開く。

「……一護さん！？」

教えてもらったばかりの名を口にすると、幅の広い刀身で針を防ぐようにして斬月を構えた一護が、顔を振り向かせ「大丈夫か？」と聞いてきた。

さくらが頷こうとすると、視線の先で、虚が再び蠶を逆立たせるのが見えた。

「あぶなっ——」

叫ぶ前に、一護の姿が視界から掻き消える。突然いなくなった標的に虚も驚いていた。

一護は高く跳躍し、すでに虚の目と鼻の先へと肉迫している。斬月を高く持ち上げ、

「終わりだ!!」

鋭い声と共に振り下ろす。斬撃が虚を頭から両断した。

虚は断末魔の悲鳴を上げ、後ろへと傾いでいく。地面へ倒れ込む前に、その体は塵へと還った。

着地した一護に、さくらはハッと思い出したように叫んだ。

「一護さん！ まだもう一体いるんです！ あそこ！」

必死な顔でさくらが指差した方向を見ると、言葉通りもう一体の虚の姿。しかもその虚の背から伸びた触腕が何かを捕らえている。捕らえられたものが何かを悟った瞬間、

「何やってんだアイツ……！」

これ以上ないほどに表情を歪めて、一護は地を蹴った。瞬時にその姿は虚のすぐ傍へと移動する。——死神の高速移動法・瞬歩を使っただのだ。

斬月を振るい、目の前で蠢く触腕を断ち切る。捕らわれていた人間が斬られた触腕ごと地面へ墜落した。

一護は斬月を横に薙ぎ、虚を上半身と下半身とに分断する。つんざくような唸り声を上げて、虚は塵と化した。

禍々しい霊圧ごと消え去った虚の最期を見届けて、「ふうっ」と息を吐きながら、斬月を肩に担ぐ。ゆっくりと振り返り、地面に座り込んだまま体に巻き付いた触腕を引き剥がす人間の方を見た。

「……よう。奇遇だな、石田」

呼びかけると、その人間——石田は「やれやれ」といった表情で立ち上がる。

「まったく……君に助けられるなんて、僕も堕ちたな」

服の汚れを払いながら答えた石田の皮肉に、一護は「言ってる」と吐き捨てた。

「一護さん、その人と知り合いなんですか？」

背後から聞こえた声に、一護と石田が同時に視線を動かす。さくらと、その肩を借りて立った月、剣を突き刺して体を支えている小狼、それを手伝う知世が並んでいた。

「ああ……まあな。それより平気か？ お前ら」

「わたしは大丈夫です。でも、小狼君と月さんが……」

さくらが口にした「ユエ」という聞き慣れない名前に一瞬眉をひそめたが、すぐにさくらが支えている銀髪の青年のことであると察した。

「——お前……」

不意に、その月が視線を向け、玲瓏な声を響かせる。視線が自分を通り越して、石田を見ていることに気付き、一護は顔を振り向かせた。

「ひょっとして……クインシー、と呼ばれていた者の一人か？」

続けられた言葉に、一護は目を見開く。石田も平静を装っていたが、少なからず動揺が伝わった。

さくらは『クインシー』という初めて聞く単語に、「ほえ？」と首を傾げる。

「……君が誰かは知らないけど、知っててくれるとは光栄だね」
石田はずり落ちた眼鏡を押さえながら言い、暗に肯定を示した。月の紫がかった銀の目が、静かに細められる。

「銀の武器を使い、人には見えない魔を退治した一族。だが、遥か昔に突然滅んだ……そう聞いている」

「ああ。大方合っているよ」

滅んだ、という言葉にさくらは目を瞠るが、石田はいたって冷静に応じた。

短い沈黙がその場に降り、石田は重くなった空気を追い払うように、軽く肩を竦めてみせる。

「……ところで黒崎。彼女達が昼間に話してた、例の『魔法を使える女の子』だろ？」

「おう。よく分かったな、紹介したわけでもないのに」

「大したことじゃない、少し考えれば誰でも行き着く結論だ。君には難しいかもしれないけどね」

助けてもらった身分でいけしゃあしゃあと嫌味を返す石田に、一護のこめかみへ青筋が浮かんだ。

「黒崎くーん！」

何か言い返そうと口を開きかけたとき、走る足音と声が聞こえて、全員が顔を向ける。

そこには、制服姿の井上と茶渡がいた。茶渡の背中には、文字通り魂が抜けたようにぐったりとした一護の体が負ぶわれている。

つい数分前まで帰り道を共にしていたのだが、突然代行証が鳴ったので、一護は死神化して体を茶渡に預け、先に瞬歩で駆け付けていたのである。

一護のそばまで来ると、茶渡が真っ先に「無事か？」と案じてきた。

「ああ、どうにかな。ついでに石田とも鉢合わせちゃったし」

「……あれっ？ さくらちゃんに李くん！ 知世ちゃんも」

すぐかたわらに立ったさくらたちに気付いて、井上が驚いた顔をする。さくらは思わず「こっ、こんばんは」と律儀に挨拶をしてしまった。

すると、不意にさくらの持っていた鞆がもぞもぞと動き、中から「むぎゅーっ！」という呻き声がした。次の瞬間には、ばちん、と弾け飛ぶように蓋が勢いよく開く。

「こらあ——っ！ わいのことを忘れるなっ！」

中から飛び出してきたのは、顔を真っ赤にして怒ったケルベロス。

それを見た石田と茶渡がぎよつとして固まった。

「ケルベロス……お前、ボディガードするとか言っておいて、今まで何やってたんだ」

批判的な目を向けて、小狼がもつともなことを指摘した。ケルベロスは「通行人に目撃されるとまずい」という理由で今の今までさくらの鞆に待機していたにもかかわらず、肝心な緊急事態で出てこようとしなかった。存在を忘れるなど言う方が難しい。

「なっ、なに勘違いしとんのや小僧……別に怖気づいて出てこなかったのとちゃうで！　ヘンな気配がしたんで外に出ようと思たら、いきなり押しつぶされて氣い失ってたんや！」

必死な弁明に、さくらは「あ」と声を漏らした。

石田に突然引き倒されたとき、体の前で提げていた鞆の上に乗っかる形で地面に伏せてしまったのを思い出したのだ。おそらく、その拍子に鞆へ体重をかけてしまい、中で圧迫されたケルベロスは気絶してしまったのだろう。

「ご、ごめんね、ケロちゃん……」

さくらが申し訳なさそうに手を合わせると、ケルベロスは不満の抜け切らない顔で「ふんっ」と鼻を鳴らした。

表情豊かな上にふよふよと空中に浮かんでいるぬいぐるみ——そう、どう見てもぬいぐるみだ——をじっと凝視する茶渡と石田。その様子に、一護は今更になって、二人がケルベロスと初対面であることに思い当たった。

やがて、茶渡がケルベロスを指差して、

「……一護、あれも義魂丸ぎこんがんを使ってるのか？」

と推測を口にしてみる。『義魂丸』という耳慣れない単語に、さくらたちは妙な顔をしたが、一護はとりあえず首を横に振った。

「いや、違う。こう見えて、れっきとした生き物だとさ」

「『こう見えて』は余計や……！」

答える一護にケルベロスが至近距離まで迫りながら猛反論する。一護は呆れた顔で「近ちけえよ」と言っ、さりげなく押しのけた。

「……と、とにかく、いつまでもこんな所にいたら、そのうち人が来る。移動した方がいい」

「そうだね。李くん、その人の怪我也治したほうがいいよね」
動揺を誤魔化するように石田が提案すると、井上が小狼と月を見て同意した。

「やっぱ、浦原さんとこに行くしかないよな……」

一護が頭を掻きながら言う。色々世話にはなっているが、腹の底では何を企んでいるか分からない人間の所に行くのは気が進まない。しかし、井上の言う通り怪我也も出ている以上、背に腹は代えられないのも事実だ。

「月さん、大丈夫ですか？」

知世が声を掛けると、月は「ああ」と生返事をする。

「それより……一体どういうことだ、これは。何が起こっている？」
初めて会ったばかりの四人——特に、死覇装姿に斬月を背負っている一護や、さっきの虚が暴れた跡を見やりながら、月はさくらに問い詰めるようにして言った。この中でただ一人、まだ何も状況を把握できていないのだ。当然の台詞と言えよう。

さくらは静かな威圧に「あの、えっと……」と口ごもってしまう。そこへケルベロスが、さっ、とごく自然な動作で二人の間へ割って入った。

「詳しいことはあとで説明するさかい、とりあえず今は一緒に来いや」

ケルベロスがフォローし、月はほんの一瞬だけ不平を訴えるように眉間へしわを寄せたが、すぐに元の無表情に戻って「分かった」ただ答えた。

地面に落ちるいくつかの影は、殆ど沈んでしまった夕陽の、地平線から僅かに漏れる光で照らし出される。

しかしそれも、時間が経つにつれて徐々に薄れ、夕闇と夜闇の混じ

った仄暗い世界の中に溶け込んでいった。

そして、その闇に紛れ込むようにして、少年は建物の上に座っていた。

「あんまり見てると、勘付かれるぞ」

不意に背後から声がして、少年は顔を少し振り向かせる。

見慣れた輪郭の人影に気付く、軽く微笑んで「うん、分かってる」とありきたりな言葉を返した。

「気を付けてよ？ あんたがちゃんとやってくれなきゃ、あたしたちまでアイリスに怒られるんだから」

少し下の方から、別な声。見下ろすと、建物の壁から飛び出したテラスに、やはり別な影が蹲っている。

少年は下ろしていた足を持ち上げ、体育座りをするように姿勢を変えた。

「……わかってるよ。アイリスねえさんには、めいわくかけたりしない」

少年はそう言い、くすつ、と笑い声を漏らす。

「アイリスねえさんは、ぼくにきぼうをくれた人だもん」

「そうですか……今度は複数で来たんスね」

確認するように呟く浦原に、一護は頷いた。すでに死神化を解き、元の肉体に戻った状態で、だ。

浦原は顎に手をやって、少し悩むような素振りを見せる。

「……まさか、一日も空けずにまた出てくるとは思いませんでした。もうちょっと間を置くだろうと踏んでいたもんで」

「やっぱ、異常っていうか……妙だよな、コレ」

一護が相槌を打つように言うと、浦原はふと視線を動かした。隣の和室には、さくらと小狼、知世、月、ケルベロス、そして怪我人二人を治療する井上が控えていた。

傷を治してもらうかたわら、さくらとケルベロスが月に事情を説明

している。

「彼ら自身の霊圧は大したものじゃない……なのに、ここまで虚に付け狙われるとなると、コイツは思いのほか根っこが深いって証拠かもしれないっスね」

浦原の言葉に、茶渡が「どういう意味だ？」と尋ねた。

「ひょっとして……あの虚は、自然に引き寄せられたんじゃないって、誰かが故意に差し向けたんじゃない？」

結論を急ぐ石田に「イヤ、それは飛躍しすぎっスよ」と宥める。

浦原はやれやれというような顔で、帽子を掌で押さえた。

「まあ、いずれにしても今の段階じゃ分かることは何も……」

「どうしてもっと早く言わなかった!？」

いきなり隣の部屋から飛んできた怒号に、誰もが思考停止した。

再びそちらを見てみると、先に治療が終わった月が畳の上に立ち、正座をしたさくららのことを見下ろしている。

一護が「どうした?」とそちらへ敷居を跨ぐと、小狼の治療をしている井上が困惑した表情を向けた。

怒鳴り声——そう表現するにはひどく澄み切ったトーンだが——は、さらに続く。

「危険な目に遭っているなら、もっと早くに知らせるべきだ! 何故今の今まで放置していた!？」

「ごめんなさい……その、なかなかタイミングが掴めなくて……」
激しい叱責の言葉を浴びせられ、さくらが完全に萎縮してしまっている。そこへ、ケルベロスが助け船を出した。

「しゃーないやろ、月。お前とゆきうさぎの意識は別々やし、最近会う機会も減ったし……それに、ついさっきあの辺を歩いたんも、さくらがお前にも話しとかなあかん思て、とーや兄ちゃんに聞いたバイト先へ自分から会いに行ったからやで」

「……だが、もし雪兎が帰る途中で気配に気付かなかったら、あのまま間に合わずに死んでいたかもしれない。丸一日も話さないでいるなど……いったい、何のための守護者だと思っているんだ!！」

なおも声を荒げる月に、さくらはびくりと体を震わせて「ごめんなさい……」と小さな声で答えることしかできなかった。

「そんなに責めることはねーだろ」

見かねたように一護が言うと、月は不快そうに歪めた端正な顔を向けて睨み返してきた。「部外者は引っ込んでいろ」と言わんばかりの鋭い目に一瞬威圧されたが、気を取り直して言葉を続ける。

「そいつだって、色々突然すぎてどうしたらいいか分かんなくて、戸惑ったんだろうし……終わっちまったことをぐちぐち文句言っちゃって、仕方ないんじゃないのか」

「……珍しくまともなことを言うね、黒崎」

「うるせえ！　ていいうか何だよ『珍しく』って！」

揚げ足をとる石田に、一護は唾を飛ばしながら怒鳴った。

その姿をさくらがきよんとした顔で見つめ、月は溜息を吐きながら腕を組み、視線を逸らす。

「やれやれ。そんなに怒鳴らんでも、心配なんやったら素直にそう言えええっちゅうに……相変わらずヘソ曲がりやな」

宥めすかすようにケルベロスが話しかけると、月はそっぽを向いたまま「別にそういうつもりはない」ぼそりと呟いた。

そのやりとりを見て一護は納得した。

この月という人物は、知世や小狼たちと同様に、さくらのことを心から心配しているのだ。しかし、それを率直に出せない性格のため、今のような態度をとってしまったのだろう。

すると、擦りむいて腫れ上がっていた小狼の腕を覆っていた光が消え、井上が「はい、終わったよ」と告げた。

小狼が腕を曲げたり伸ばしたりして、怪我の治り具合を確かめる。

「あとは大丈夫？」

「ああ……ありがとうございます」

完治した怪我に少々驚きながらも、丁寧に頭を下げる。昨晚の警戒心に満ちた態度は跡形もなくなっていた。

この一晩で、夜一の言う『けじめ』をつけてくれたようで、一護は

少し安心する。

「さてと。……それじゃあ、作戦会議といきますかね」

いそいそと和室に入り、どっかと座り込む浦原。それに従い、同じように一護たちも畳へ座る。ケルベロスは部屋の隅に寄せられた卓袱台の上へちょこんと降りた。月^{ユエ}だけが襖の傍に立ったままだ。

「単刀直入に言いますが……木之本サン、やっぱりアナタの狙われ方は普通じゃありません」

浦原が口にした、単刀直入にも程がある科白に、さくらは「え……」と表情を強張らせた。知世が心配そうな顔をし、小狼とケルベロス、月は無言で眉間にしわを寄せる。

「霊力の目覚め方自体も、おかしいの一言に尽きます。やはり、何かきっかけがあったはずっス」

「きっかけ……」

悩むさくらに、石田が「本当に心当たりはないのかい？」と問いかける。

「はい……昨日、なんで倒れちゃったかも分からないし」

さくらは保健室に運ばれたとき、校医に「経過を見たいから、次の日の昼休みにもう一回来てね」と言われていた。約束通り、今日の昼休みに保健室へ立ち寄り、軽い診察をしてもらったのだが、何の異常もないとされた。結局、突然の卒倒の原因は不明とされ、校医も首を傾げるしかなかったのだ。

「可能性として一番ありそうなのは、黒崎サンのような高い霊力を持った人が近くにいていうケースなんですが……周りから『靈感がある』ってウワサされてる人とかいませんか？」

「……私たちのクラスには、いらっしやいませんわよね」

浦原の質問に知世がそう言うのと、さくらは頷いた。

「魔力を持ったやつなら、いくらでも候補がおるけど……靈感はまた別みたいやしなあ」

ケルベロスが腕組みをして呟く。

「実際に持っていない、黙っている可能性もある」

「ていうか、メチャクチャ靈感があつたら、かえつて言わねえんじやねえか？」

茶渡と一護の意見に、浦原は「そうっスねえ」と相槌を打った。靈感や霊媒体質は時に珍しがられ、下手をすれば冷やかしか嫌がらせのネタにされかねない。好んで公表する人間はよほどの物好きか中途半端なニセモノくらいだ、と一護は経験から学んでいた。

「でも、これじゃ原因分らないまんまだね……」

井上の正直な言葉に、誰もが口を噤むしかない。

「原因が分からないんじゃ、アタシたちも対処のしようがないっス」

「せめて誰か、ホロウ虚が出てもすぐに対応できる人間が彼女の傍にいるようにできればいいんですが」

「それなら、一つ良い考えがあるぞ」

石田が言いかけると、不意に別な声が割り込んだ。声の方をみると、いつの間にか縁側に上がって部屋に入ってきた黒猫の夜一がいた。猫が喋る光景を初めて見た月が一瞬目を瞞ったが、すぐに無表情に戻る。

「ほんまか！？　　なんや、そのいい考えって？」

真っ先に食らいついたケルベロスに、夜一は「うむ」と頷いてから一護の方を見やった。

「一護。おぬしは死神化して、常に近くでこの娘の護衛をしておれ」
「えっ？」

「でも、それじゃ黒崎くんが学校に来れないんじゃない？」

夜一の科白に一護が戸惑った声を上げ、井上がもっともなことを言う。ついでに茶渡が「ただでさえ、近頃サボり気味だしな」と同意した。

「いや、その心配はない。おぬし、義魂丸を持っておったじやろう。死神化したらそいつを体に入れて、代わりに学校に行かせれば誤魔化せる——」

「絶
ツ
ツ
ツ
対
イ
ヤ
だ
！
！」

夜一が語り終える前に、一護は怒鳴り声に近い語気で遮った。

「これでもかというほどに顔をしかめた一護に、夜一は「即答じやのう」と冷静に答える。

「アタシも名案だと思えますけど？」

「ふざけんなっ！ コンの奴を代わりに行かせるぐらいだったら留年した方が数倍マシだ！ 死んでもお断りだ！」

軽く手を挙げて賛成の意を示す浦原だが、一護はこめかみに青筋すら浮かべて取り下げようとする。その横で、

「……コンさんって、どちら様でしょう？」

「……なんやキツネみたいな名前やな」

知世とケルベロスがひそひそと会話していた。

「呆れた奴だな、黒崎。君は彼女の身の安全よりも、自分の社会的立場の維持のほうが重要だって言うのかい？ よくそんな心構えで死神なんて務まったな」

眼鏡を押さえながら石田が差し挟んだ科白に、一護は「うっ」と言葉に詰まり、顔を引きつらせる。

「で、でもでも！ 一護さんにもやっぱり都合があるんだから、そんなに無理しなくても——」

「そうもゆかぬ。昨日と今日は運よく一護や石田がいたから助かったが、今度もそうなるとは限らん。ホロウ虚がいつ出てくるか分からぬ以上、常に警戒はしておくべきじゃ」

さくらが慌ててフォローをするが、夜一に敢え無く説き伏せられ、一護と同じように「うっ」と言葉を詰まらせる。

しかし『義魂丸代理登校作戦』を受け入れるのだけは避けたいと言いたげな一護に、夜一は深い溜息を吐いた。

「……まあいい。そんなに嫌だったら無理にとは言わん。代わりに儂が付いてやろう」

思いのほかあっさりと折れた夜一に、さくらが「ほえ！？」と驚いた声を上げる。嫌がっていた一護も驚きを隠せず「い、いいのか？」と聞き返してしまった。

「まあ、僕も暇じゃからの。それに、探査能力の低いおぬしがいるよりはいくらかマシかもしれん」

「いい加減それ言うのやめろ！……けど助かるよ。サンキュ」

ふ、と笑いながらのからかいに反論しつつ、きちんと礼を述べる一護。それから、脇にいるさくらの方へと向き直った。

「悪いな……色々面倒な目に遭わせちゃって」

申し訳なさそうに言う一護に、さくらはぶんぶんと首を横に振った。

「い、一護さんのせいじゃないですよ！それに、大丈夫です。ケロちゃんも月^{ユエ}さんも、知世ちゃんもいるし、小狼君もいるし」

順に、自分のそばにいる人間へ視線を送っていくさくら。最後に目が合ったとき、小狼は思わずどきりとしてしまった。

「きっと、大丈夫」

ふわり、と花が綻ぶように微笑むさくらに、その場にいる誰もが軽く息を呑んだ。

優しい微笑みは、どこか自信に満ちていて、見る者を安心させる力があった。

「大丈夫」と言うのなら、本当に大丈夫。

根拠はないが、何故かそんな気がした。

T o b e C o n t i n u e d

Opus NINE (後書き)

修正作業が進んだので、割とスパン短めのUPとなりました。

メインメンバーが一堂に会しましたが、初稿版の執筆と今回の修正を経て再度実感いたしました。

やっぱ人数多いと書きづらい……セリフをうまい具合に配分させるのがめっちゃ難しいです。

こういうのはいわゆるシナリオ形式が一番楽なんですけど、普通の散文形式を意地でも通すって決めたので……がんばる。けど、以前の最大参加数8人も突破しちゃったしなあ。でもこれからまた増える予定なんだよなあ。項垂れる以外にどうしろって言うんですか。

気を取り直してタイトルちえええつく。

「Misfortunes never come singly」
は、諺で「一難去ってまた一難」の意味です。さくらと一護の災難はまーだまだ続くのです……ごめんね。

日本語タイトルは読んで字の如し。ただ集まったのが一護やさくらたちメンバー全員だけじゃなくて、ホロウ虚もなんだか呼んでもないのにぞくぞく来てますよ、というような意味です。

「石田御用達のヒマワリソーイングが桃矢兄ちゃんと雪兎のバイト先」というアイディアは初期段階から浮かんできました。実はこっそりニアミスしてて、一護と井上以外のBLEACHメンバーとさくらたちを絡ませるとしたらここからかなーと。

でも茶渡と会わせることを考えたとき、ちょっと悩みました。彼はあのナリで「可愛い物好き」という設定が原作にあったんで。それに従ったらコンと同様にケロちゃんがちよっと大変な目に遭ってたんだらうけど、苦しいですがその辺は割愛させていただきます。どうかご了承を……。

今回初登場の月^{ユエ}さんは、『CCさくら』の中ではトップクラスで惚れたキャラでした。おそらく私が生きてきた中で初めて”萌え”を意識した人だと思います。たぶん、あの人こそ世に言う”ツンデレ”の先駆けをいったキャラの一人だと勝手に確信してます。月^{ユエ}さんの滅却師に関する知識の出所は、勿論クロウさんです。あの人なら知ってそうだから。

それから、これは作品とは直接無関係ですが読者の皆様に一言。すでに分かってる方も数多いと思うんですが、このサイトではパソコンにおいて、感想投稿欄の下に「感想を書く場合の注意事項を必ずお読みください。」という一文が添えられています。

ユーザーの方も、そうでない方も、当作に限らず感想を書き込む際には、今一度、この「注意事項」に目を通してからコメントを頂けると助かります。

何卒ご協力お願いいたします。

Opus TEN

星空に月が浮かんでいる。

その逆光に照らされて、影が三つ佇んでいた。

——左にいるのは、背の高い青年。結わえた長い髪を靡かせ、腕を組み、悠然と立っている。

——右にいるのは、四つ足の獣。長い尻尾をしきりに揺らし、くつろぐようにその場へ座り込んでいる。

いずれも目で見ることができるのは輪郭だけで、髪や体の色は影になって判らない。

ところが、どちらの影も輪郭しか判らないが故に、一目で奇妙と分かる点があった。

それは、青年のほうにも、獣のほうにも、本来ならあるはずのない、鳥のような大きな翼と思しきものが背中から生えていることだった。

——ケロちゃんと、月^{ユエ}さんに……似てる……。

ぼんやりと思ったが、感じ取れる気配や雰囲気は、二人のそれとは明らかに違う。

影になってはいるものの、僅かに月光が当たって窺うことができる口元は、心底楽しそうな笑みの形に歪められていた。

そして、二人に挟まれた、真ん中の影。

背の低い子供の輪郭をしていた。短い髪の毛はクセがあるのか、あちこちではねていて、ゆったりとした服を身に着けている。

子供もまた、口元が笑っていた。

——あなたたちは、誰……？

だれ、なの——？

その疑問に答える者は、いなかった。

A^ア Cloud^{クラウド} on^{オン} the^ザ Horizon^{ホライズン}

—それでも前向きに—

「——くらちゃん、さくらちゃん」

「——……だ、れ……」

呼び声にうつすらと目蓋を開きながら無意識に呟き続けて、さくらは、はっ！と一気に覚醒した。

慌てて目を瞬かせると、馴染みのクラスメイトたちが自分の机を囲んでいる。その中にいた奈緒子が、「さくらちゃん、大丈夫？」と聞いてきた。

途端、かぁーっと顔が火照っていく。

「ごっ、ごめんなさいっ!!」

頬を押さえて飛び起き、とりあえず謝るしかなかった。

机には、授業中だと言わんばかりにノートや教科書が広げっぱなしだ。実際はすでに休み時間に入っていて、日直が黒板の板書をさっさと消している。

「ひょっとしなくても……わたし、寝てた？」

周りにいるクラスメイトに尋ねると、皆一様に「うん」と頷いた。

「授業が終わり近くなっても眠ったままなので、どうにか起こそうとしたのですが……」

と、申し訳なさそうに知世が答える。

「でもよかったじゃないの。一時間目の先生、授業のあいさつとかこだわらない人で。もし『起立、礼』とか普通に号令やってたら、居眠りばれちゃってたわよ」

そう言ったのはつぐみだ。

さくらたちの場合、小学校時代から各教科ごとに別々の先生が担当していたのだが、どの先生も例外なく、必ず授業の開始と終了時に挨拶をしていた。しかし中学校に上がると、先生によって挨拶にこだわらず、「別にやらなくていい」と公言する人すら出てきた。つい先刻までの授業の先生は、その一人として知られていた。

「昨日、あまり眠れなかったの？」

千春が聞いてきたので「ううん、そんなことはないけど」と答える
と、

「やっぱり具合悪いんじゃない？ この間だって倒れてたし」と、二日前の出来事に話題が転じた。

「先生に言って、早退した方がいいかも。無理すると大変だよ」

「だ、大丈夫だよ！ほんとになんでもないの。ちょっと眠かっただけだから！」

思いもしない方向に話が進み始めたので、さくらは慌てて手を振って流れを遮る。千春たちは心配そうなままだったが、「そう？」と首を傾げた。

「さくらちゃん。次は美術の授業ですから、そろそろ移動なさらないと」

「あっ、そうだった！」

知世の言葉に、さくらは慌てて机や鞆の中から美術の教材を取り出す。千春たちがすでに必要なものを揃えているのを見て、

「みんなは先に行って！わたしもすぐに行くから」

と声をかけた。千春たちは一度顔を見合わせたが、「じゃあ、待ってるからね」と答え、他のクラスメイト達に混じって教室を出て行った。知世もそれに追従していく。

「……さくら」

不意に背後から呼びかけられて、さくらは鞆からスケッチブックを取り出しながら振り返る。どこか心配そうな面持ちをした小狼が立っていた。さっきのやりとりを見ていたようだ。

「小狼君……」

「本当に大丈夫か？ ひよつとして疲れてるんじゃない……」

「ううん！ 平気だよ。心配かけてごめんね」

揃った教材を胸に抱え、小狼の方を向いて微笑む。いつもであれば、ここで小狼が赤面して視線を逸らすところだが、今回は違った。

小狼は一度目を伏せてから、覚悟を決めたようにさくらの方へと歩み寄る。その動作に、さくらは軽く首を傾げた。

何度か言葉を選ぶように口を開いてから、小狼はこう言った。

「……あんまり、無理するなよ」

考えに考えた気遣いの言葉に、さくらは一瞬目を瞠る。ふっと笑って、

「……ありがとう」

と答えた。

そのかたわらで、

「……あかん。何のためにここにいるのか分からんようになってきた」

鞆の中に潜り込んだまま、ほとんど存在を忘れられたケルベロスが、小さな声でぼそりと呟いた。

昼休み——空座第一高校の屋上で胡坐をかいた一護は、購買で買ったコロッケパンをもそもそと食べていた。

すぐそばで啓吾が何やら大袈裟な身振りを交えて熱弁しているが、一護はまるで関心が持てず、別世界の出来事のように遠い目で眺めるだけだった。

寄りかかった網のフェンスの方を振り向いて、その向こうの空を見つめる。一護の視線の延長上には、ちょうどさくらたちの通う中学

が建つ友枝町があるはずだ。

「気になるのか？」

「えッ!？」

いきなり横から声を掛けられ、慌てて体の向きを戻した。胡坐をかいた茶渡が、静かに口を開いて「顔に書いてある」と続けた。

必要最低限しか喋らない茶渡とのコミュニケーションは、初めての人間だと難儀することもあるが、中学からの付き合いである一護にとっては慣れたものだ。

一護は軽く溜息を吐いてから、「まあな」と答える。

「夜一さんがいるから、心配ねえと思うけど……ちよつとな」

「だったら、四の五の言わずにガードしてればよかっただろ」

啓吾たちに聞こえないような声をひそめて言うのと、茶渡とは反対側に座っていた石田がしつこく言ってきたので、一護は「ほっとけ」と不機嫌そうに返した。

ピリリリリリ、と甲高い携帯電話の着信音が響き渡ったのは、その時だ。

メールならすぐに途切れるが、音はいつまでも鳴り止まない。電話の方の着信だろう。しかし、その携帯電話の主がなかなか出ようとしないらしく、音はずっと鳴り続けている。

さすがの啓吾たちも「なんだ？」と気にし始めた。

一護も「誰のケータイだよ」と辟易した表情を浮かべる。

すると、たまたま他の女子と一緒に屋上へ昼食を食べに来ていた井上が「黒崎くんじゃない？」と小声で言った。

「へ？　けど、俺のケータイはこんな音じゃ……」

「そうじゃなくて、ほら、一昨日知世ちゃんにもらった電話……」
知世？

井上の口から出た名前に一護は妙な顔をしたが、すぐにハッと思い当たった。

「あ、ああ！　そうか、アレか」

一護は慌てて立ち上がり、他のクラスメイトから離れて屋上の片隅

に寄った。そして、なおも自分呼び出し続ける携帯電話をズボンのポケットから取り出す。

それを見て、過剰反応をしたのは啓吾だった。

「……なに？　なんでアイツあんなに離れて電話出ようとしてんの？　まさかつ、カノジョ！？」　他校にカノジョ作ってんの！？　ちくしょうオレのいぬ間にあのムツツリスケベがあ——！！」
ごん。

叫び倒す啓吾の脳天へ、一護が放り投げたジュースのパックが寸分違わず見事にヒットした。

たかがパックでも、中身が液体だとそれなりに重さがあるし、角が当たれば相当痛い。

脳震盪に陥った啓吾は泡を吹いてあえなく卒倒し、水色が「自業自得だねー」とにべもなく感想を言う。

「ったく、丸聞こえなんだよ……誰がムツツリだ誰が」

一護は一切の哀れみもなく呟いてからボタンを押し、電話を耳に当てた。

「ハイ、もしもし」

『黒崎さんですか？』

電話の向こうから聞こえた、よく透る声に、一護は一瞬目を見開いた。

「……知世か？」

『はい。こんにちは』

「おう……。どうしたよ、急に電話して？　何かあったのか」

『いえ、今のところは変わりありませんわ。さくらちゃんもお元気です』

「そうか。何もないなら良かった」

『実は、お話しするのを忘れていたのですが、さくらちゃんの携帯は修理中なので、そちらから掛けられても連絡はつかないんです。なので、私が代わりにお電話を差し上げましたの』

「ああ……そういうことか」

『それに黒崎さん、さくらちゃんのことを心配してらしたので、とりあえず報告だけはしておこうと思って』
知世の言葉に、一護は軽く息を呑む。

「……俺、そんなに心配そうだったか？」

『はい、とても』

「……自覚はねえけど」

『黒崎さん、本当は気にしていらっしゃるのではありませんか？』

さくらちゃんを巻き込んだ、と』

自分でも無意識のうちに抱いていた思いをいきなり言い当てられて、一護の思考回路が一時停止した。

「……参ったな。そんなに顔に出やすいのか、俺って」

『そうではありません。ただ、私はそんな気がしたんです』

「ははは……鋭いんだな」

思わず、乾いた笑いが口の端に浮かぶ。らしくないな、となんだか情けなくなった。

『あまり気に病まないで下さいな。さくらちゃんが襲われたのは、黒崎さんのせいではありません。あまりこだわらないのもそれはそれで問題ですけど、でも、自分のものではない事柄まで無理に背負ってしまうのはよくありませんわ』

諭すような知世の言葉に、一護は口を噤んだ。思いがけず、凶星をいくつも突かれている。

『それに、さくらちゃんも黒崎さんを責めたりしません。私自身、今まで知らなかったようなことばかりで驚いていますけど……。さくらちゃんはどうなときでも、自分らしく、前向きに受け止めて、元気に笑っていられる。そういう方ですもの』

「……前向きに、か」

『ですから、これから何があったとしても、黒崎さんが責任を感じる必要はありません』

「……そうか」

『はい』

確かめるように相槌を打つと、知世が力強く肯定した。

「……ありがとな。なんか肩に力入れすぎてたみてえだ」

『少しでも軽くなったのなら、嬉しいですわ』

「ああ。けど、本当になんかあったら知らせろよ。一応俺も死神だし。……そういや、夜一さんには会ったか？」

『いいえ。さくらちゃんに聞いたら、朝は見かけなかったそうです。でも、昨日の帰り際に学校が終わるのは何時くらいか夜一さんに聞かれたらしいですわ』

「そうか。じゃあ、多分帰り道に付き合うんだと思う。会ったらよろしく言つといてくれ」

『分かりました』

「じゃ、切るぜ」

『はい。失礼いたします』

知世が答えるのを聞くと、一護は携帯電話を耳から離し、ホールドボタンを押した。電話を持った手を下ろし「ふーっ」と溜息を吐く。実際に話していたのは数分にもかかわらず、一護は長時間話し込んだかのような不思議な充足感を味わっていた。

疲れたのではない。むしろ逆で、気分が爽やかですらあった。

知世ってすげえ奴だな、と心の底から思う。

ほんの二度しか会っていないはずの自分が考えていることを、恐ろしいほど正確に言い当て、その中にあったわだかまりを解消させてしまったのだから。

安堵にも似た溜息を再び吐いていると、

「今の、さくらちゃんから？」

唐突に背後から声がしたので、一護は思わず「うおおッ!？」と奇声を上げてしまった。

慌てて振り返ると、井上と茶渡、石田がいつの間にか佇み、様子を窺うように一護へ視線を浴びせている。

「あ……イヤ、知世の方だった」

とりあえず質問に答えると、石田が「何かあったのか？」と尋ねて

きた。一護は軽く首を横に振ってみせる。

「変わりないってさ。帰り道は夜一さんが一緒に行ってくれるらしい」

一護の答えに、井上が安心したように「そっか」と呟いた。すると、
「一護オオオオ！ キサマオレに黙ってどこの学校の美少女を引っかけやがったんだアア！！」

先刻のジュースパック攻撃から回復した啓吾が猛スピードで駆け寄り、滂沱と流れる涙をキラキラと効果音つきで撒き散らしながら喚いた。

胸倉を掴まれ、がくがくと揺さぶられながらその嘆きを受けた一護は、「はぁー」と呆れたような溜息を吐いてから、怒鳴り返した。

「そんなんじゃないやねえ！ 勝手な勘違いもほどほどにしろッ！」

「なんだとオ！？ ムキになって否定しやがってますます怪しい！」

「アホか！！ 大体ホントだとしてもテメエにいちいち報告する義務はねえだろうが！」

「きーっ！ 苺のクセにこの薄情者オ！」

「苺イチゴ言うなっ！ 勝手にアクセント変えてんじゃないやねえ！」

どごっ！

「うゝッ！」

堪えかねた一護の繰り出したストレートパンチが顎に直撃し、鈍い音と啓吾の呻き声が重なった。

夕方——それぞれの部活動を終え、友枝中学校の廊下をさくらと知世が並んで歩いていた。

「今日の部活はいかがでした？」

「うん、ずっと教えてた一年生の子がバトン回すのうまくなってね。コツを教えてくれてありがとう、ってお礼言われちゃった」

「それはよかったですわね」

他愛のない会話を交わしながら夕陽の差し込む細い廊下を進み、昇

降口へと向かう。下校時間の近い校舎からは昼間の喧騒が消え失せ、別世界のように静まり返っている。聞こえるのは歩いていく二人の上履きの足音だけだ。

その時、すぐ目の前の角から飛び出してきた影があった。

背中の上ではねる黒い三つ編みに、さくらは慌てて呼びかけた。

「つぐみちゃん！」

三つ編みの主は立ち止まって、さくらと知世の方を振り返る。一瞬驚いたような顔をしてから、「木之本さん？ 大道寺さんも」と確かめるように言う。

「まだいらっしゃったんですか？ 下校時間も近いのに」

「いやー、図書室で勉強してたら遅くなっちゃって。二人は部活かな？」

「うん。そうだよ」

「えーっと。チアリーディング部と合唱部だっけ」

「はい。つぐみちゃんは……帰宅部でしたわね」

「これといって特技とかないからねえ」

あははは、と照れたように笑ってみせるつぐみが、さくらには少し意外に感じられた。

「でも、つぐみちゃん頭いいし、運動神経もいいんだから、きっとどの部活でもやっていけるよ」

飾りっ気のないさくらの褒め言葉に、つぐみは軽く目を瞠ってから、ゆっくりと微笑んで「ありがと」と応える。

「けど、家帰ってから色々やることがあるからね。ちょっと時間割けそうにないんだよ」

つぐみがそう言うと、さくらと知世はハッと息を呑んだ。

彼女が友枝中学に転校してきて間もなくの頃に明かされたのだが、つぐみは両親を早くに亡くしているらしい。今は親戚が大家をしているアパートの部屋を借り、一人暮らしをしていると語っていた。

「色々やることがある」というのも、そういう家庭事情に由来した所が大きいかもしれない。

そのことを思い出して、さくらは「そっか……」と相槌を打つしかなかった。

「つぐみちゃんは、これからお帰りになりますの？」

気を取り直すように知世が言くと、つぐみは顔を横に振った。

「教室にちよつと忘れ物したの思い出したんだよね。それ取りに行つてから帰るつもり」

「けれど、それだと学校を出る時間が遅くなってしまうわ。もうすぐ暗くなりますし、一人でお帰りになられるのは……」

「そ、そうだよ！ 危ないからわたしたちも一緒に――」

「平気平気。学校出てもすぐバスに乗って行っちゃうし、それに二人とは帰る方向が反対だし」

「……ほんとに大丈夫？」

なおも気にかけるさくらに、つぐみは苦笑した。

「木之本さんは心配性だなあ。でも、気にかけてくれて、あ・り・が・と！」

軽くさくらの額を人差し指でつつき、ウィンクをして笑ってみせるつぐみ。茶目っ気に彩られた綺麗な笑顔と動作に、さくらは例のごとく”はにゃん”状態に移行する。

そこでふと、さくらの脳裏へ一つの可能性が浮かび上がった。

「それじゃ、また明日ね」

「ま……待って、つぐみちゃん」

軽く手を振って立ち去ろうとするつぐみを慌てて引き止める。つぐみは不思議そうな顔をして「なに？」とさくらを見る。

引き止めたさくらは、自分でも困ったような表情で「あ、あの、あの」と口ごもる。なかなか用件を言おうとしないので、つぐみは首を傾げずにはいらなかった。

さくらは軽く息を吐いてから、覚悟を決めたようにつぐみを見、口を開いた。

「あのね……その、変なこと聞かかもしれないんだけど」前置きをするさくらに、つぐみは「うん？」と答えて、先を促す。

「つぐみちゃん……その、人間じゃないもの、とか……見たことある？」

口にしてから、さくらは思わず「ああ言っちゃった！」と頭を抱えた。

一方でつぐみは、少しの間きよんとしてから「ええ？」と怪訝な声を上げる。

「人間じゃないもの？ それって、例えば？」

遠回しに尋ねたのがいけなかったらしい。深く突っ込まれて、さくらは言葉に詰まった。脇に立った知世もさすがにフォローが思いつかないようだ。心配そうな目を向けているのが分かる。

それでも、さくらはますます不審がられるのを覚悟で答えた。

「……ゆ、幽霊……とか」

さくらの言葉に、つぐみは考え込むように口を噤んだ。

「……木之本さん、そういうのダメじゃなかったっけ」

彼女を含む何人ものクラスメイトの間で共有されているイメージを否定できず、さくらはロボットのようなきこちない動きでこくりと頷く。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「えっ……え、えっと、それは……その」

当然といえば当然の疑問を突き出されてしまい、さくらは「はうううう」と困り果てた。本当のことを言うわけにもいかず、かといって上手い言い訳も思い付かない。もうちょつと言葉とシチュエーションを選んでから聞くんだった、と後悔が押し寄せた。

すると、つぐみは何か悟ったような目をして、くすりと笑った。それ以上問いたすこともなく、「幽霊かあー」と話し始めた。

「残念。私はそういうの見たことはないんだよねえ、憧れはあるにはあるんだけど」

落胆が半分と、安堵が半分。

つぐみの答えに対して抱いたのは、そんな複雑な感想だった。

「聞きたいのはそれだけ？」

「あ、う、うん。ごめんね！ほんとに変なこと聞いたりして」

「いいよいいよ。じゃ、また明日」

何事もなかったかのようにさらりと流して柔和な笑顔を浮かべ、手を振って踵を返すつぐみの背中を、さくらと知世は呆然と見送った。追従する黒い三つ編みが、先にあった渡り廊下の方へ曲がってしまった、

「……変な質問したのに、深く聞いてこなかったね」

ぽつりとさくらは呟いた。

「つぐみちゃんのことですから、きつとさくらちゃんが困っているのを見て、聞かないでおいでくれたんですわ」

知世が解釈を付け加えると「そっか」と納得した。

再び二人で昇降口へ向かって歩き出すと、自分がぶつけた「幽霊を見たことがあるか」という質問を思い出して、ひどく恥ずかしくなる。

その時、さくらの抱える鞆の蓋がぱかりと開き、「ぷはーっ」とケルベロスが顔を出して酸素を食った。

「さくらー、わいはいつまでこの中におらなあかんねん？」

「ケロちゃん……知らないよ、人に見つかっても」

疲弊した表情を浮かべるケルベロスに、さくらは呆れた声を出した。ケルベロスは鞆から出した頭を巡らせて周囲を見回すと「なんや、もう人の気配もほとんど残ってないやないか」と言う。

「うん、でもそれ以上は出てきちゃだめだからね。念のため」

「しゃーないなあ……」

さくらに注意されると、ケルベロスは渋々蓋を閉め直し、代わりに鞆の横に開いた隙間から頭だけをぴよこりと出した。

「ところでさくらちゃん。ひょっとして、さくらちゃんはつぐみちゃんが原因だと思いましたの？」

知世の質問に、さくらは「えっ？」と咄嗟に反応できなかった。

「……そういえば、昨日帽子のにーちゃんが言うと思ったな。さくらが幽霊見えるようになったんは、近くに靈感のあるやつがおったか

らかもしれん、て」

質問の意図をくみ取ったケルベロスがそう言うのと、さくらは「うん……」と小さく頷く。

「疑うわけじゃないけど、この前わたしが倒れたときに一番近くにいたのはつぐみちゃんだったし……それに一緒にいると、雪兎さんや観月先生みたいに、はにゃーんってなることもあるから」

「月城さんも観月先生も、実際に力を持った方でしたものね」

「せやなあ……さくらはなんとなくやけど、ある程度力を感知できるみたいやしな」

「でも、やっぱりわたしの思い過ごしだったみたいだね」

「そうとも限らんのとちゃうか？ あのおレンジにーちゃんが言ってたやろ、靈感があってもかえって口に出さんこともあるって」

「けど、つぐみちゃんは嘘ついてるようには見えなかったもん」

「そうですわね……私も同じ意見ですわ」

話しているうちに、二人は昇降口へと来ていた。上履きを脱いで、それぞれの下駄箱を開け、学校指定の黒い靴を取り出して下に置く。

「ま、さくらはともかく、知世がそう言うんなら間違いないな」

「ケロちゃん、それってどういう意味……？」

フツ、と含みのある笑みを浮かべたケルベロスの科白に反応して、すかさずさくらがぎろつと睨んだ。その様子を見て、知世がくすくすと笑う。

「さくら」

不意に呼びかけられて、さくらだけでなく、知世も振り返った。

入り口の所に、すでに靴に履き替えた小狼が暖色の夕陽を背にして佇んでいた。

「小狼君！ 部活ないのに、待っててくれたの？」

さくらが驚いた声を上げると、小狼は「ま、まあな」と答える。

小狼はさくらと同様、運動系の部活を中心にあちこちから熱烈な勧誘を受けていたが、どれも断って、帰宅部を通していた。部活のない人間であれば、とっくに帰っていてもいい時間だ。

「小僧一人でなんとかできるとは思わんけど、おらんよりはマシやな」

ケルベロスが皮肉ると、照れくさそうだった小狼が大いに顔をしかめ、「なんだと！」と食ってかかった。

「揃ってにぎやかじゃのう」

突然声が聞こえて、さくらたちは視線を動かす。

昇降口の引き戸のそばに、ちょこんと座り込んだ小さな黒い影があった。半月型の金色の目が光を反射して輝き、長い尻尾がゆっくりと揺れる。

「よ、夜一さん！　こんにちは……」

さくらが慌てて頭を下げると、黒猫・夜一は腰を上げて「夕方に『こんにちは』はないと思うがの」とぼやきながら歩み寄った。

「昨日話した通りじゃ。帰り道に付き合せてもらうぞ」

「よろしくお願いします……」

夜一は恐縮しているさくらに、口元だけで笑って――猫なので少し分かりづらかったが――「そう固くなるな」と声を掛ける。くるりと体の向きを変えて歩き出した夜一だったが、

「せやけど、ほんまに大丈夫なんか？　あんさんどー見てもただの猫やし、何か起こっても対処できるようには思えんなあ」

歯に衣着せぬ物言いのケルベロスに、ぴたり、と足を止める。さくらが動揺して「ケロちゃん！」と声を上げたが時遅し。

――すると、夜一は無言で、ゆるり、と顔だけを振り向かせた。

「……疑^{うたぐ}るのなら、身を以て試してみるか？」

そんな一言を発し、鋭い眼光と目が合った瞬間、ぞくつ、とさくらの背筋が粟立った。小狼と知世も同様の感覚を味わい、呼吸が止まってしまう。

ケルベロスにいたっては、本能的な危機感を覚えたのか「ひい！」と青ざめて鞆の中に潜り込んだ。

体中の神経がぴりぴりと圧迫されるような感覚に、さくらたちは金縛りにあったように動くことができなかった。ところが、

「……冗談じゃ」

ふっ、と笑うような息を漏らした途端、圧迫感はあると抜け落ちた。

重く固い感覚から一気に解放されて、さくらたちは同時に力の抜けた肩をがくりと落とす。ケルベロスも、おそろおそろといった様子で再び顔を出した。

「安心しろ、取って食ったりなどせぬわ。今日はおぬしらの守^{もり}をしに来てやったんじゃからの」

「……ほえ」

何故か楽しそうに肩を揺らして、のこのこと歩き出す夜一に、さくらは間拔けな声を漏らした。

——なんだ？ 今のは……

小狼は歩いていく夜一の後ろ姿を眺めたまま、これまで経験したことの無い感覚を思い起こして、不審を募らせる。

三人が呆然と立ち尽くしていると、夜一はそれに気付いて止まり、「何をしておる。さっさと帰らんと夜中になってしまおうぞ」

と急かした。さくらが「す、すみません！」と我に返って後を追う、知世と小狼もそれに従う。

校門までは夜一が先導するような形で歩いていたが、学校の敷地を出てしまうと、「道が分からん。先に歩け」と言い、道路の脇にあった塀の上を器用に伝い歩き始めた。

いつもなら他愛ない雑談に花を咲かせるものの、夜一がいるというだけで空気がぎこちなくなってしまう。

さくらたちが黙り込んで歩き続けていると、気を利かせたように、「そう緊張するな。せっかくの付き合いじゃ、こうして出会うに至ったのも何かの縁だし、色々話を聞かせてはくれんかの」と塀の上から話しかけてくる。

では何を話そうと考え込んで、また沈黙してしまうと、

「そうじゃな……そもそも、何故おぬしが例のカードとやらを持つようになったのか、興味がある。よければ話してくれぬか」

夜一がそんな疑問を口にしたので、さくらは一つ一つ思い出すようにして語り始めた。

思えば、さくらが一護たちに明かしたのは、『魔法が使えるカードを持つ』という事実ぐらいだった。それまでの経緯を知りたがっても当然と言えよう。

『さくらカード』がかつて、魔術師クロウ・リードの創った『クロウカード』であったこと。

たまたまそれを納める本をさくらが開き——ほとんどケルベロスの独断で——カード捕獲者^{キャプター}としての使命を負う羽目になったこと。

一人だけの秘密のはずが、予想外にも知世にまでばれてしまったこと。

カードを集める最中で、香港からやってきた小狼とライバルとして出会ったこと。

最終的に全てのカードを封印し、月^{ユエ}による最後の審判を経て、正式に新しい主と認められたこと。

だが、すぐに原因不明の事件が起こり、その過程で『クロウカード』を自分の魔力で創り変え、『さくらカード』にしたこと。

時折ケルベロスと小狼の注釈や、知世が語る『さくらの魅力』を交えながら話していると、時間はあつという間に過ぎてしまった。

「なるほど。その歳で色々苦労したのだな」

夜一が老成した感想を述べると、さくらは「苦労って言うほどのことじゃないですよ」とかぶりを振った。

「それに、わたし一人だけじゃなくて、みんながいてくれたから最後までやりとげられたんです」

素直に言うさくらの科白に、知世と小狼とケルベロスは自然と微笑みを浮かべる。夜一も何度も頷いて「前向きはよいことじゃ」と相槌を打った。

すると、馴染みの一軒家が視界に入ってきたので、さくらが指差し

て「あれがわたしの家です」と夜一に教える。

家の前まで歩いていくと門をカタリと開け、地面へ身軽に着地した夜一の方へ向き直った。

「送ってもらってありがとうございました」

「なに、礼には及ばぬ」

虚^{ホロウ}も出なかったことだしな、と夜一は空を見上げる。

さくらを送り届けた以上は帰るかと思われたが、夜一は「念のために知世と小狼の方にも付いて行く」と宣言する。知世はマンションへの道の途中に車を呼んでおくので、小狼のそばに付いていてほし
いと申し出た。

「では、また明日」

「うん。小狼君も気を付けてね」

「ああ。またな」

踵を返して、家の前を離れていく知世と小狼に手を振ると、夜一も
従って歩き始める。

しかし、何か思い出したようにその足が止まり、夜一は再びさくら
の方を向いた。

「——おぬし」

玄関へ行こうとしていたさくらは、夜一の声に振り返った。

門の前に設けられた小さな階段の足下で、夜一がまっすぐに視線を
投げかけている。

猫のものであるにもかかわらず、真摯さが滲んだ夜一の表情に小首
を傾げた。夜一は、静かに口を開いた。

「……カイトという名を知らぬか？」

「……かいと？」

夜一の告げた固有名詞を、さくらは鸚鵡返しするしかなかった。

その反応に、夜一は少し落胆したように「いや、知らんならいい」
と話を打ち切る。先を歩いている二人を追って、さっさと駆けてい
った。

「……何の話やねん？」

ケルベロスが妙な顔をして呟くが、さくらは眉をひそめて唸るだけだった。

とりあえずと思い、玄関の鍵を開けて中に入り、「ただいま」といつものように帰宅を告げた。返ってくる声はない。

「今日はおとーはんも桃矢にーちゃんもまだ帰つとらんやろ」

「そ、そうだった」

ケルベロスにツッコまれて、さくらは照れ笑いを返した。ところが、「おかえりなさい」

ないはずの返事が返ってきて、さくらは「ほえ!？」と奇声を上げて身構え、ケルベロスは反射的に頭を鞆の中に引っ込める。

リビングからスリッパの足音を立てて顔を出したのは、雪兎だった。

「ゆ、雪兎さん! どうしてここに?」

「午後の授業が休講になって、バイトも入ってなかったから、とーやに鍵借りて家に上がらせてもらったんだ。ついでだから、夕飯も作っておいたんだよ」

「あ、ありがとうございます! けど、なんでわざわざ……」

もっともな疑問を口にする、雪兎が屈んで視線を合わせてきた。

「なんとなくだけど、さくらちゃんのそばにいなきやいけない気がしたんだ」

言葉の意味が理解できず、さくらは立ち尽くした。雪兎はにっこりと笑って、さらに続ける。

「自分でも、どうしてなのかよく分からないんだけどね。……多分、月はさくらちゃんのことを心配なんだと思う」

思いがけず、自身の中にあるもう一人の意識の存在の名前が雪兎の口から出て、さくらは目を見開いた。

「月がさくらちゃんのそばにいたいんだったら、まずぼくがさくらちゃんの所にいないといけないから。それに、ぼく自身もさくらちゃんに何かあったら心配だし」

「雪兎さん……」

「ごめんね。ひよっとして迷惑だったかな?」

必要もないのに謝る雪兎に、さくらはぶんぶん勢いよく首を横に振った。

「そんなことないです！　ほんとにありがとうございます！」

「どういたしまして。……あ、藤隆さんが帰ってくるのって何時か分かる？」

「えっと、八時くらいかな？」

「じゃあ、先に夕飯食べてようか」

「はい！　わたし、二階で着替えてきますね！」

「うん。ゆつくりでいいからね」

さくらは急いで靴を脱ぎ、自分のスリッパを履いて階段を駆け上がった。雪兎がにこにこ笑顔で見届ける。

自分の部屋に入り、ドアを閉めると、そのまま閉めたドアに寄りかかった。

部屋に着いたのを悟って、ケルベロスが鞆からのそのそと体を這い出させた。

「ふー……やっと自由に動き回れるわー」

宙に浮遊して、汗を拭うように丸い額を手で擦るケルベロスだったが、ふと、さくらがドアに寄りかかったまま動こうとしないことに気付く。

「……どないしたんや？」

問いかけても答え^いがないので、不審に思い、俯いたさくらの顔を覗き込み——ぎよっとした。

さくらの目尻に、涙が浮かんでいた。

「さっ、さくらっ？」

うろたえたように声を上げると、さくらは涙を指先で払う。様子とは裏腹の、妙に落ち着いた声音でようやく応じた。

「……ごめんね。なんでもないの」

「なっ、なんでもないわけないやろ。いきなり泣き出しよって」

「うん……あのね、うれしいの」

さくらは目尻に涙を残したまま、顔を上げる。

「ケロちゃんや月^{ユエ}さんや、雪兎さんやお兄ちゃんや、知世ちゃんや小狼君……みんなみんな、わたしのことを大切に思ってくれてて、すっごくうれしい。わたし、生きててよかった」

くすりと泣き笑いをするさくらに、ケルベロスは「なんやー、おおげさやな」と言って頭を軽く撫でてやった。

ケルベロスがそう言うが、実際さくらは心の底から、本当に強く感じているのだ。

一昨日の夜、一護^{ホロウ}が虚の気配を察知して来るのが、あと少しでも遅かったなら。自分がこうして、家族や級友から親身になって想われているのだという幸せを改めて知ることはできなかっただろう。

——あるいは、ずっと自分自身でも気付かなかったのかもしれない。あの夜からの怯えが、脳裏の奥底に焼き付き、身と心をいつ蝕んでやろうかと息を潜めて続けていたことに。

そんな暗い感情も些細だと笑い飛ばせるほどに、自分が皆に守られているということに。

「そんなの当たり前やろ。わいらとさくらは”なかよし”なんや。

知世とか小僧とか桃矢にーちゃんはまた別かもしれないけど、少なくともわいと月^{ユエ}はさくらにはいつも笑っててほしいって思っとる。そんだけのことや」

「ケロちゃん……ありがとう」

さくらに残っていた涙をぐっと拭い取った。

「わたし、がんばるよ。これからどうなるか分かんないけど、でも、できる限りやってみる。こわいからって、逃げたりしない。

——なんとかなるよ。絶対、大丈夫だよ」

真っ直ぐな眼差しをたたえたさくらの言葉に、ケルベロスも笑って「その意気や!」とガッツポーズをとった。

「元気出たんなら、早う着替えてゆきうさぎ^きんとこ行って来いや」

「うん!」

「わいの分の食事もよろしくな!」

「はいはい」

相変わらず食べ物の頼み事だけは欠かさないケルベロスに苦笑しながらも、鞆を下ろして、クローゼットから私服を取り出した。

「ただいま……」

「遅——いッ!!」

どこんっ。

ドアを開け切るか切らないかというところで、強烈な飛び蹴り。なす術もなく喰らった一護は玄関で盛大に転倒した。

「い……きなり何すんだテメエ!! 門限はちゃんと守ったろーが!」

がば、と青筋を浮かべて起き上がれば、予想通り、廊下のだ真ん中で仁王立ちした髭面の父親の姿。

一心は「ふんっ」と鼻で息をしてから、びしっ!と一護の眉間に人差し指を突きつける。

「うるさいっ! 門限は守れててもギリギリ二分前だバカ息子!

時間には常に余裕を持つのが常識だッ! せめて五分前には帰って来いっ! 腹八分目が丁度いいと教えたのを忘れたか!!」

「最後との脈絡が全くもってワケ分かんねーよ!! 大体それじゃあ門限七時って決める意味ねえだろ!」

「なんだとう!?!」

「おかえりー、一兄。イチニイ 毎回ごくろうさん」

リビングからひよこりと顔を出した妹に「おう、夏梨」と答える一護。その腕はすでに一心の首元に巻きついてぎりぎりと容赦のないヘッドロックを仕掛けていた。

夏梨の後ろからもう一人、エプロン姿におたまを持った遊子が顔を覗かせる。

「あーっ! もうお父さんったら、またお兄ちゃんにちよっかい出して」

「な、何を言うか……! これは俺なりの愛・情・表・現だっ!

ラヴィング・イクスプレッションだ!!」

「なんだその無駄に流暢な発音は。つーかただ単にイチヤモンつけただけだろうが!!」

ごすッ。

怒鳴ると同時に襟首を掴んで床に叩きつける。

顔を硬いフローリングへもろに激突させた一心は無様な呻き声を上げて動かなくなった。

「ったく……とりあえず着替えてくるわ」

「ちゃんとうがいと手洗りするんだよ!」

階段を上がりながら遊子の言葉に「おう」と片手を上げて応じる。二階の洗面所で言われた通りにすると、「15」の札がかかった自室のドアをいつものように何気なく開けた。が、

「コン様アタアア——ツク!!」
ばすん。

「ぶッ!」

見計らったように顔面へ捻じ込まれた衝撃に後ろへよろける。すぐに立ち直り、ひりひりと痛みの残る鼻面を押さえながら怒鳴った。

「ッ……、コン! テメエまで何すん——」

言葉は途中で切れた。

部屋の床にちょこんと、ライオンのぬいぐるみもといコンが立っている。そこまでは問題ない。異様だったのはその格好だ。

どぎついピンク色のすべすべした布地に、半透明のレースがあちこちにびらびらとついた、明らかに女の子向けのファンシーな服。しかも赤ん坊に被せるような可愛らしいフード付き。

原型が丸薬である義魂丸にはっきりとした性別の区別があるのかは分からないが、少なくともコンの嗜好は男（というよりオス）そのものだ。

そのコンがどう見ても不似合い極まりない服を纏っている。

一護はしばし呆然としたが、ゆっくりと人差し指を向けて言った。

「ヘンなモンでも食ったか?」

「んなワケあるかアッ！　ぬいぐるみのオレが食ってもどっから出すんじゃボケエー！！」

すかさず即答される。

「冗談だよ。どーせまた勝手に部屋の外ウロついて遊子に捕まったんだろ」

「だったらどーしたア！　大体な、オレはオメーが死神化するためにいるってのに、こっちに帰ってきてからずうううとあの悪シユミなデザインの札切ればっか使ってるじゃねえか！　一体何が悲しくてヤローの部屋に缶詰にされなきゃならねーんだあ！！　出せ——ッ！　オレを外に出しやがれ——！！　でなきゃグルミ権侵害で訴えて、」

「うるせー！！」
べしゃっ。

にべもない答えと同時に一護の足が振り下ろされ、哀れコンは下敷きとなった。

ぱたん、と後ろ手でドアを閉めながら、

「ギャーギャーわめくな！　下に聞こえんだろ」と釘を刺した上で足を離す。

元々厚みのない頭がさらに潰れたのが気になったのか、コンは「うおおオレのせくすいボディ！」と無意味に顔を擦りまくっている。その上を乗り越えてベッドに寄り、どっかと腰を下ろした。

「ったく……とりあえず、外せるものは外しておけよ。また前みたいにくつついて取れねえやつは石田に直させっから」

「またあの色白メガネかよ！　ぷりんぷりんの女子ならともかく、あんなひよろっひよろのヤローにいじくられるくらいなら死んだほうがマシうぶッ！」

「じゃあ死んどけ」
ばさっ、と音を立てて一護の脱いだYシャツが降りかかり、コンは布地の下でもごもごもがいた。

「ブはアッ！　くせエエ！　ヤローの汗が染み込んで……死ぬうう

うっ!!」

やっと這い出したかと思えば大袈裟なリアクションをとるぬいぐるみの姿を見ながら、一護は枕元に置いていた寝巻用のTシャツを着込んだ。

「ちったあ大人しくしてろよ。それさえなければ夜一さんの言われた通りにしてたってのに……」

「え、な、なんだよ? 言われた通りって」

耳ざとく聞きつけ、リアクションをやめたコンに「話すだけならいいか」と一護は言葉を続けた。

「俺の体にお前を入れて、代わりに学校行かせたのにつてことだよ」

「なにィ!? そそそそんなオイシイ話があったのか!?」

「断ったけどな」

「なんで!? なんでオレの耳に届く前に話が潰されてんだ!!」

「お前を学校に行かせたりしたら、クラスの女子にセクハラ働きまくるだろ。そんなことになったら、後で俺が戻ったときどんな顔して教室入りゃいいんだ。濡れ衣に名誉失墜も大概にしろってんだ」

「アホかテメー! 学校は青春を謳歌するために行くもんだろーが! セクハラの一つや二つもしねえ人生なんて青春じゃねえぞ!」

「胸張って言うことじゃねえよ、この色ボケファンシーライオンが!!」

「おぐ!」

足元に置いていた鞆で再びコンを下敷きにする。これで一センチは頭の厚みが失われたであろう。

溜息をついて、灰色のズボンからジーパンに履き替える。畳んで仕舞おうとしたが、夏場なのでそろそろ洗濯に出すべきかと思い直して、ベッドの上に放る。

そこでふと、ポケットから代行証を取り出した。

——そーいや、今日は珍しく一回も鳴らなかったな。

今はうんともすんとも言わない、手形の中のドクロを見つめたまま再びベッドへ座り込む。

——まあ、毎日のように虚^{ホロウ}に出てこられても困るし、こういう日もあっていいか。

紐の所に指を掛け、くると振り回す。しばらくそうしていたが飽きてしまい、いつものようにベッドの手摺に括り付けた。

ベッドサイドの窓を開け放し、こもった空気を外に逃がしていく。

ついでのように、空へ浮かんだ三日月を眺めた。

何日ぶりの静かな夜だ。

『さくらちゃんはどんなときでも、自分らしく、前向きに受け止めて、元気に笑っていられる。そういう方ですもの』

「……前向きか」

ふと知世の言葉が脳裏に蘇り、ぽつりと呟く。

「そうだよな……まだ何がどうなるかも分かんねえのに、悪い方に考えてちゃ仕方ないよな」

窓枠に肘を置き、頬杖をつきながらぼんやりとする。

「おにーちゃん、夕飯できたよー!」

ドア越しに下の階から遊子の声がして、「今行く!」と返事をする。ベッドを降りる際に、代行証をちらりと見た。相変わらず、ただの札のごとく平然とぶら下がっている。

——とりあえず今は、いつもの生活を満喫するか。

ふ、と口元を緩めて、一護は部屋のドアへと向かった。

その窓の外に立つ気配に気付くこともなく。

「……今日は仕掛けなかったのね?」

尖った屋根の上に座り込んだ獣が問いかけた。どこか嫌味のような含みすら感じ取れる声音だ。

「どうせ、アイリスがそうしろって言ったんだろ」

すぐ脇の電柱に直立した青年が代わりに答える。

電柱から伸びたケーブルの上には、少年が器用に座り込んでおり、青年の確認に対してこくりと頷いた。

「……しばらくは、ふつうにすごさせてやれっていったんだ」
ぶらぶらと足を揺らしながら、少年は言う。

「これからのたのしみを、大きくするためだって」
伝聞の形をとった少年の答えに、獣と青年は一瞬短く息を呑んだ。
だがその口元は、すぐに満足そうな深い笑みの形へと歪められてい
た。

夜一による伝言を通じて、さくらと一護たちが浦原商店に呼び集め
られたのは、それから二日後のことだった。

T o b e C o n t i n u e d

Opus TEN (後書き)

今日は戦闘とか特に盛り上がりのない話でワンクッション置きました。味気ないって言ったら終わりですけども。

一番書きたかったのは、知世と一護の会話。知世はほんとに何でも見透かしちゃうすごい子ですから、一護の本心や性格だつてとつくに把握してるでしょう。ある意味浦原さんと似通った役どころかもしれないなと思いました。

一護は「仲間を護りたい」という気持ちが強い反面、かえってなんでもかんでも抱え込んだじゃう悪いクセがあるような気がします。初稿版を書いていた当時はちょうど虚圏に突入したタイミングだったんで、特にそれが顕著だったような。

仲間や友達と距離を置いて「一人」になることでしか何も護れない、って決めつけて自分の首を絞めてしまうことほど、寂しいことはないですね。

逆にさくらは割と落ち込まない、本当に根っから性格が前向きっていい所があります。

まあ、この二人では抱えている事の重みが違うっていうだけの話かもしれませんが。

あとは、さくらの中で「虚と対峙すること」に対して軽く踏ん切りを付けさせました。

最高の魔術師を超える魔力を宿しているとはいえ、やっぱり心は普通の中学生の女の子。カードの悪さによる異常現象等々には慣れているでしょうが、虚みたいな完全な怪物とかには遭った経験はほぼ皆無。

しかも一回殺されそうになってます。だから前回、知世や小狼と共に虚と遭遇した時、普通に怖くて動けませんでした。

浦原さんに言わせれば、さくらに唯一足りないのは「覚悟」。

このお話の中では、その「覚悟」の「か」の字くらいには構えられる気持ちの切り替えスイッチをさくらに装填させています。

血みどろになって虚と真正面からバトっている一護たちに比べたら、まだずっと些細なものでしょうけど。

毎度おなじみタイトルちえええっく。

「a cloud on the horizon」は直訳すると「地平線の上の雲」なのですが、同時に「行く先の不安」も意味する慣用句。上手い表現をいいところで発掘できました。日本語タイトルとは逆接的な意味を持っています。

これから色々大変なことになる予定。それでも塞ぎこまないで頑張ろうよ、みたいな意味合いでした。

あと、久しぶりにオリキャラのつぐみちゃんを出したついでに彼女の家庭事情の補足説明をさせてもらってます。

ところで、今回コンは一応ぬいぐるみのときは物を食べないってことにしたんだけど……だ、大丈夫だよね？

次回、別名「さくらのちよつとした災難」。お楽しみに。

Opus ELEVEN

「じゃじゃーん」

びらっ、と音を立てて浦原が取り出したのは、細長い紙切れ数枚。洒落たイラストのちりばめられたチケットだ。

「……何だよそれ」

「あれー？ 知らないんスカ黒崎サン。最近オープンした遊園地で、この近くにあるんですよ。しかも入場料さえ払えばその日一日のアトラクションでも遊べるっていう……」

「そうじゃなくて、なんでここで遊園地のチケットが出てくんだって話だよ！」

わざとなのか素なのか判断に迷う受け答えに、一護は苛立たしげに卓袱台をバンバンと叩いた。

トランジエント
His ^{ヒズ} ^{ライキング} Linking
R ^{リポーズ} epose 「^ハer ^{ライキング} Linking,

一大いに楽しんでー

土曜日の午後——店の奥の客間で、浦原と一護の他、さくら、小狼、知世、井上、茶渡、石田が卓袱台を囲んで座り、ケルベロスは茶請けとして用意された饅頭に食らいついている。

週休二日制のため、学校が休みなのは言うまでもない。今日は全員

思いいいに私服でやってきており、ある意味新鮮な光景だった。

そんな最中、詰め寄ってくる一護にいつもの飄々とした態度で接する浦原は、手に持ったチケットをひらひらと振ってみせた。

「いやね、ちよつとしたルートでこのチケットが七枚も手に入っちゃいまして。ご存知ですか？　ここ結構評判らしいっすよ。けど、ボクらはちよつと店空ける余裕がないし、遊園地行くような年頃でもないんでねえ、せつかくですから皆さんにお譲りしようかと思ひまして」

「……え？」

思わず頓狂な声を上げたのは井上だ。隣に座っていた知世も驚きを隠せなかったが、その心境を代弁するように口を開く。

「お気持ちはいれしいのですが……どうして私たちに？　他にお渡しになれる方はいらっしゃらなかったのですか？」

「そうですよ、浦原さん」

ずり落ちた眼鏡を直しながら、石田が続ける。

「第一、今は遊園地で遊んでいる場合じゃないでしょう。まず、ホロウ虚の襲撃に対してどうやって木之本さんの身の安全を確保するか、策を練るのが――」

「だからこそ、ですよ」

ブレの無いはっきりとした声で、浦原は石田の言葉を遮った。相変わらずのらりくらりとした雰囲気は抜けていなかったが、そこには有無を言わせないものがあつた。

「このところ、今の石田さんみたいに虚ホロウが出るの出ないのって張り詰めてばかりで、皆さん参ってらっしゃるでしょう。特に木之本サンは初めて知ったことばかりだし、慣れない上にいきなり狙われているかもしれないと言われて、気軽に外に出る事すらままならない。こんな状況で、結構お疲れなんじゃないっすか？」

「え……あ、い、いえ！　別にそんなこと……」

いきなり話を振られて、さくらは慌てて否定したが、「気を使って無理しちゃ駄目っすよ。先にアタシたちが追い詰めら

れてしまったら、虚にとっても思う壺なんスから」

という浦原の言葉に根負けして、「はうう……」と項垂れた。

「で？ それと遊園地がどう関係あんねや？」

早くも五個目の饅頭の包みを破りながらケルベロスが問い質す。浦原に向けられた全員の目が、同じ疑問を投げかけていた。

「ハ―イ、大事なのはそこなんスよ！」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、嬉しそうに愛用の扇子を広げる浦原。

「そういうことで、皆さんはホイホイ外に出ることも出来ない。でもせっかくの三連休シルバークが入ったっていうのに、どこにも行かないで一人、家で缶詰なんて酷にも程があるでしょ？ そ、こ、で、このチ

ケット。皆さん揃って一緒に遊びに行けば、気分転換できて、その上木之本サンたちのガードを兼ねることもできるしで、まさに一石二鳥なワケっスよ！」

ぱし、とチケットが卓袱台の上に置かれ、全員の視線がそちらに移った。

「ま、そういうことで、皆さんは明日にでも出かけてきて下さい」

「……で、出かけてきて下さい、って」

へらっ、と笑って言う浦原に、一護は戸惑いを隠せず、珍しい生き物でも見るように卓袱台の上のチケットを凝視する。

「言いたいことは分かるけど……唐突だな」

小狼の呟きは、全員の本音を物語っていた。

少しの間、彼らはじーっとチケットを見つめていたが、やがて井上が口火を切った。

「あたしは……明日は何も用事はないよ？」

続けて石田が、「……僕も、特に予定はない」

さらに一護が、「俺もだ。チャドはどうだ？」

すると茶渡は、「……俺も、特にない」

「じゃ、とりあえず四枚は行き先決定、と」

四人の反応を見た浦原が、七枚の中の四枚のチケットを指先で脇に

寄せる。

「木之本サンはいかがつスカ？」

改めて問われてさくらは一瞬躊躇う。

「あ……え、えっと、わたしは……休み中は大丈夫です」

続けて知世が、「私もですわ」

そこへケルベロスが、「二人とも部活の予定は入っとらんって言う
とったもんな。小僧はどうやねん？」

そして小狼は、「……おれも、明日は空いてる」

答えを聞いた途端、

「それじゃ、決まりっスね。明日一日は、学校のことも虚のことも
忘れて、思う存分楽しんできて下さい」

と浦原は明るい声を出す。

一護たちは一瞬顔を見合わせてから、それぞれ一枚ずつチケットを
手に取っていく。

チケットには、イラストの上に遊園地の名前と有効期限が記されて
いる。一護はしばしそれを見つめていたが、ふと浦原の方に向き直
った。

「浦原さん……その、色々気使わせて悪い。ありがとな」

軽く頭を下げる一護に目を瞠ったのは浦原だけではない。他の七人
も同じだった。

「どうしたんスカ、黒崎サン。急に改まっちゃって。気味が悪いっ
スねー」

「人が礼言ってんのに『気味が悪い』はねえだろ。ただ、俺たちみ
んなアンタに世話になりっ放しだから、これくらいは言っておこう
と思っただけだよ」

忘れずツツコミを入れた上で、頭を掻きながらぼやく一護の言葉は、
誇張でもなんでもない。

死神の力を取り戻す修行から処刑阻止のための手引きから何から何
まで、一護たちが浦原の手を借りてやってきたことが多いのは紛れ
もない事実である。

浦原は軽く手を振って

「いいんすよー。お互い様ですから」

と答えた。そこへ、今度は「浦原さん」と穏やかな声で、さくらが呼びかけた。

顔を向けると、さくらは、ふわりと花が咲くような優しい笑顔を浮かべる。

「わたしからも……ほんとうに、ありがとうございます」

不意打ちの感謝の言葉に、浦原はらしくなく呆けてしまったが、すぐに笑い返して「どういたしまして」と返す。

さくらが微笑んだ、たったそれだけのことで、その場の誰もが心を洗われるような感覚に包まれ、自然と空気が柔らかくなった。

――が。

「じゃ、そーいうことで……皆サン一人二千円ずつ支払って下さいねっ♪」

これ以上ないほど爽やかな笑顔で言っただけの浦原の科白が、その空気を完膚なきまでにぶち壊した。

すてーん！とさくらがギャグマンガの見本のごとくひっくり返る。

「なんじゃそりゃー！！」と、ケルベロスが大阪名物ツツコミウラ手パンチを炸裂させる。

「ちよっと待て一人二千円って……金取んのかよ！」

数秒を要してから言葉の意味を呑みこみ、我に返った一護が、ばん！と卓袱台を叩いて詰め寄った。

浦原は扇子を口元にやりながら、平然と

「当たり前じゃないスカ。世の中ギブアントテイクって言うでしょ？」

「せ、せやけど、さっき『譲る』って言うてたやろ！？」
ケルベロスが問い質せば、

「“タダで”譲るとは一言も言ってませんが？」

あっけらかんと開き直る。これにはケルベロスも憤慨して「確信犯かい！っちゅうかただの詐欺やないか！」と騒ぎ立てる。

さくらはその様子に「ほええ」と気の抜けた反応しか出来ない。知世も口元を押さえて「まあ」と驚いた様子を見せている。

井上、石田、茶渡はある程度免疫があるのでそれほど動揺はしていない。むしろ「やっぱり」と納得すらしていた。

「し、しかも一人二千円って、このチケットに書いてある料金よりも高いんじゃない……」

横でチケットを見ていた小狼が呟くと、

「そーだよ、なに勝手に値上げしてんだデメエ!!」

怒った一護がさらに怒鳴り散らした。

「しょうがないじゃないスカ、これくらいじゃないと元手がとれないんですから」

「何が元手だ! つーか『ちよつとしたルート』って何だ! どーせ人からパクっただけだろ、この強欲裏商人!」

「ぱく……!?!? イヤ、いくらなんでもそんな犯罪行為に及んだりしませんよアタシは!」

「道路の下に無許可で穴掘った奴が言うセリフかッ!!」

一護と浦原の口論——といっても一護が一方的に怒鳴って浦原はそれを受け流している——は、しばらく続き、他の七人はげんなりとした表情で眺めていた。

エリオル君へ

お元気ですか? 日本はまだ暑いですが、わたしは元気です。

イギリスは今も温かいのでしょうか。

最近、くわしくは話せないんですが、ちよつと大変なことがあります。

それで、説明すると長くなっちゃうんだけど、わたしもいわゆる幽霊のようなものが見えるようになったちゃって……。

でも、いいこともありました。

とてもすてきな人たちに出会えたんです。

最初の頃はすごくとまどったけど、みんなすごく優しい。

まだ、会ってからあまり時間もたってないし、知らないことのほうがいっぱいあるけど、もし迷惑じゃないのなら、もっともっと仲良くなりたいてって思ってます。

明日、その人たちと一緒に遊園地へ行きます。

今度写真も入れて、紹介しますね。

観月先生や奈久留さん、スピネルさんにもよろしく伝えてください。

それでは、また今度。

さくらより

午前十一時、遊園地『友座^{ともざ}プレイパーク』前広場の階段――

シヨルダーバッグを提げた石田は、手摺に寄りかかりながら文庫本に目を通していた。

休日なので人の通りが多いかと踏んでいたが、意外にも人口密度が低く、つい数分前にここへ到着してからも、階段を通った人数は片手で足りてしまう程度だった。

その人気の少なさにかこつけて、石田は無言で本に読みふける。

一護たちと約束した集合時間よりも三十分早い到着だったが、遅れてしまうのも癪だったので、早めに家を出てきたのだった。

他の人間が来るのはまだだろう――そんな石田の予想は、早くも覆

されることとなる。

「石田」

低い声で呼びかけられて、石田は顔を上げた。

そこに立っていたのは、茶渡だった。

「茶渡くん。もう来たのか」

「ああ……お前こそ、随分早いな」

「まあね。後から来る黒崎をからかってやろうと思ってさ」

眼鏡を指先で押さえる石田の言葉に、茶渡は「お前らしいな」と小さく笑みを浮かべる。

そして、手摺のすぐ横にあった植え込みの所に積まれたレンガの上へ腰掛けた。

沈黙。

しばらくして、小走りで駆けるような足音が近付いてきた。二人が殆ど同時に顔を上げる。

足音の主は、小狼だった。

小狼は先に来ていた石田と茶渡に気付くと、「ど、どうも」と軽く頭を下げた。対して、茶渡が「……ム」と軽く片手を挙げる。

「やあ、李くん。早いね」

石田がそう言うと、

「時間まで待とうと思ったんだけど、落ち着かなくて……」

ときこちない態度で答えた。

一護や井上は別として、茶渡と石田は会った回数がまだ少ないので、どう接したらいいのか迷っているようだ。

そんな小狼の姿勢をほぐす気の利いた言葉も思い付かないので、二人とも流れに乗るように黙り込んでしまった。小狼も大して気にすることなく黙り込み、二人に挟まれるような位置で佇んだ。

沈黙。

……沈黙。

……沈黙。

——なんか、気まずいな……。

これが、石田の感想。

——何か話した方がいいのか？

続いて、茶渡の感想。

——な、何を話したらいいんだ…。

さらに、小狼の感想。

一見すると何の共通性もなさそうな三人だったが、実はよく似た部分が二つだけあった。

一つは、自分から積極的に話しかける性格ではないということ。もう一つは遅刻という初歩的なミスをいけ好かない、比較的几帳面な性分であるということ。

この二つの性格が、今の何ともいえない堪えがたい空気を醸し出している。

一つ目の性格が一致しなければ誰かが場を盛り上げただろうし、二つ目の性分のせいでこの三人だけが居合わせるという状況が出来上がってしまった。

三人は平静を装いながらも、内心で「どうしたらいいんだ」と頭を抱えたくなった。

そこへ、この居心地の悪いシチュエーションを打破してくれる人物が現れた。

「石田くん！ 茶渡くん！ 李くん！ おっはよう！」

楽しいテンションで大きく手を振りながら駆け寄ってきたのは、井上だった。にこにここと笑って走る彼女の姿を見て、三人は思わずほっと息を吐いていた。

井上は三人の所へ来ると、

「ああーいい天気！ 今日、晴れて良かったね！」

と空を見上げながら明るい声で言う。

石田と茶渡と小狼は、「ああ、そうだね」「ム……」「はい……」

と返事をする。

これだけで会話が成立しているように見えるのだから、不思議なものだ。

「三人とも早いね！　まだ決めた時間まで余裕あるのに」

「井上さんこそ……」

「……そうか？」

「まあ、ちよつと……」

一般的な基準だと気前がよくないと言われそうな返事だったが、大らかな井上は気にも留めなかった。

「あ、あのねあのね！　昨日帰りに商店街の方に寄ったら、たまたまこの遊園地のパンフレット見つけたの。ほらっ、ほんと色んなアトラクションがあるんだね！」

井上は持ってきていたハンドバッグから折り畳まれたパンフレットを取り出し、三人の前で広げてみせる。

ジャバラ折りのパンフレットには、遊園地全体の大まかな地図が各アトラクションやコーナーの案内と併せて描かれていた。

「あたしはねー、えーと……ここのジェットコースターと、これと、これと、あとこれに乗ってみたいなーって思ってるの！」

アトラクションのいくつかを井上が指で示していく。その表情は無邪気以外の何物でもなかったが、示されたアトラクションを目で追った三人は対照的に青ざめていた。

何故なら、

——全部絶叫系だ……！！

井上が「乗りたい」と告げたアトラクションは、ジェットコースターは勿論のこと、どれもタイプは違えど明らかに心臓の弱い人には勧められない系統のものばかりだったからだ。ほのぼのとした雰囲気振り撒いている井上には、おおよそ似つかわしくないチョイスである。

「……い、井上。あまり激しいのばかり乗っていると、気分が悪くなるんじゃないか？」

茶渡がおそろおそろといった様子で意見を挟む。自分の願望を出すわけではなく、うまく彼女を気遣うような形の言い方に、小狼と石田は思わず「ナイスフォロー！」と親指を立てたくなった。

だが、

「だーいじょうぶ！ あたしこう見えてタフだから！」

井上は笑顔を緩めることなく答える。その言葉に石田が先行き不安になったのは言うまでもなく、小狼に至っては「こういうのは苦手だ」って言った方がいいんじゃないだろうか」と真面目に考え込んでしまった。

「悪い！ 遅れたか！？」

慌てた声と共にぱたぱたと駆け付ける足音に、四人が視線を動かす。息切れをしながらそばへ来たのは、一護だった。先に来ていた小狼たちを見つけて、集合時間に遅刻したと思ったらしい。

「黒崎くんおはよう！ まだ全然余裕だよ」

井上がそう言うのと、一護は額の汗を手で拭いながら「そ、そうかと安心したように答えた。

「あと来てないのは……知世とさくらだけか」

その場に揃った人間を見回して、一護が確認する。茶渡が「そうだな」と相槌を打った。

「李くん、二人から連絡は何か連絡は受けてるかい？」

石田に尋ねられて、小狼は頭を横に振った。

「いや……本当はおれが迎えに行こうと思って、今朝電話したんです。でも、さくらは大道寺と一緒に来るから、って」

「あの二人、仲いいもんね。女の子だし、おめかしして来るつもりなんじゃないかな」

会ってから数日、いつも行動を共にしているさくらと知世の姿を思い浮かべて井上が言ったが「おめかし」という言葉に小狼の表情がほんの一瞬だけ引きつる。そのことに誰も気付くことはなかった。すると、不意に車のエンジン音が近付いてきて、一護たちは反射的にそちらへ目をやった。

細い道路の向こうから、一台の暗色の自動車が滑り込んでくる。洗練されたラインのみをかき集めたようなフォルムが特徴的な、いわゆるリムジンの類とすぐに分かった。

リムジンは一護たちがいる横に停車したが、身に覚えがないので、

ぼんやりとその動きを眺めるしかできない。ただ一人だけ、小狼が
ぎくりとした表情のまま硬直している。

止まったリムジンの運転席の扉が開いた。降りてきたのは、車体と
同じ色のスーツをきっちりと着こなし、サングラスをかけた女性だ
った。

その女性に何故かただならぬものを感じて、一護たちは思わず物珍
しそうに凝視してしまう。さらに助手席からも、同じ格好をした別
の女性が降りてくる。

運転席から出てきた女性が、何も言わずに後部座席のドアを開けた。
そこから優雅な所作で現れたのは、ちょうど話題に上っていた知世
本人だった。

「お待たせしました、みなさん」

小首を傾げ、にっこりと微笑み、柔らかな声音で挨拶をする知世に、
一護が思わず「おう……」と返事をする。

井上、茶渡、石田はリムジンと黒スーツの女性数人という何とも奇
妙な組み合わせに呆然としていた。その脇で、小狼が予想通りの展
開に溜息を吐く。

開いたままの後部座席からももう一人、やはりスーツにサングラス
という出で立ちの女性が降りてくる。合計三人となったその女性達
は、無言で知世の目の前にぴたりと足を揃えて整列した。まるで軍
隊のように計算されきった動きだった。

「——では、お嬢様」

「はい。連絡したら、お迎えをお願いしますね」

女性の一人が発した科白に、「おじょーさま……!?」と一護は大
声を上げそうになった。しかし、知世はいたって平然とした態度で
言葉を返していた。

女性達は知世に軽く頭を下げ、くると振り返ると、一護たちにも
会釈した。一護たちはぎょっとするが、体が勝手に礼を返していた。
女性達がそのまま車に乗り直そうとして、ふと、何かに気付いたよ
うに動きを止める。それを見とめて、知世が「あら？」と開きつ放

しの後部座席を覗き込んだ。

「さくらちゃん？　どうなさいました？」

呼びかけられた名前に一護たちはびっくりと反応する。ドアの陰になってよく見えなかったが、一緒に乗って来ていたらしい。

覗き込んでいた知世は中へ手を伸ばし、ぐい、とさくらの腕を引っ張った。

「さあ、さくらちゃん。みなさんお待ちですわ」

「で、でも、や……やっぱり、この格好は、ちょっと……」

「まあ！　恥ずかしがることはありませんわ。とても似合ってますしやいますもの」

「そ、そういうことじゃなくて……」

何故か降りるのを渋っているさくらと、それを急かす知世。耳に入る二人のやりとりに、一護たちは首を傾げた。

だが、ようやくリムジンから姿を現したさくらを見て、嫌でもその理由を知ることとなる。

絶句。まさしく、一護たちはあらゆる単語という単語を絶やし、啞然とした。

さくらが身に着けていたのは、一見カジュアルだが、明らかに凡人の守備範囲を離れたオーダーメイドとしか思えないデザインの服だった。

上は、セーラー服を彷彿とさせる流線型のラインが入った臙脂色の襟に、ふわりと花のように広がった布地のリボンを結び付けた半袖の白い上着。袖の部分はレースでできていて、右側の襟には星の形に切り抜いた黄色いフェルトを刺繍している。下に穿いたキュロットスカートは、シンプルな薄桃色のチェック柄だったが、前で布を合わせる所を桜の花びらを模したカフスボタンで留めていた。縁の所にもレースがあしらわれている。そして、ご丁寧なことに首には桜の花のブローチがついたチョーカーを着け、頭には薄紫色のベレー帽が斜めに載っかっていた。

> i 1 9 4 1 2 — 5 4 3 <

「……………えーと」

戸惑った声を漏らし、一護はばつが悪そうに首の後ろを掻く。

その目の前で知世はにこにこ微笑み続け、さくらは一護たちの反応に、恥ずかしそうに俯いた。後ろにいたリムジンは、いつの間にか走り去ってしまっている。

さくらの格好は確かにお洒落といえばお洒落だったが、Tシャツやジーンズ等比較的ラフな服装で揃っている一同の中だと、雰囲気としては確実に浮いている。

だが、それをはっきりと口にするほど無神経でもないのです、一護はおそろおそろといった様子で「ど、どうしたんだその格好？」と問うた。

さくらが「えっ、えーと、これは……」と口ごもるので、

「ひょっとして……それ、大道寺が作ったのか？」

と小狼が尋ねた。

さくらは答える代わりに「あははははは」と笑って誤魔化す。

「やっぱりそうなのか」と小狼は自分の予想が的中したことを悟らされた。

「クロウカードがさくらカードに変わってしまったから、さくらちゃんにお洋服を着ていただく機会がめっきり減ってしまいましたもの！　ですから、せめてお出かけの際にはこうして着ていただこうと思って、前々から用意していたんです」

嬉しそうな調子で意気揚々と言う知世に、一護たちは妙な顔をせずにはいられなかった。さくらは困り果てた顔で口を開く。

「で……でも、お出かけて言っても遊園地で遊ぶだけだし……」

「まあ！　ただのお出かけではありませんわ。黒崎さんたちと親睦を深めるためのお出かけですよ！」

「……不満はないが、微妙に目的がすり替わってないか？」

ぼそりと正直な感想を呟いたのは茶渡である。脇で一護が何度も頷

いていた。

しかし知世は夢見る少女のように両手を握り、目をキラキラと輝かせて言葉を続ける。

「これは真正銘特別な日！　やはり特別な日には――」

「――それなりの服装をせんとな！」

知世の鞆へぬかりなく潜り込んでいたケルベロスが、頭を出しながら科白を引き継いだ。いきなり出てきたケルベロスに一護たちは驚いたが、さくらは「ケロちゃんまで……」と項垂れる。

「そして！　もちろんさくらちゃんの超絶かわいらしい遊園地での一日は、私がすっかりビデオに収めさせていただきますわー！」

どこに持っていたのか、ビデオカメラを手にしてレンズをさくらに向けると、鞆から飛び出したケルベロスが「わいも忘れたらあかんでー！」と横から割り込んだ。

項垂れたさくらがさらに深い溜息を吐いた。

「……なあ、あいつらっていつもああなのか？」

その後も様々なアングルからさくらの姿を撮影する知世と、合わせてポーズを決めるケルベロスを見て、一護が小狼にそっと耳打ちする。

小狼もいささか辟易した顔で「いちおう……」と軽く頷いた。

どうも知世は、さくらに自分の作った服を着せてビデオに撮影することを趣味としているらしい。

ケルベロスも自分を含めて撮影してもらえるので、調子に乗って便乗しているのだろう。

――ただの中学生かと思ってたけど……なんつか、ちょおおっと変わった奴だな……。

一護が胸中で密かに浮かべた感想が、実はさくらと一致していると誰一人として知る由もない。

ところが、

「奇遇だな大道寺さん！　実は僕も同意見なんだ！」

突然知世の元へ歩み寄った石田に、一護と茶渡だけでなく、小狼も

思わず「ええっ!？」と驚いて耳を疑った。

石田は眼鏡のレンズに日差しをきらりと反射させ、普段のポーカーフュイスとは裏腹の嬉々とした表情を浮かべて言い続ける。

「やはりその場のシチュエーションと目的に最適化した服装を欠かすべきではないよ!」

「まあ! 分かっていただけでうれしいですわ」

「それに、この服も素晴らしいな。君が自分でデザインしたのかい?」

「ええ。全体ではなく、所々にアクセントを加えて、カジュアルさを引き出してみましたの」

「このレースの袖がいいね。他の部分とうまく雰囲気合っていて……」

——しまった。アイツの趣味が裁縫だっことを忘れてた……!

戸惑っているさくらの前で知世と洋服談義に花を咲かせる石田に、

一護は頭を押さえた。ソウル・ソサエティ尸魂界へ同行した時、わざわざマントの予備を持ってまで自分の戦闘コスチュームをこさえてきた石田だ。食い付くのは当然といえば当然のことだった。

「——うん。これはまさしく、木之本さんだからこそ魅力を存分に発揮できるデザイン。彼女が着て初めてその意味を成す努力作だ」

「それは私にとって、これ以上ない最高のほめ言葉ですわ!」

着せられている当事者の本音を置き去りに、楽しそうに話し合う石田と知世。クールだと思っていた石田の意外な一面を前にして、さくらは目を瞬かせている。

「ホントだねー。すっごく似合ってるよ、さくらちゃん!」

いつの間にか傍へ寄ってきていた井上に、さくらは「はい!？」と後ずさった。

茶渡が「井上まで……!」と動揺を隠しきれない。

「さくらちゃんは元々かわいいけど、それが三割増になった感じだね。ほんとにかわいい!」

「ほっ……ほええええ」

間近でにこにこ屈託のない笑顔を浮かべた井上の言葉に、さくらはリングのように顔を真っ赤にした。

井上はその笑顔を浮かべたままくりと振り返り、

「ねっ、黒崎ちゃんと茶渡くんもそう思うよね？」

と同意を求める。いきなり名指しされた二人は「え!？」と咄嗟に反応できなかった。

しかし、井上の期待に満ちた目の輝きに逆らう科白を返すわけにもいかず、

「あ……ま、まあな」

「……に、似合ってはいるんじゃないか？」

渋々と答えるしか術がない。

「ほら! みんなもああ言ってくれてるんだから、自信持って!」

一護と茶渡の返答に、井上がさくらにそう言った。さくらが恥ずかしがっているのは「服が似合っていない」と思っているからだ彼女は見なしたのだろう。

実際の所は違うので、さくらは心の中ではららと涙を流しながら

「そういうことじゃないんだけど……」と呟いた。

「李君はどう思われますか？」

今度は知世が小狼に話を振ったので、やはり本人も「え!？」と声を上げた。

言われてから改めてさくらの格好を見直す。確かにラフな普段着の群れの中では浮いてしまいそうだったが、単体で見ると、大して違和感はない——むしろ、確かにかわいらしい。

そんな結論に至った途端、小狼は無意識に自分が赤面するのに気付いて、

「えっと、その……悪くない、と、思う」

そっぽを向きながら、しどろもどろといった様子で答えた。だが、

「なんや、もっと気の利いたことは言えんのか? まったく、小僧はいつまで経っても小僧のまんまやな」

近くへやって来て嫌味を言うケルベロスを、「なんだと!」と睨み

つけた。ケルベロスもぎろりと睨み返し、二人の間で火花が散る。
「そ……そういや、なんだったんだ、さっきのリムジン？　どっかのタクシー会社か？」

険悪になり始めた空気の中、一護が思い出したように疑問を口にした。茶渡や井上、石田も「そういえば」というような顔をして、知世の方を見る。

知世は頭を横に振って、平然と答えた。

「いいえ。私の家で所有してるものです」

「へえー」

「一緒に乗っていらっしやったのは、ボディガードの皆さんですわ」

「はあー、ボディガード……」

知世の答えを何気なく流していて、ふと、一護たちは答えを反芻した。

リムジンを家で所有。

ボディガードと同行。

……………。

「はあああッ!？」

明らかに庶民には手の届かない待遇に、一護が大声を上げた。他の三人も目を丸くしている。

「家で所有……って、アレをか？　お前ん所の自家用車がリムジンなのか!？」

「はい」

「っていうか、ボディガッ……ボディガードが付いて!？」

「し、失礼だけど大道寺さん。君の親御さんの職業は？」

動揺のあまり舌がもつれかけている一護を押しつけて石田が聞くと、知世はにっこりと微笑んで「母がおもちゃ会社を経営していますわ」と答えた。

「経営……ってことは、つまり代表取締役、みたいな……」

「ええ。社長を務めております」

全く否定しない知世。その返答に、茶渡が「社長令嬢か」小さく呟

く。

「すごい！ ボディガードの付く中学生なんて、なかなかいないよ！」

驚く、というよりも感激した声を上げる井上。微妙に重点のずれた言葉に一護は「そういうことじゃねーだろ」とツッコみたくなった。「あら、死神さんとお知り合いの高校生もなかなか珍しいのでは？」微笑んだまま言うことはしっかりと言う知世に、井上は「あ、そういえばそうだね」と照れ笑いをする。

知世の社長令嬢という身の上に百面相する一護たちをさくらは眺めていたが、ふと、少し離れた所に立った街路樹が不自然に揺れた気がして、「ほえ？」と怪訝な声を出した。

「どうした？」

いち早く気付いた小狼が話しかける。

「……あの、なんかあそこの木だけ揺れたように見えただけけど……」

さくらが街路樹を指差して言うと、他の七人もそちらへ目を向けた。しかし、街路樹の枝も葉も微動だにしない。

「鳥でもおっつんとちゃうか？」

ケルベロスが当てずっぽうに言ったが、さくらは納得できないらしく「そうかな」と首を傾げる。

すると。

がさがさがさがさ。
不意に、街路樹の根元に近い辺りの葉が上下左右に揺れた。それを見た一同は目を瞠る。

「……ほんとに揺れてる」

「けど、あの動きは鳥じゃないぞ」

井上が不安そうな面持ちで言い、茶渡が冷静な声音で告げた。葉はなおも揺れ、そこに潜んだ見えない存在を主張し続ける。

がさがさ、がさがさがさがさ。

やたらと小刻みな揺れ方だった。いてもたってもいられず、一護が

直接その正体を確かめようと足を踏み出す。その瞬間、がさつ、と枝が大きく軋んだ。

「いっ、のっ、うっ、えっ、すア——んッ!!」

奇声と共に、ぱっ、と黄色い物体が葉の群れを突き破って飛び出してきた。立ち尽くしていた井上目がけて一直線に飛んでいく。ある程度距離が縮んで、その物体の姿形が視認できた。

丸っこい輪郭のライオンのぬいぐるみ——

そこまで理解して、一護が真っ先に動いた。

「マ——イスウィ——レディ——うぶッ!？」

ばしっ!と容赦のない音を立てて、一護の振り下ろした空手チョップがぬいぐるみの後頭部に食い込む。

ぬいぐるみ——コンはロックオンしていた井上に到達できず、地面へ敢えなく墜落した。

へこんだ後頭部を上にして、レンガの地面へ突っ伏したコンは、辛くも上半身を引き上がらせて、目の前で仁王立ちになった一護を睨み上げる。

「んなッ……なにすんだテメエ! あとちょっとで神々の谷間ヘゲツトインできるとこだったのに邪魔しやがってぐえッ!」

円筒形に近い腕で指差して怒鳴るが、言い終わる前にスニーカーの靴底で押し潰された。

「てめえ……コン、なんでお前がこんなトコにいるんだよ!」

普段の倍以上の本数の皺を眉間に寄せて、一護がコンを踏みつけたまま問いただす。

コンはというと、聞かれたくなかった核心に触れられてびくりと体を硬直させた（綿とフェルトだけの体が硬直できるのかは分からないが）。

「おっ、オメーにわざわざ答えてやる筋合いはないィぎああアアアッ!」

答える代わりに生意気な口を利くコンに、一護はぐりぐりと決るように踵を回して、さらにその体を硬いレンガへ押し付ける。

一見すると、か弱いぬいぐるみに一方的な八つ当たりをしているとしか思えない光景。他の七人、特にさくら、小狼、知世、ケルベロスは啞然とするしかなかった。

「綿はみ出すのが嫌だったらとつとと答えるこのスケベライオン」

「ゆゝッ……ゆゝッ！　言うがら言いますがら、ヤッ、ヤメデエ——！！」

脅迫じみた一護の尋問に観念して、コンが靴底の下でじたじたともがいた。

一護は溜息を吐くと、ようやく足を離してコンを解放した。自由になったコンは再び起き上がって、地面の土埃がこびり付いた顔をごしごしと擦る。

ゆっくりと屈んでコンを見下ろしながら、「……で？」と一護は続きを促した。

「お……オメーが休日に出かけるなんて珍しいと思って、ひよっ、ひよっとしたらオレ様の知らない所でピチピチギヤルと楽しんでんじやなかうかと案じて、それで……」

「つけてきたのか？」

「イヤ、つけたっつーか、ちょっと霊圧をたどって——」

「つけてきたんだな？」

「………ハイ、サヨウニゴザイマス」

しつこく問い詰めた結果、冷や汗をだらだらと流してコンが白状した。

一護は眉間の皺をさらに深くすると、無言で頭の端を引っ掴み、ジーンパンから代行証を取り出した。

その動作を見て、頭だけを固定されて半宙吊り状態となったコンが「な、何する気だテメー！？」と再び暴れ始める。

「お前は当分俺の体にもそっちのヌイグルミにも入れてやらねえ」

「ふざけんなア！　テメーの体はともかく、このせくすいぼでいからも追放されるなんざあってたまるかアアア——ッ！！」

「うるせえ暴れんな大人しくしてろ！」

「ヤダヤダヤダ——ッ!!」

コンは喚きながら柔軟性のある体を前後左右へ揺らし、一護が突き出す代行証を巧みに回避する。両手の塞がった一護はうまく捉えられず、悪戦苦闘する羽目となった。

「いつ……一護さん、そのぬいぐるみは？」

代行証を振り回し、それを躲し、というささやかな攻防が繰り返される背後から、さくらが半分引きつった顔で肩越しに覗き込んだ。さくらだけでなく、小狼、知世、ケルベロスの視線の先で、ライオンのぬいぐるみが釣りたての魚のようにあちこちへ体を仰け反らせている。コン自身は逃げるのに夢中でさくらたちの存在に気付いていない。

「コンさんとおっしゃってましたが、キツネさんではなかったんですのね」

少し前にケルベロスと交した会話を思い起こして、知世が驚いたように口元を押さえて呟いた。

「……こ、このぬいぐるみ……どんな仕掛けで動いてんねん!？」

さくら以上に引きつった表情で呆然とケルベロスが言うと、小狼はコンと同じかそれ以上にぬいぐるみっぽい本人の姿を横目に「お前が言うのか」と心の中でひとりごちた。

一護はコンを掴んだ手をそのままに顔だけ振り向かせて、

「おー、ちょっと待ってろ。すぐ終わっから」

と告げる。そこで、はた、とコンは動きを止め、一護が話しかけた先を見た。

——こっ、これはッ……!

視線の先にあったのは、知世製作の洋服に身を包んだ、さくらの姿。——乳はなけれどカワイさ全開のつぶらな瞳! それを強調するかのようなこの大サービスな服! ああ、神はオレを見捨てていなかった……!

いるのかいないのか甚だ疑問な神の施しを確信したコンは、縫い目の糸が緩むのも構わず大きく体を捻り、一護の手から逃れた。

一護が「あっ、コラァ!」と怒鳴るのを尻目に、思い切り地面を蹴って、さくら目がけてジャンプする。

「そのプリチーなおじょーさあん! なごみ役にカワイイライオンのマスコットはい・か・が——!?!」

嬉々とした声を上げて自分に向かってくるコンを前に、さくらは「ほええええ!?!」と叫ぶしかない。

コンの中のメーターが、ターゲットとの距離十センチを切ったその刹那。

ばごッ!!

鈍い音を立てて、黄色い体はあさつての方向に吹っ飛んだ。脇にいた小狼が回し蹴りを喰らわせたのだ。

惜しくもターゲットに到達できなかったコンは放物線を描いて地面に落ち、さらに数回バウンドしてからうつ伏せの姿勢で落ち着いた。さくらだけでなく、知世やケルベロス、一護たちでさえも、小狼の行動に目を点にしていた(ケルベロスは元から点だが)。

コンは少しの間を置いてから小さく呻き声を漏らして、体を起き上がらせる。頭を上げた途端、片目の黒いビーズが、不意にぼろりと落ちた。

「……ああああああアアッ!! めがっ、目がッ、オレの目がアアア——!!」

辛うじてほつれかけた刺繍糸で繋がったビーズの目をぶら下げ、コンはさらに騒ぎ立てる。

その背後へゆっくりと影が近寄った。ビーズの目を落とさないように糸をいじっていたコンは、ふと影に気付いて、振り向こうとした。べしっ。

「うおッぷ!」

足音を抑えて近付いていた一護の代行証が真上から叩き付けられ、口から丸薬がはじき出された。動力源を失ったぬいぐるみは、そのままへにゃへにゃと地面に潰れる。

一護は盛大な溜息を吐きつつも、ぬいぐるみと丸薬を「自業自得だ」

と呟きながら拾い上げた。代行証をポケットにしまうと、

「さくら、大丈夫だったか？」

と尋ねる。さくらは頷いたが「あ、あの、それ……？」と一護が手にしているぬいぐるみと丸薬を指差した。

「ああ、これか？ 義魂丸って言ってな。擬似魂魄、っていうか、まあ……ホラ、俺が死神化すると体の方が抜け殻になっちゃうだろ。その代わりにコイツを入れておくんだとき」

「……いたれりつくせりですね」

丸薬を手の中で転がす一護に、知世が目を瞬かせながらコメントする。対して一護は、

「俺としてはコイツに身代わりなんてさせたくねーから、あんまし使わないけどよ」

とげんなりした顔で答えた。

「色々あるんやなあ……。せやけど小僧、いきなり蹴り飛ばすことはなかったんとかやうか？」

ケルベロスに素朴な疑問を投げかけられて、小狼は「い、いや、それは……！」と口ごもった。

まさか「咄嗟にさくらの身の危険を感じたから」などという小っ恥ずかしい科白を吐けるわけがない。答えられず動揺している小狼に、さくらが首を傾げた。

「いいんだよ、蹴り飛ばすくらい。あのまま抱きつかせたら何されてたか分かんねーぞ」

丸薬をポケットに突っ込んだ一護が言うと、今度はそれが意味する内容の方が理解できずに、ケルベロスは頭上に疑問符を浮かべた。

「石田、悪い。コイツ預かっててくれ」

不意に一護がずっと突き出したぬいぐるみに、石田はあからさまに不快そうな表情を浮かべた。

「なんで僕が……。僕は荷物持ちで来たんじゃない」

「俺、バッグとか持ってきてねえんだよ。こんなヌイグルミぶらぶら持ち歩くわけにもいかないだろ」

手ぶらの一護と違い、ショルダーバッグを提げている石田は、もつともな理由に軽く溜息を吐いた。

「仕方ないな……。分かったよ」

「あと、時間のあるときでいいから、ついでにコイツの目も直しといてくれるか？　じゃないと、丸薬戻したときにギャーギャーうるせーから」

「いちいち手間のかかる改造魂魄だね」

「文句はコンに言ってくれ」

ちくりと突き刺された嫌味を適当に流しつつ、ぬいぐるみを手渡す。石田は、先刻までとはうって変わってぴくりともしないぬいぐるみを軽く眺めてから、自分のバッグに押し込んだ。

「うっし……邪魔者もいなくなったことだし」

「そろそろ行くか？」

茶渡が声を掛けると、一護は「ああ」と笑って応えた。

「よし、今日一日みんなで楽しもう！　さくらちゃん、行こうっ！」

「えっ？　ほ、ほえー！？」

井上が気合を入れるように声を上げ、自然な動作でさくらの片腕を取った。そのまま、さくらが戸惑っているのも構わずぐいぐいと引っ張り、遊園地の方へと駆けていく。

一見すると強引だったが、井上らしいスキップだ。さくらも無理に振り解こうとしないので、満更でもないのだろう。

「ホント、あいつって誰とでも仲良くなれるよな」と一護が呟く。

その横で、知世がさっそくビデオを回して、井上とさくらの姿を撮影していた。

井上は遊園地の入り口近くまで来ると立ち止まり、一護たちを振り返って、

「みんなー！　早く早くー！」

待ちきれないといった様子で、手を大きく振った。

一護たちは互いの目を見合わせると軽く笑い、ゆっくりとした歩調

で井上とさくらの方へと向かった。

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

Opus ELEVEN (後書き)

『BLEACH』と『CCさくら』の出演陣で遊園地に行こうぜれつつらごー、そして知世ちゃんがプチ暴走なお話でした。

劇場版「封印されたカード」とかぶってることは否定しませんごめんない。

でも初段階から書きたくてたまらなかった内容でもあります。これで互いに距離を縮めましょう、みたいなそんな感じ。

それから、作品の季節設定は九月の中旬くらいってことにしまして、それで土曜・日曜・敬老の日が連チャンしたシルバーウィークの日曜日にお出かけ、というスケジュールを組ませております。

懲りもしないでタイトルちえええええつく。

タイトル見ればわかると思いますが、今回も「Intersection」と同じく連作です。

「Transient Repose」は「束の間の安息」。

初稿版では、reposeではなくhappinessで「束の間の幸福」としていたんですが。今回読み直してると「平穏ではあるけど、幸福って言い切っちゃうのもおかしいなあ。まだ何にも解決してないし」と違和感を覚えたので改訂いたしました。

「Her Linking, His Linking」は、「彼女のシユミ、彼のシユミ」というような意味。

知世は勿論、石田とかその他の他もろもろのメンバーの変わった嗜好が互いに判明したので、そこから考えました。

さくらたちとは本編中で初対面のコンでしたが、数分後にはあえなく封印。だって、あのコンとさくらを絡ませるって難しくないですか。一護たちとケロちゃんならともかく、かわいい少女漫画キャラと典型的な女好きキャラですよ。絶対カオスに成り果ててとんでもないことに……！という理由で以上のような扱いになりました。ほ

んとすみません。

ちなみに今後出す予定も今のところないです。あえて言うならKE ROKONとか。復活しなければ永遠に丸葉のままですが。

ていうか何気に「乳は無けれど」とかさくらに対して失礼なことを言わせました。申し訳ない。

成長期とは言え、ボインなさくらがどうしても想像付かなかったんでこの形容に落ち着いた……って何の話してんだ自分。

今回一番難しかったのが、知世デザインの服であったことは言わずもがな。

私ファッションとか色彩コーディネートに疎いにも程があるので、どうしようものかと。一度、服のイメージを実際にイラストで描いて、それを見ながら文章で表現するっていう少々回りくどい方法を取りました。

買ったばかりのコピックを使い、おっかなびつくりで初挑戦したカラーの挿絵は、さらにそのイメージ画を参考にしつつ、とりあえず外形だけざーっと描いて、似合いそうな色を後から入れて調整しております。重くてすいません。

いや大変でした。そしていい加減さくらの髪型に描き慣れたい。未だに毛先の流し方で四苦八苦中です。

この初カラー挿絵は色々と面白かったり残念だったりする制作過程があったりするので、またの機会に暴露したいなとかこっそり企んでる所存。

誰とでも仲良くなれる井上は、割とさくらと性格が似てますね。

どっちも天然で、喋り方とか思考パターンとかも似てる。でも井上の方が比較的アクティブで、さくらの方がポジティブだと思います。この天然ヒロインズ書いてると癒されます。姉妹みたいで。

ちなみに遊園地の名前『友座プレイパーク』の頭二文字は、友枝町の「友」と空座町の「座」で「友座」です。すっげえ単純ですけど

何か。

次回は別名「BLEACHメンバー危機一髪」。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4865p/>

The Shadow of VIOLETWING ー昏き翼の紫影ー

2011年3月7日23時47分発行